

【目次】

巻頭言 校長 恩知 忠司	1
I. 研究開発完了報告書	4
II. 研究開発の概要	
1. 北野高校の取組	20
2. 研究開発実施計画書	21
3. 平成30年度 SGH 推進校内組織	24
4. 平成30年度 北野高等学校 SGH の取組について	25
III. 本年度の取組	
1. 社会科	30
2. 英語科	45
3. 理科	57
4. 海外フィールドワーク・国際交流事業	72
5. 課題研究基礎	
基礎力養成講座	87
学校設定科目 国際情報	96
高校生公開討論会	103
第1学年講演会	107
6. 課題研究関係の発表会概要	113
IV. 成果について	
1. SGH 評価計画（評価の枠組み）	122
2. アンケート結果に見られる生徒の変容	123
3. 目標設定シート	132
4. SGH 運営指導委員会からの評価	134
～SGH 事業への取組の成果と課題	

資料

1. 平成30年度 教育課程
2. 構想調書の概要

巻頭言

いまここに SGH 事業を終えるにあたり、万感の思いがある。平成 28 年 9 月の中間評価で、全国 56 校中、特段に厳しい評価を受けた 2 校のうち 1 校が本校だったからである。

【評価】

「このままでは研究開発のねらいを達成することは難しいと思われるので、助言等に留意し、当初計画の変更等の対応が必要と判断される。」

【講評】

- 大学と連携して取り組んでいる生徒の伸長に係る研究成果の検証に関して、調査に基づく分析が不十分であり、今後、これらの分析や生徒の感じた問題点等に基づくカリキュラムの質を高めるような改善が必要である。
- それぞれの取組の連携が不十分で、全体として評価の方法が確立していないため、どのような成果があったのか見えず、工夫が望まれる。
- 数々の活動を実施しているように見られるが、構想調書に書かれている課題研究（4つのアプローチ）が実施されていないようである。構想内容や当初計画と実施内容に関する確認、また生徒の意識調査についてアンケート調査等で分析する等、取組全体の改善が必要である。

厳しい評価に呼応するように予算が大幅に削減され、選択と集中が迫られる中、我々自身が、まさに「課題研究」に取り組んだ 2 年半であった。

課題研究は、教育学的には探究的な学習に位置づけられる。探究的な学習では、【課題の設定】→【情報の収集】→【整理・分析】→【まとめ・表現】という 4 つのプロセスがスパイラル状に繰り返され深まっていかねばならない。また、与えられるのではなく、自ら課題を設定するという点が大きな特徴でもある。我々は、評価の講評を踏まえながら、次の 4 点を実践課題に据えて、具体的な実践とリフレクションを真摯に繰り返してきた。

課題 1 事業全体の枠組を分かりやすく示し、各取組の概要、意義とそれら相互の関連を明らかにすること。

課題 2 評価の枠組を明示し、その上で、アンケート調査や生徒の振り返りを有効に活用して検証すること。

課題 3 各取組においては、「何をしたか」、そして、「その結果どうなったか」を丁寧に記述しておくこと。

課題 4 【まとめ・表現】のプロセスを充実させるため、生徒が発表する機会、第三者に評価される機会を増やすこと。

やってみて分かったことは、「やってみな、分かんやん！」ということである。口であれこれ言ったところで、何事もやってみないと分からない、やってみて初めて分かることがたくさんある、ということである。

例えば、今年度の中間発表会でのこと。「しっかり質問しよう！」をテーマにすると、質疑応答がエライことになった。指導助言の先生方と生徒が入り乱れて、質疑が引きも切らず、そのせいで予定が 1 時間もオーバーした。運営側としては大失敗、しかし、指導助言の先生方からは、「発表もそれなりによくなったが、それ以上に、質疑応答の内容がすばらしかった、大学レベル」と褒めていただいた。北野生の面目躍如である。

また、今年は 2 年生の発表の場にできるだけ 1 年生を参加させた。すると、「学内留学」や「高校生公開討論会」に参加した 1 年生の主体性とパフォーマンスが向上した。1、2 年生の切磋琢磨。部活では当たり前だが、探究活動でも実証できた。

この報告書は、上記 4 つの課題に、この間、本校がどのように取り組んできたかが分かるように編集した。必然的に大ボリュームになったが、本校の SGH 事業の、いわば、ポートフォリオとしてお読みいただき、助言等いただけたら幸いである。中間評価を 5 段階で示すと「2」。これが、「3.5」にはなったのでは、というくらいの自負はある。

課題研究の真髄は、【まとめ・表現】のプロセスに至ること、また、新たな課題が生まれてくることである。SGH 事業で得た知見を活かし、新たに生まれてきた課題と正対して、来るべき、Society5.0 で活躍できる人材の育成に、今後とも取り組んで参りたい。



大阪府立北野高等学校
校長 恩知 忠司

I . 研究開発完了報告書

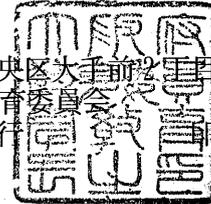
(別紙様式3)

平成31年3月29日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 大阪市中央区大手前2-1-1
管理機関名 大阪府教育委員会
代表者名 酒井 隆行



平成30年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成30年4月2日～平成31年3月29日

2 指定校名

学校名 大阪府立北野高等学校

学校長名 恩知 忠司

3 研究開発名

「アジアと学び合う一夢を実現する国づくり」

4 研究開発概要

大阪府立北野高等学校における「全地球的視野と歴史的教養に裏付けられた、豊かな人間性と知識をもち、自国の問題と世界の問題を互いに関係づけて把握し、理想の実現に向けて自ら行動をおこすことができるグローバルリーダーを育成するための教育プログラム研究開発」

以下のような研究内容でプログラムを実施した。

- ・ 東南アジアの現状と東南アジアの国づくりを知るための研究
(課題研究・アジア出身の講師による基礎力養成講座)
- ・ フィールドワーク法等、研究手法の習得に関する研究 (ハワイ及び東南アジアでの研修)
- ・ 論理的説明能力を養成するための統計的手法の習得に関する研究
(学校設定科目「国際情報」における統計的手法習得のための授業の実施)
- ・ 専門家や留学生を含むさまざまな人々との交流と研究成果の検証評価に関する研究
(取組と生徒の意識変容の相関関係を見るアンケートの実施)
- ・ 「超高校生レベル」英語によるコミュニケーション力を養成する研究
(学内留学、英語上級セミナー、即興型英語ディベート)
- ・ グローバルなプレゼンテーション力を養成する研究
(「国際情報」におけるプレゼンテーションスキルおよびディベートスキルの習得に関する授業及び発表)

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
①英語教育支援	→											
②海外研修支援				→								
③生徒の伸長の検証	→											
④運営指導委員会							○					○
⑤成果の還元普及	→											
⑥指導助言	→											

(2) 実績の説明

①英語教育支援

ネイティブ教員を複数名配置し、英語教育を支援

②海外研修支援

ミッション大学やシリコンバレーでの研修(府教育委員会主催)を実施

実施時期：7月28日(土)～8月5日(日)

目的：豊かな感性と幅広い教養を身に付けた、社会に貢献する志を持つ、知識の重要性が一層増すグローバル社会をリードする人材を育成するため、グローバルリーダーズハイスクール(GLHS)の代表生徒を海外の大学等へ派遣し、教育・文化交流活動等を通じて、国際社会に貢献できる真のリーダーとしての資質の向上と国際性の涵養を図る。

③連携大学による生徒の伸長の検証

関西学院大学による「SGH 生徒の成長の検証及びグローバル人材としての資質の検証」の調査研究を実施。相対的評価の検証のみでなく、形成的評価を重視し、SGH 生徒の志向性、価値観、知識、遂行力等の測定評価を試みている。

④運営指導委員会

2回(10/27、3/2)実施。第1回目は成果中間発表会と同日実施とし、生徒への指導助言を含め、指導の在り方について協議を行った。第2回目は成果発表会をうけて、次年度への方針と指導体制、支援の在り方について協議を行った。

運営指導委員： 山本 雅弘 株式会社 毎日放送 相談役最高顧問
 野村 正朗 学校法人 帝塚山学院 理事長
 織田 公文 日本・ベトナム経済交流センター専務理事兼事務局長
 中垣 芳隆 大阪女学院大学 教授
 楠野 宣孝 樟蔭中学校・高等学校 校長
 福本 美紀 大阪府教育センター 高等学校教育推進室指導主事
 堀内 貴臣 大阪府教育センター 高等学校教育推進室指導主事

第1回運営指導委員会 協議内容 於：校長室

i 中間発表会に出席された委員からいただいた助言

- ・毎年参加しているが、初期に比べて発表力が上がった。テーマに対するアプローチについては物足りなさを感じる。これからがんばってほしい。

- ・北野の全てのクラスで課題研究をやっていることは特筆できる。大人から見ると答えが分かかってしまいそうなテーマを選んでいる。高校生らしい身近な疑問点を大切に。ネットに頼らずスカイプなどを利用して「生の」情報を集めてほしい。
 - ・昨年度も発表を見たが、今年は発表の工夫が見られた。ポイントは「まず疑ってデータを見ているか、自分たちの発表が整合性を持っているか、オーディエンスに対して何を伝えたいのか、自分たちが楽しんでやっているか等」である。
- ii 中間発表用のルーブリックによる各グループの得点集計結果をもとに運営指導委員会の場で協議した結果、以下の4グループをそれぞれ外部で行われる大会や発表会に派遣することに決定した。
- ①SGH 高校生フォーラム (12月15日・東京) ポスター発表、英語で説明
 - 英語系4 (東南アジアに学ぶ授業中の眠気対策)
 - ②SGH 甲子園 (31年3月23日・関西学院大学)
 - 口頭発表またはポスター発表 英語または日本語
 - 社会系4 (“大国の脅威に屈しない” ラオス 発展のために)
 - ③大阪教育大学附属高校平野校舎の発表会 (31年1月12日) 口頭発表 日本語
 - 社会系2 (インドネシアで五輪開催を)
 - ④GLHS 10校合同発表会 (31年2月9日・大阪大学豊中キャンパス) 口頭発表 日本語
 - 理系3 (絵画と天文学)

第2回運営指導委員会 協議内容 於：校長室

- ・成果の普及が問われる。近隣の中学校や高校へも広く案内を。
- ・指導として、まずは方法論を年度当初にしっかりと伝えることで、内容も深掘りされる。
- ・できるだけ現地の声、生の声を数多く聴き、内容の質を高める。

⑤成果の還元普及

SGH 指定校と同様に課題研究に取り組む高校や、グローバル人材の育成や海外進学に関心の高い高校を中心に、SGHに係る活動状況や情報を発信した。また、2/4(日)(場所：大阪大学会館)府教育委員会が主催するグローバルリーダーズハイスクール(GLHS)合同発表会でSGHの研究成果を生徒が発表。発表に対しては評価に用いるルーブリックを府教育委員会が作成し、課題研究の質の向上を図り、その成果の普及還元を努めた。

⑥指導助言

担当課の複数の指導主事が、授業や研究実践への関わり、また次年度の計画の作成、報告書作成など、指導助言を通年にわたって行った。

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間（平成30年4月2日～平成31年3月29日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①教科・科目「課題研究」の授業・自主探究	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
②大学・企業との連携・探究型講演・講義	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
③研究発表会							○			○	○	○
④海外フィールドワーク				○								
⑤運営指導委員会開催							○					○
⑥成果の報告・広報活動	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑦事業評価の実施期間									○		○	
⑧報告書作成											○	○

(2) 実績の説明

平成28年度の厳しい中間評価の結果を受け、昨年度に引き続き本年度においても以下の課題1～4を設定し学校の総力を挙げて取り組んだ。

課題1	事業全体の枠組を分かりやすく示し、各取組の概要、意義とそれら相互の関連を明らかにすること。
課題2	評価の枠組を明示し、その上で、アンケート調査や生徒の振り返りを有効に活用して検証すること。
課題3	各取組においては、「何をしたか」、そして、「その結果どうなったか」を丁寧に記述しておくこと。
課題4	【まとめ・表現】のプロセスを充実させるため、生徒が発表する機会、第三者に評価される機会を増やすこと。

具体的な目標としては、研究としての質の向上と、英語による即興的なコミュニケーション力、情報発信力の充実である。アジアという難しいテーマを扱う中で、生徒は東南アジア＝貧困といった固定観念、上から目線をなかなか拭えない。それを克服するための基礎知識、歴史的背景、データ、論理的思考力の大切さに気付かせ、研究の質を向上させたい。また、発表のために英語の原稿を準備し、プレゼンテーションをするが、質疑応答になった途端に思考停止してしまう。この悔しさをコミュニケーション力の充実につなげたい。上記の観点から、今年度は英語による即興型ディベートの取組を拡充させた。

①課題研究、②大学・企業との連携・探究型講演・講義、③研究発表会・SGH校との交流・広報活動

＊月5限：社会系19名、英語系9名、理科系13名、

木5限：社会系19名、英語系10名、理科系14名

I. アジア探究（社会系）

4月～5月 東南アジア諸国に関する調べ学習、テーマ設定・グループ編成

4/21（土）京都大学東南アジア地域研究所教授 岡本正明氏による講演（全グループ共通）

6月上旬～自主探究

月曜班 対象国：ベトナム テーマ：観光（7名）

対象国：インドネシア テーマ：オリンピック（6名）

対象国：ラオス テーマ：鉄道（7名）

木曜班 対象国：東南アジア全般 テーマ：教育（6名）

対象国：マレーシア テーマ：民族間の格差（6名）
対象国：シンガポール テーマ：IR・統合型リゾート（7名）

8月～10月 ワークショップ

- ・東南アジア情報に関する助言（月・木各1回）
- ・東南アジアの情報および中間発表に向けて内容・論点等に関する助言（月・木各1回）

1/12（土）SGH 課題研究発表会（大教大附属高校平野校舎）へ参加（月・インドネシアチーム）

2月上旬～中旬 論文化作業 論文集は3月下旬刊行予定

3/23（土） 月・ラオスチームはSGH 甲子園に参加の予定である。

II. アジア探究（英語系）

英語系単独で関西学院大学社会学部陳立行教授による講義・ワークショップを計4回実施した。その後、テーマ別にグループ分けを行い、自主探究を行った。

- ①ミャンマーの教育改革。②東ティモールでの観光客誘致を中心にした開発。
- ③イスラーム文化と日本文化との比較研究。④東南アジアに学ぶ眠気対策。

11月～ 大阪大学大学院に留学しているアジア出身の留学生に指導助言者として10回来校

12/15（土）東京国際フォーラムにおけるSGH 全国高校生フォーラムに参加（英語系④グループ）

III. アジア探究（理科系）

【月曜班】

- ①「橋の科学～架設計画とパスタブリッジ」建築工学、構造力学、防災学などの観点から、橋梁架設について多角的に研究し、東南アジアへの貢献の可能性を探る。日本やアジア諸国は自然災害が多く、協力して防災への取組が進められている。この講座では橋の種類や基本構造を学び、東南アジアを対象地域として橋梁架設のシミュレーションを行う。さらに、身近な材料であるパスタを用いて橋の模型を作成し、強度に関する実験と考察を行う。
- ②「快適な建築と環境に関する考察」快適な建築の条件を探究し、快適さそのものを考察した。模型を作成し、温度や日照時間に関し測定実験した。本校校舎設計時の条件と利用者の要望の調査を行い、新たなデザインと可能性の提案を作成した。

【木曜班】「自然科学と論理的思考法」

自然科学と芸術の両方に関わる2種類の事象を探究し、論理的思考力を身につける。

- ①「才能の考察～天才時空論」才能を発揮し、過去に功績を残した人物を多数輩出した時代と地域についての検証と考察を行う。過去の事実を検証すると、洋の東西を問わず、革新的なアイデアの誕生は特定の時間と空間に集中する。その理由を探究し、人々が能力を発揮しやすい環境や条件を考察する。身近な地域の未来へ貢献の可能性を探る。
- ②絵画と天文学（絵画を天文学の観点で検証する）（信川久実子先生担当）
絵画に登場する天体の描写が正確なのかどうか、日時・場所・方角などの情報から、天文学（地学）の知識を使って検証する。

なお、本校における以下の校内発表会は社会系、英語系、理系とも共通である。

9/15（土）文理学科課題研究中間発表会（SGH 関連講座の生徒が司会・進行係を担当）

10/27（土）SGH 課題研究中間発表会（六稜ホール）

2/2（土）131 期課題研究最終発表会（系列ごとで異なる会場）

*プレゼンテーション形式の発表、SGH 英語系、社会系講座の発表は英語使用

③海外フィールドワーク

東南アジア研修（7/22～28）、ハワイ研修（7/22～29）を実施した。参加した生徒数は東南アジア 43 名、ハワイ 45 名であった。

④課題研究基礎講座「学内留学」

全4回（10/6, 12/8, 1/12, 1/19）の英語イマージョンプログラム。大学の教養課程をイメージした講座で、土曜日を利用して、専門知識を終日オールイングリッシュで学び、英語運用能力を鍛える取組。「教育学」、「ビジネス学」、「心理学」、「天文学」、「環境学」の5講座を開講、参加者は合計100名となった。最終回では、各講座から1グループが選出され、プレゼンテーションを多目的ホールでおこなった。全員に修了証書を授与した。

また、11/16（金）には、特別講義「EUがあなたの学校にやってくる」を開催した。

⑤課題研究基礎講座 学校設定科目「国際情報」

「国際情報」では「情報機器を操作して外国語での情報を受信し、また、外国語でのコミュニケーション力を高めて、情報を外国語で表現し、情報機器で情報を効果的に伝える知識や技能を習得させる」ことを目標にしている。

国際情報の時間は「情報」の部分と「研究基礎」の部分の2本立てで授業が構成されており、2年次に全生徒が課題研究を行う際の研究基礎としての位置付けが1年次の「国際情報」の役割である。そのために国際情報の時間では討議する力を付けることや、プレゼンテーション力を高めることに力を入れている。「情報」の部分は情報化社会のモラルやマナーを学び、情報機器の操作や表計算ソフトやマルチメディアを用いた表現やプレゼンテーションについて学習し、情報化社会の光と影、プログラミングの基礎としてのアルゴリズムや統計やデータサイエンスの基礎を学び情報技術を身に付けた。「研究基礎」の部分では教科横断的な取組を行い、文科と理科の両面からのアプローチで課題研究の基礎の部分を学んだ。今年度における「研究基礎」の実施形態は「情報科と英語科のチームティーチング」と「情報科と理科のチームティーチング」であり、これらを半期交代で行った。

⑥評価の実施

質問紙調査と授業時の参与観察（エスノグラフィ）、インタビューを併用して、取組の前後の生徒の変容を調べた。詳細は次項参照。

⑦報告書の作成

本年度の取組の総決算として、資料編も含めて5章から成る報告書を作成中である。何をしたか（アウトプット）、どうなったか（アウトカム）に特に焦点を当てて編集している。

7 目標の進捗状況、成果、評価

（1）取組の検証・評価方法について

①関西学院大学によるアンケート調査の活用

関西学院大学による「SGH 生徒の成長の検証及びグローバル人材としての資質の検証」の調査研究では、文理学科2年生の1年次と2年次の意識変化に焦点を当てた。SGH 対象の生徒（SGH 群）

は84名で、2年生全体を対照群とした。選択肢による質問15項目の回答を「ものすごくそう思う(6点)」から「まったく思わない(1点)」まで6点満点で数値化した。さらに、海外フィールドワークや学内留学に参加した生徒を抽出し、延べ21グループに分けて比較した。

SGH群全体・対照群全体も含めて全体345項目のうち、1年次から2年次にかけて数値が上昇した項目は123であった。上昇したグループが最も多かった設問は「Q10(日本以外の)先進国の人たちと個人的に交流したい」(22グループ)であり、次に多かった設問は「Q6海外支援活動に参加したい」(13グループ)であった。

また、SGH群84名と2年生全体(2年次のサンプル数346)の数値を比較したところ、総数30のうち28項目においてSGH群が上回っていた。最も大きな差がついた項目は「Q7海外で、いろいろなことにチャレンジしたい」で、1.246ポイントであった。詳細データは報告集を参照されたい。

②2年課題研究SGH関連講座受講生を対象としたアンケート

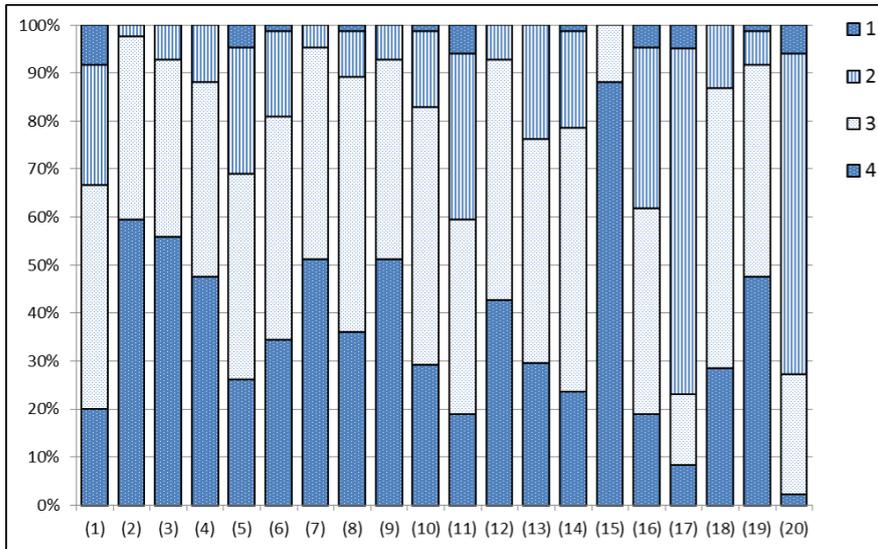
i 選択肢による回答項目についての検証

課題研究SGH関連講座を受講している生徒84名を対象に、年度初めアンケートを5月上旬に行い、さらに最終発表会後の2月上旬に同じ質問項目で事後アンケートを実施した。質問項目は以下の通りである。回答は、4(そう思う)、3(ややそう思う)、2(あまり思わない)、1(まったく思わない)の4件法とした。

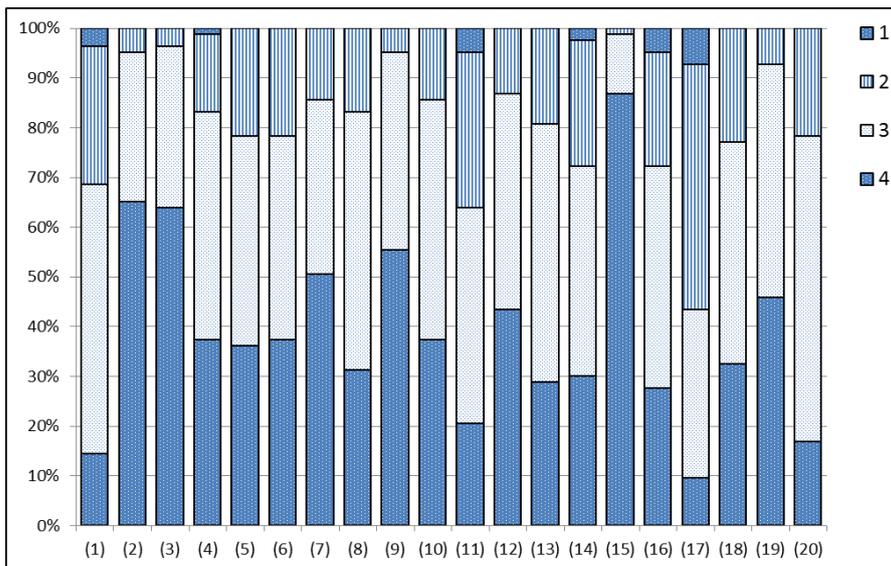
- (1) 英語でのコミュニケーションには抵抗がない
- (2) 海外でいろいろなことにチャレンジしたいと思う
- (3) 日本のことをもっと知る必要があると思っている
- (4) 開発途上国の文化や風土や政治経済の状況などについて知りたいと思う
- (5) 大学の先生や企業経営者と話をすることには抵抗がない
- (6) 東南アジアへの興味や関心を持っている
- (7) 東南アジア諸国への旅行や現地でのフィールドワークをやってみたい
- (8) 東南アジア出身の留学生と意見交換する機会を持ちたい
- (9) 将来は、仕事で国際的に活躍したいと思う
- (10) 地球規模で社会に貢献したいと思う
- (11) 卒業後は、海外の大学・大学院等で学んでみたいと思う
- (12) 世界的な問題について関心を持っている
- (13) 自分の考えを他の人に聞いてもらおうという思いが強い
- (14) 開発途上国の人たちと個人的に交流したいと思う
- (15) 英語によるコミュニケーション力を高めたいと思う
- (16) 人前で発表することには抵抗が少ない
- (17) 将来は、国連や国際NGOなどの国際的な機関で働きたいと思う
- (18) 開発途上国の経済発展に貢献したいと思う
- (19) 日本がより望ましい国になることに貢献したいと思う
- (20) 現在の段階で、課題を発見し、分析する力がついていると思う

84名による回答の分布は以下ようになった。

年度初め



事後



年度初めと事後における4件法の回答を数値化して平均をとり、比較したものが次の表である。

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)
年度初め	2.79	3.57	3.49	3.36	2.90	3.14	3.46	3.24	3.44	3.11
事後	2.80	3.60	3.60	3.19	3.14	3.16	3.36	3.14	3.51	3.23
差	0.01	0.03	0.11	-0.17	0.24	0.02	-0.10	-0.10	0.07	0.12
	(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)	(19)	(20)
年度初め	2.73	3.36	3.06	3.01	3.88	2.76	2.27	3.15	3.38	2.24
事後	2.80	3.30	3.10	3.00	3.86	2.95	2.46	3.10	3.39	2.95
差	0.07	-0.06	0.04	-0.01	-0.02	0.19	0.19	-0.05	0.01	0.71

肯定的評価の回答について、伸びが最も著しいのは(20)、次は(5)であった。

評価が難しいところであるが、①の関西学院大学によるアンケート調査結果と突き合わせてみると、現2年生(132期生)は、もともと意識の高い生徒がSGH関連講座を選択した傾向があるとみることができる。

その中でさらに指導助言者である大学の教員や企業経営者からのアドバイスを受け入れ、課題を発見し、分析する力を伸ばすことができたと考えられる。

ii 自由記述欄の回答に見る生徒の変容

年度初めアンケートでは、自由記述欄に「課題研究に取り組む上であなたが課題だと思っていることについて、自由に記してください」という問いを設定した。また、事後アンケートの自由記述欄には、「課題研究に取り組んだことを通じてあなた自身が身につけたことは何ですか？以下の欄に自由に記してください」という問いを設けた。年度初めと事後とで、同じ生徒による記述からその生徒の変容が顕著に見られた例を紹介する（下線は報告執筆者による）。

〈社会系〉年度初め

生徒 a 経済成長などとその国の人々の暮らしの関係性を調べてみたい（経済、政治と身近なことの関係）。

生徒 b 現地には事実上フィールドワーク等に行けず専門家や文献、時にはインターネットに頼るしかない以上どこまで調査対象国を深くまで追求できるのか（ということ）。

〈社会系〉事後

生徒 a 国の課題をどのように解決していくかという考え方が前よりも身についたと思う。プレゼンテーションの構成の仕方を学んだ。

生徒 b 大きく2つ身についたと思う。1つは情報集積力である。インターネットや文献から得られる情報は玉石混交、真偽のわからないものも多々あるが、この1年で取捨選択ができるようになったと思う。英語力も上昇したと思う。

〈英語系〉年度初め

生徒 c 英語で自分の考えていることをうまく伝えること。あまり東南アジアの状況を深く知っていないこと。

生徒 d 高校生にできる限度があるのでそこのバランスが難しい。深い問題についてできたら立派だけど大変そう。

〈英語系〉事後

生徒 c 実際その内容がどうであれ、問題解決に向けての改善案を考えることができた。また留学生と英語でコミュニケーションをとることで、少し英語で話すことへの抵抗がなくなったがまだまだ英語力が足りないと実感することだけであった。そしていつかミャンマーへ旅行に行きたい。

生徒 d これまでは答えのある問題を解くことが多かったが、1年間答えのない問題にじっくり向かい合ってきて、難しさに気付いた。そんな中でグループみんなでやるとなかなか進まなかったが、やらなくてもいいことを進んでするという大切さを学ばされた。

(理科系) 年度初め

生徒 e レポートなどをまとめる力がない。(使用するかはともかく) 英語があまり話せない。

生徒 f 圧倒的に知識が足りないのが特に課題だと思う。だから建築についての知識をもっと取り入れたいと思う。

(理科系) 事後

生徒 e 思い切った行動 (作者に連絡を取るなど) ができるようになった。英語を使う抵抗が減った。

生徒 f 研究をするときに前回の発表で論理的に弱い部分を見逃されずに指摘されたので、筋の通った発表内容にしようと努力した。最初は慣れなかったので大変だったが最終発表のときには論理的に考える力を身につけられたのでよかった。

③課題研究 SGH 関連講座中間発表時と最終発表時におけるルーブリックによる評価

課題設定力、研究基礎力、研究展開力、表現力、応答力の5つの観点7つの項目からなる評価シート(別掲)を作成し、あらかじめ生徒に提示した上で発表会当日に指導助言者による評価を行った。また、運営指導委員からは講評をいただいた。中間発表時の評価・講評を通して、研究手法や発表技法等に対する生徒自身の理解が深まり、改善が見られた。今年度は最終発表では、SGH 関連講座は複数の会場に分散して口頭発表を行ったため、全ての運営指導委員、指導助言者から評価を得ることができなかった。従って、SGH 関連講座の生徒は全ての発表が終わった後、六稜会館3階ホールに集合し、それぞれの系列の発表を見てくださった運営指導委員や指導助言者の先生方から講評をいただいた。先生方によるルーブリック表は当該のグループに手渡し、振り返りの材料とした。

参考に、今年度と同じルーブリックを用いて評価をした昨年度のSGH 関連講座と比較すると、上位3グループの平均点は以下の通りであり、ポイントの上昇が見られる。

平成29年度 1位 19.7 2位 19.3 3位 19.2

平成30年度 1位 22.5 2位 19.5 3位 19.3

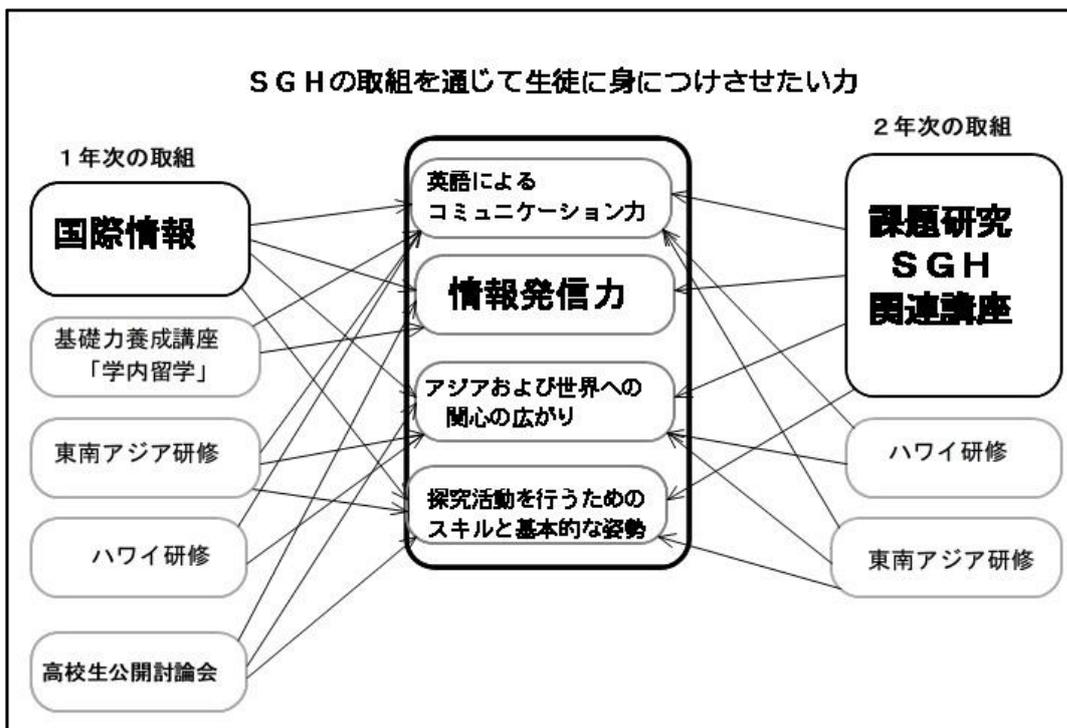
(2) 中間評価において指摘を受けた事項についての改善・対応状況

①「生徒の伸長に係る研究成果の検証に関して、調査に基づく分析が不十分」

前項(1)①～③の指標による調査・分析による検証を継続・改良して行った。課題研究 SGH 関連講座の受講生に対するアンケートは、今年度は2回に変更し、生徒の変容をより客観的にとらえることをめざした。運営指導委員等からの助言も要旨を記録して生徒や教職員に還元している。

②「それぞれの取組の連携が不十分」

構想調書で研究開発を行う上で課題と位置づけた3点(「英語によるコミュニケーション力」、「情報発信力」、「アジアおよび世界への関心の広がり」と日本についての再認識)に加え、SSH指定以来、本校で取り組んでいる「探究活動を行うためのスキルと基本的な姿勢」を「取組を通じて生徒に身につけさせたい力」と想定し、各取組の連携を下図のように位置づけた。



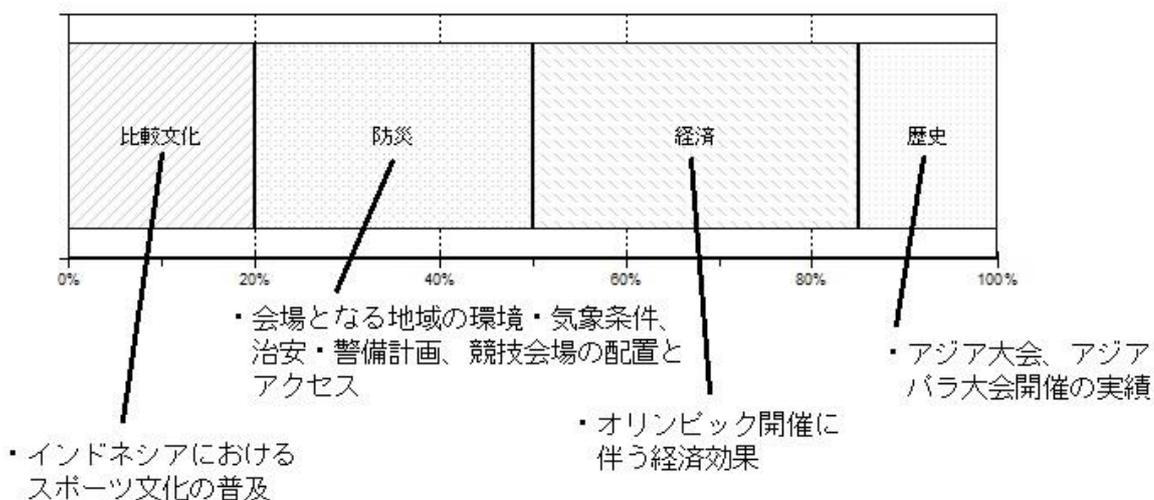
③「4つのアプローチが実施されていないようである。」

情報収集および分析の手法として、比較文化、防災（広義には貧困層の生活基盤・セーフティネットも含む）、経済（ビジネス）、歴史という4つの観点のいずれか、またはそれらを複合した視点に着目するよう各グループに指導してきた。その結果、4つの観点が截然と区別されるわけではなく、担当教員の専門分野によりアプローチの比重がグラデーションを描くことが分かった。

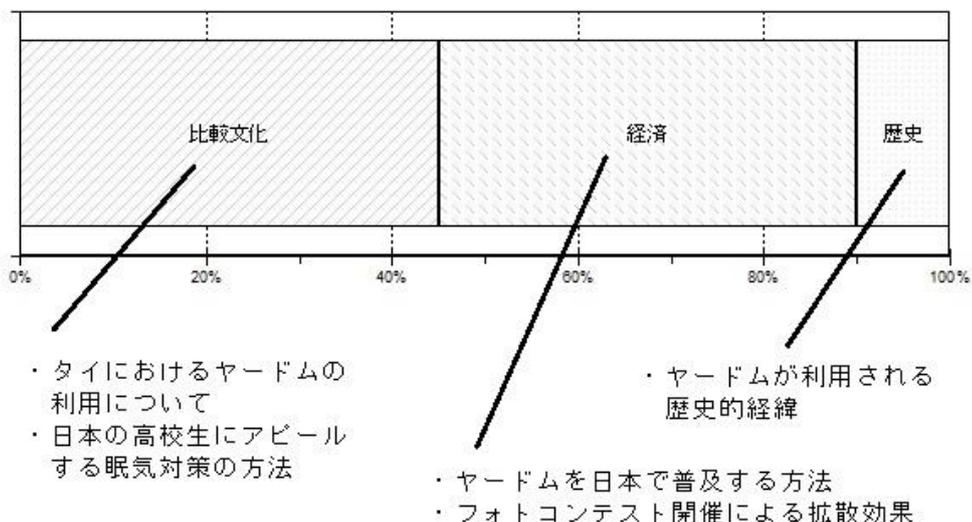
今年度の課題研究においても同様の傾向が見られる。参考までに社会系と英語系の例を示す。

社会系

インドネシアで五輪開催を



Stop Ourselves Sleeping ~What we learned from an inhaler in Thailand, YADOM~



なお、理系講座（橋梁など）は防災面からのアプローチに重点的に取り組んでいる。

8 5年間の研究開発を終えて

(1) 教育課程の研究開発の状況について

本校は平成26年度にSGHの指定を受けた。一方で本校も含めた大阪府立高校10校は平成23年度入学生より文理学科が設置された（グローバル・リーダーズ・ハイスクールGLHS）。本校でも新学科設置に対応するため、理数、英語、特別研究などの学校設定科目を設けた。文理学科の生徒が1年次で履修する国際情報や2年次において行う課題研究は、この特別研究の中の科目として位置づけられた。

SGHの指定を受けた後も、教科・科目の大幅な改変をすることなくカリキュラムを構築することが模索された。その結果、平成14年度から指定を受けていたSSHのカリキュラムのひとつとして新規に設けられ、指定終了後もSSコースの生徒が履修してきた2年次における課題研究の中にSGH関連講座を開設することにした。

SGHの取組を構築するにあたって、北野高校の卒業生（102期生）である京都大学東南アジア研究所准教授（当時）である岡本正明氏に指導助言をお願いした。その経緯もあり、北野高校SGHのテーマは、「アジアと学び合う一夢を実現する国づくり」に確定した。また、指定年度に入学してきた129期生に対しては、国際情報の中で情報科以外の教員とのT.T.の形式をとりながら英語文献の購読やプレゼンテーション、理科の実験・観察などの授業実践を行った。

また、近年では英語における4技能が重視される新学習指導要領の実施を念頭に置いて、スピーキングやプレゼンテーションなどの活動を重視した授業展開が行われるようになった。

(2) 高大接続の状況について

当初の構想では、海外の大学への進学者数の増加が目標として挙げられていたが、指定最終年度現在、達成されているとは言いがたい。これまでの本校の取組を継続しつつ、海外の教育・研究機関に対する生徒の関心を高めていくことがこれからの課題として挙げられる。

大学の単位履修制度の設置の有無に関しては、平成13年度から大阪大学との連携が始まり、大阪大学において主に1回生を対象として開講される「基礎セミナー」の講座を公開講座（高校生を対象とした授業公開）として設定し、本校の2年生が本校での授業を終えてから受講するという形態で始まった。この受講は、本校の特別研究に含まれる科目として単位が認定されるシステムであった。しかし、残念ながらこの制度は今年度で終了した。

(3) 生徒の変化について

本報告書の7(1)①で紹介した関西学院大学によるアンケート調査は、本校のSGH指定以来継続して行われている。ただし、初年度（平成26年度）は、SGH講座を選択した生徒のみ41人を対象に実施された。年度によって設問が微妙に異なる項目もあるが、類似の設問項目ごとにSGH群の生徒の回答から6件法を数値化した平均値の推移を表したのが次頁の表である。

関学によるアンケートの分析（SGH対象生徒のみ比較）

質問項目		128期	129期	130期	131期	132期
Q1	(日本以外の)先進国の文化や風土や政治経済の状況などについて知りたい。	4.29	4.06	3.95	4.06	4.26
Q2	日本のことをもっと知る必要があると思う。	4.93	4.61	5.00	4.42	4.52
Q3	地球規模で社会に貢献したい。	3.83	3.69	4.63	3.70	4.20
Q4	日本のことを他国の人もっと知ってほしい。	4.44	4.12	4.11	3.90	3.94
Q5	開発途上の経済発展に貢献したい	3.61	3.43	5.15	3.33	3.80
Q6	海外支援活動に参加したい。			3.55	2.95	3.65
Q7	海外で、いろいろなことにチャレンジしたい。	4.54	4.57	3.73	4.14	4.90
Q8	開発途上国の人たちと個人的に交流したい。	3.88	3.33	4.63	3.09	3.58
Q9	英語によるコミュニケーション力を高めたい。	5.59	5.22	3.50	5.20	5.39
Q10	(日本以外の)先進国の人たちと個人的に交流したい。	4.20	4.02	5.35	4.07	4.45
Q11	現在起こっている世界の出来事の背景や歴史について学ぼうと思う。			4.40	3.90	4.14
Q12	環境問題の解決に貢献したい。	4.07	3.55	4.10	3.94	3.70
Q13	開発途上国の文化や風土や政治経済の現状などについて知りたい。	3.93	3.76	3.78	3.62	3.82
Q14	国際的な展開をしている企業で働きたい。			3.48	3.79	4.49
Q15	国連や国際NGOなどの国際的機関で働きたい。			3.73	2.64	2.99

数値の大きな上昇が見られた項目を着色した。指定最終年度の2年生である132期生は、海外での活動について高い関心を示す傾向が見られる。

(4) 教師の変化について

指定初年度より、課題研究SGH関連講座や国際情報等を担当する教員を中心にSGH委員会を組織し、運営を担ってきた。年度の進行とともに、特に平成28年度入学の131期生からは学年の生徒全てが文理学科になったこともあり、SGH関連講座を受講する生徒数が増加した。それに伴ってSGHの事業に関与する教員数も増加した。例えば課題研究のSGH関連講座では、初年度は社会（地歴公民）科の教員のみが担当していたが、次年度からは英語科および理科の教員も講座を担当するようになった。

また、学年の生徒全てが文理学科になった学年からは、課題研究の全ての発表会を1日で行うようになり、2年学年メンバーを中心にほぼ全員の教職員が運営に関与するようになった。

(5) 学校における他の要素の変化について

授業については、先にも述べたように英語科において4技能を重視した授業展開の工夫がなされてきたこと、国際情報の授業に情報科以外の教科の教員が参画していること、課題研究SGH関連講座を担当する教員の範囲が広がってきたことなどが挙げられる。今年度については大阪教育大学連合教職大学院の院生が社会系グループのサポートに入っている。また、初年度に関西学院大学の協力を得て、課題研究において海外からの留学生や海外滞在経験のある大学院生・学部生を招致したワークショップを開催した。この取組は学生・本校の生徒双方にとって有意義であるという共通認識が本校教員の中で生まれ、以後の年度においても継続して行われている。

課題研究の発表会は保護者にも案内している。初年度から今年度まで、最終発表会を参観した保護者数は以下のとおりであった。

H26年度：194名、H27年度：141名、H28年度：86名、
H29年度：91名、H30年度：142名

また、大阪府の公立高校入試では、平成29年度入学生から出願の際に自己申告書の提出を求められるようになった。本校に出願する際に、自己申告書に「SGHの取組に関心がある」、「自分も(SGHの活動に)取り組んでみたい」旨を記載した受験生が見られる点も、SGH普及の成果の一端であると言える。

(6) 課題や問題点

中間評価において指摘された、改善が必要な点については、6(2)に記載したとおり、本校の全ての教職員が課題1から課題4を念頭に置いて実践を行っているところである。また昨年度からは、文部科学省による指定が終了した後の取組即ち後継事業に関しても校内で議論をすすめてきた。特に後継の取組において北野高校が掲げるテーマについては、教職員の間からさまざまな意見が出された。SGH事業立ち上げの際の経過があるとはいうものの、「アジアと学び合う一夢を実現する国づくり」という大テーマを設定したことにより、課題研究において探究活動のフィールドが限定されてしまったという指摘もなされた。現段階では、次年度以後の取組を本校の幅広い範囲の教職員によって担うことが可能になるよう、なるべく広汎で包括的な大テーマを設定することが望ましいという結論に至っている。

(7) 今後の持続可能性について

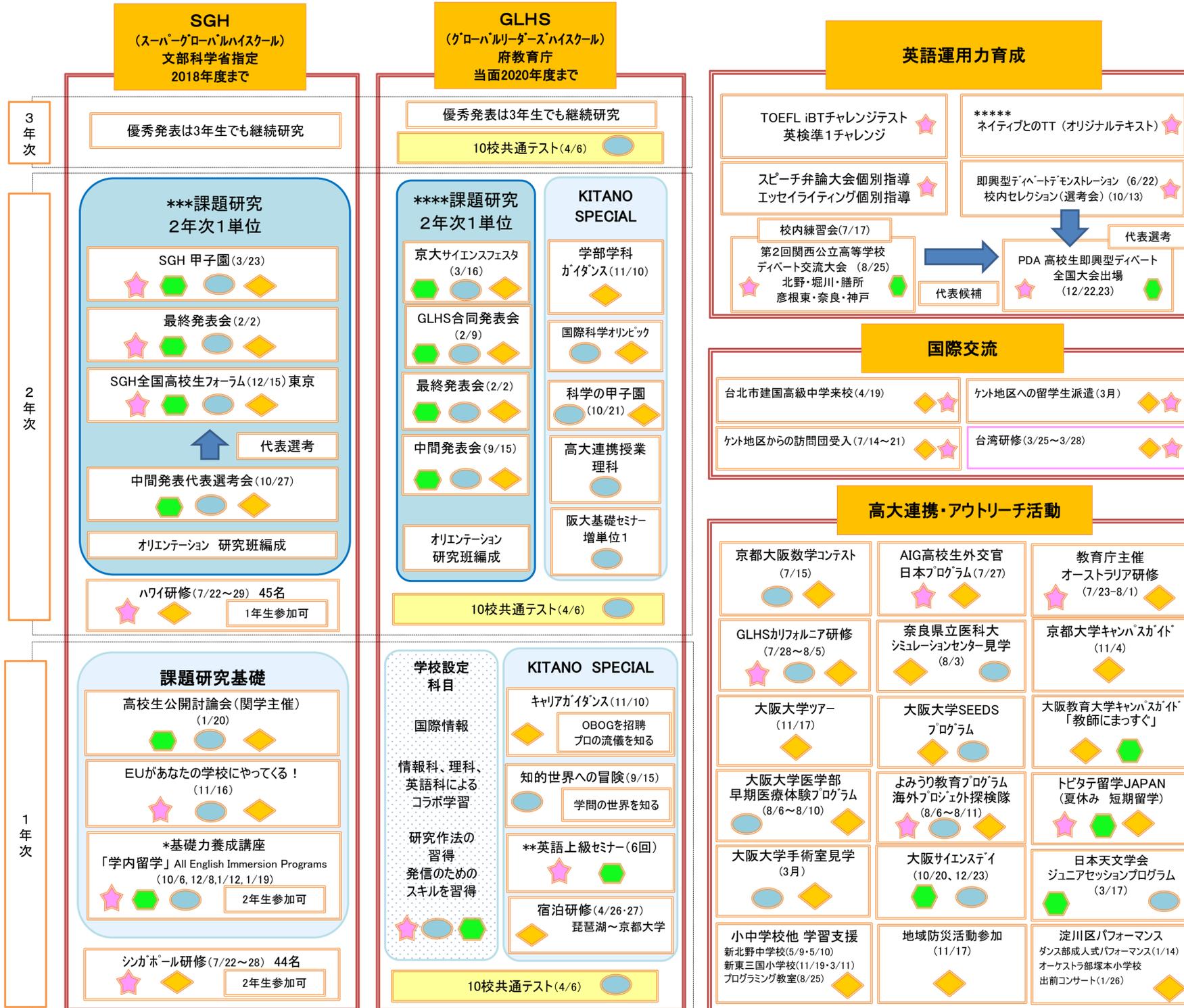
北野高校がこれまで培ってきた教育に関する先進的な取組は、平成26年度にSGHの指定を受け、カリキュラムの研究開発を行ってきたことによって新しい側面をアピールすることができたと考えている。これまでの取組のメリットを次年度以後に入学してくる生徒たちも最大限に享受できるよう、設置者である大阪府教育委員会と連携しながら引き続き模索していきたい。

【担当者】

担当課	教育振興室高等学校課	TEL	06-6944-7093
氏名	松下 信之	FAX	06-6944-6888
職名	主任指導主事	e-mail	MatsushitaN@mbox.pref.osaka.lg.jp

Ⅱ.研究開発の概要

1. 北野高校の取組(平成30年度版)



*** 課題研究基礎力養成講座「学内留学」** 1・2年生参加可
10/6, 12/8, 1/12, 1/19

・教育学(12名)・ビジネス学(30名)・心理学(30名)・天文学(19名)・環境学(10名)
+ 特別メニュー 「EUがあなただの学校にやってくる」(11/16)

**** 英語上級セミナー** 1・2年生参加可
5/26, 6/2, 7/21, 8/25, 9/8, 12/15

・英語による発信力に重点
・スカイプを用いたネイティブとのスピーキングテストをプレ・ポストに実施

***** SGH課題研究【月・木実施】** 6講座:84名 SGHアジア探究

・東南アジアを探究する ~歴史・文化・経済 (月・木各19名)
・比較文化的アプローチで探究する東南アジア (月9名, 木10名)
・橋の科学 ~架設計画とバスタブリッジ製作 (月13名)
・「天才時空論」および「絵画と天文学」 (木14名)

****** 課題研究【月・木実施】** 28講座:276名

・文章表現の可能性(月9名)
・日本語・日本文学の世界(木11名)
・大学入試問題を利用した open end approachの実践とその周辺(月9名, 木4名)
・心理学~統計的に分析する(月23名, 木24名)
・高校物理の実験についての研究(月6名)
・共振~その仕組みと現象を探る(月8名, 木12名)
・回転などなど(木14名)
・物理の目で周りをながめよう(木13名)
・食品の定量(塩分定量)(月5名)
・化学(ナイロン合成・凝固点降下など)(月8名)
・銅と硝酸の反応(月5名)

・化学(ガラス・染料・ゲル(木3名))
・ナットウキンを用いた培養実験(月4名)
・植物が拓く豊かな未来(木11名)
・天文分野・気象分野の観察・実験(月2名, 木3名)
・霊長類学実習(木6名)
・岩石・鉱物の顕微鏡による観察(木3名)
・スポーツ・健康を科学する(月11名, 木13名)
・音の研究(月14名, 木17名)
・課題研究 英語(月8名, 木8名)
・プログラミング カオスを描く(月7名)
・プログラミング LEGOを動かす(木8名)

******* ネイティブとのTeam Teaching (北野高校オリジナルテキスト)**

1年次 総合英語(Oral Communication)
1.Oral Communication Textbook
2.Active Learning Record Book
総合英語(Expression)
1.Textbook for First Year English Writing Class

2年次 異文化理解
1. Second Year Textbook - Further Progress in Extensive Reading and Communication Skills

3年次 英語表現
1. Textbook for Third Year English Writing Class

北野の流儀 ~他の追随を許さない「北野ブランド」~

学問の香り高いアカデミックな「北野ブランド」を徹底追求! 午前8時10分~65分間の5コマ授業から部活まで、授業第一主義&文武両道を貫きます。週末はオールイングリッシュの学内留学や知的世界への冒険、即興型ディベートなど、北野ならではのスーパープログラムで北野生を徹底的に鍛えます。



お問い合わせ
教頭 森田 里江子
TEL (06)6303-5661

英語運用力 4技能 Quick Reaction impromptu(即興性)

プレゼン力 発信力 話す・書く・やって見せる

高い学力 深く、そして バランスよく

リーダーシップ 健全なマインド 未来志向

北野生に身につけさせたい資質・能力

(別紙様式1)

平成 30 年 2 月 5 日

研究開発実施計画書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 大阪市中央区大手前2丁目
管理機関名 大阪府教育委員会
代表者名 教育長 向井 正博 印

1 実施種別

- 幹事校
 幹事校以外

2 研究開発名

「アジアと学び合う一夢を実現する国づくり」

3 研究開発の概要

大阪府立北野高等学校における「全地球的視野と歴史的教養に裏付けられた、豊かな人間性と知識をもち、自国の問題と世界の問題を互いに関係づけて把握し、理想の実現に向けて自ら行動をおこすことができるグローバルリーダーを育成するための教育プログラム研究開発」

以下のような研究内容でプログラムを実施する。

- ・東南アジアの現状と東南アジアの国づくりを知るための研究
- ・フィールドワークの方法等、研究手法の習得に関する研究
- ・論理的説明能力を養成するための統計的手法の習得に関する研究
- ・留学生・研究者をはじめ様々な人々との交流と研究成果の検証評価に関する研究
- ・「超高校生レベル」の英語によるコミュニケーション力を養成する研究
- ・グローバル世界で通用するプレゼンテーション力を養成する研究
- ・海外研修と研究成果向上との相関関係に関する研究

4 事業の実施期間

契約日～平成31年3月29日

5 平成30年度の研究開発実施計画

<添付資料>

- ・目標設定シート
- ・平成30年度教育課程表

①教科・科目の利用

【ステージ1 第1学年】

「総合英語」・「国際情報」等で、ASEAN諸国をテーマとした課題探究型の授業を展開し、情報獲得やディスカッションの方法、プレゼンテーション技術を習得する。

【ステージ2 第2学年】

「異文化理解」の授業等で、国際的課題とその解決に向けたコミュニケーション力を育成する。

【ステージ3 第3学年】

「英語表現」「英語演習C」の授業において、課題研究テーマに即した時事問題や経済論文を読み、社会課題をもとにしたレポートを英語で作成し、次年度のSGH課題研究の資料として利用する。

②大学・企業等との連携探究型講座

【ステージ1 第1学年】

土曜特別講座「学内留学」をSGH課題研究基礎講座と位置づけ、アジア探究のために必須となる、英語を通じた知識習得とディスカッション、および英語による発信力のさらなる向上をめざす。前年度同様5講座で実施する。

また、7月・9月・12月・2月のLHR等を利用して、グローバル化の時代に生きる人材を育成する観点から、「フィールドワークの楽しみ」「英語を生かす方法」「学問のグローバル化」などのテーマで、外部講師を招いた講演の機会を設定する。

【ステージ2 第2学年】(専門的講義の設定)

○SGHアジア探究の中核となる生徒を80名程度募集する(文理融合で募集)。以下のようなテーマで、土曜日・放課後・課題研究の時間(後述)を利用したアジア探究特別講座を受講し、専門的な知見と広い視野を養う。

○連携指導者

京都大学東南アジア研究所准教授岡本正明氏 「東南アジアへのまなざし」

関西学院大学社会学部教授難波功二氏 「広告と文化」

京都大学地域研究統合情報センター西芳実氏 「アチェに見る災害と地域社会」

JETRO助川成也氏 「日本企業とASEAN」

○月曜日5限、木曜日5限に実施。

○可能な限り、上記80名以外の生徒にも参加を呼びかける。

【ステージ2 第2学年】(教科・科目「課題研究」の利用)

○文理学科の全生徒が行う「課題研究」の時間(原則として週1時間)に、SGHアジア探究の中核となる80名も自主探究を行う。探究の基礎として、ステージ1で習得した基礎技術のほか、アジア探究特別講座の諸講義で得た知見も活用する。

○探究の目標を明確とするため、以下の3つのグループに分かれて探究を行う。

I 「東南アジアと考える国づくり」(経済的1・歴史的アプローチ)

II 「英語授業でASEANを学ぶ」(比較文化的アプローチ)

III 「科学技術とASEAN」(経済的2アプローチ)

○グループIとIIIでは、校内スタッフによる基礎講座のあと、少人数に分かれて探究を開始する。7月以降には研究者・院生・留学生・企業研究者とのワークショップの開催を重ね、探究対象国の情報や探究方法に対するアドバイスを得る。

○グループIIでは東南アジアに関する事象、特に移民・多民族社会に関する事象をテーマとした英語授業を依頼し、オールイングリッシュによる探究形式をめざす。

○連携指導者(主な連携者のみ)

京都大学東南アジア研究所准教授岡本正明氏ほか同研究所の先生方・院生・留学生

京都大学工学研究科教授金哲佑氏ほか同研究科の先生方・院生・留学生

株式会社Andeco代表取締役早川慶明氏ほか在阪の企業経営者

③研究発表会

○10/27(土)SGH中間発表会

京都大学・関西学院大学・在阪企業等からの指導助言者を予定

○2/2(土)文理学科・SGH最終発表会

SGHグループと共に文理学科の課題研究全グループが発表

京都大学・関西学院大学・在阪企業等からの指導助言者を予定

第1学年の全生徒にも参加させ、次年度へのステップアップを図る

○2/9(土)GLHS(グローバル・リーダーズ・ハイスクール)10校合同発表会

○3月中旬 第2回近畿地区SGH校・アソシエイト課題研究発表会

④海外フィールドワーク研修

【ステージ2 第2学年】

◇ハワイ 7/22(日)~29(日)に実施予定

移民社会に関する現地フィールドワーク・講演に関する研修とし、SGHアジア探究の深化に資する。

◇シンガポール 7/22(日)～28日(土)に実施予定

現地日系企業・パームオイル工場でのフィールドワークや現地学生との交流を行うほか、探究成果の発表を現地大学または高校で実施する。第2学年だけでなく第1学年の生徒の参加も認め、次年度の探究へのつながりも持たせる。

⑤ S G H 運営指導委員会

年間2回 S G H 運営指導委員会を開催し、 S G H 研究開発事業に対し、専門的な見地から指導・助言・評価を受ける。

⑥ 成果の公表・普及

- ・中間発表会と最終発表会の公開
- ・授業公開と研究協議の実施
- ・英語による学校ホームページの作成
- ・学校ホームページにおいて S G H 活動を公開

⑦ 事業の評価

ルーブリック等、教育学的手法による「生徒の成長の検証」を行う。また、それらのデータをもとに S G H 運営委員やその他大学教授、企業経営者による評価を受ける。

⑧ 報告書の作成

S G H 提言集冊子「これからの日本」及び各種報告書を作成する

6 事業実施体制

	実施場所	事業担当責任者
I 比較文化的アプローチ	大阪府立北野高等学校・京都大学 等	出口学 山本としこ
II 経済的アプローチ1	大阪府立北野高等学校・京都大学 等	
III 経済的アプローチ2	大阪府立北野高等学校・京都大学 等	
IV 歴史的アプローチ	大阪府立北野高等学校・京都大学 等	

7 課題項目別実施期間

業務項目	実施期間(平成30年4月2日～平成31年3月29日)											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①教科・科目「課題研究」の授業・自主探究	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
②大学・企業との連携・探究型講演・講義	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
③研究発表会							○				○	○
④海外フィールドワーク				○								
⑤運営指導委員会開催							○					○
⑥成果の報告・広報活動	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑦事業評価の実施期間									○		○	
⑧報告書作成											○	○

8 所要経費

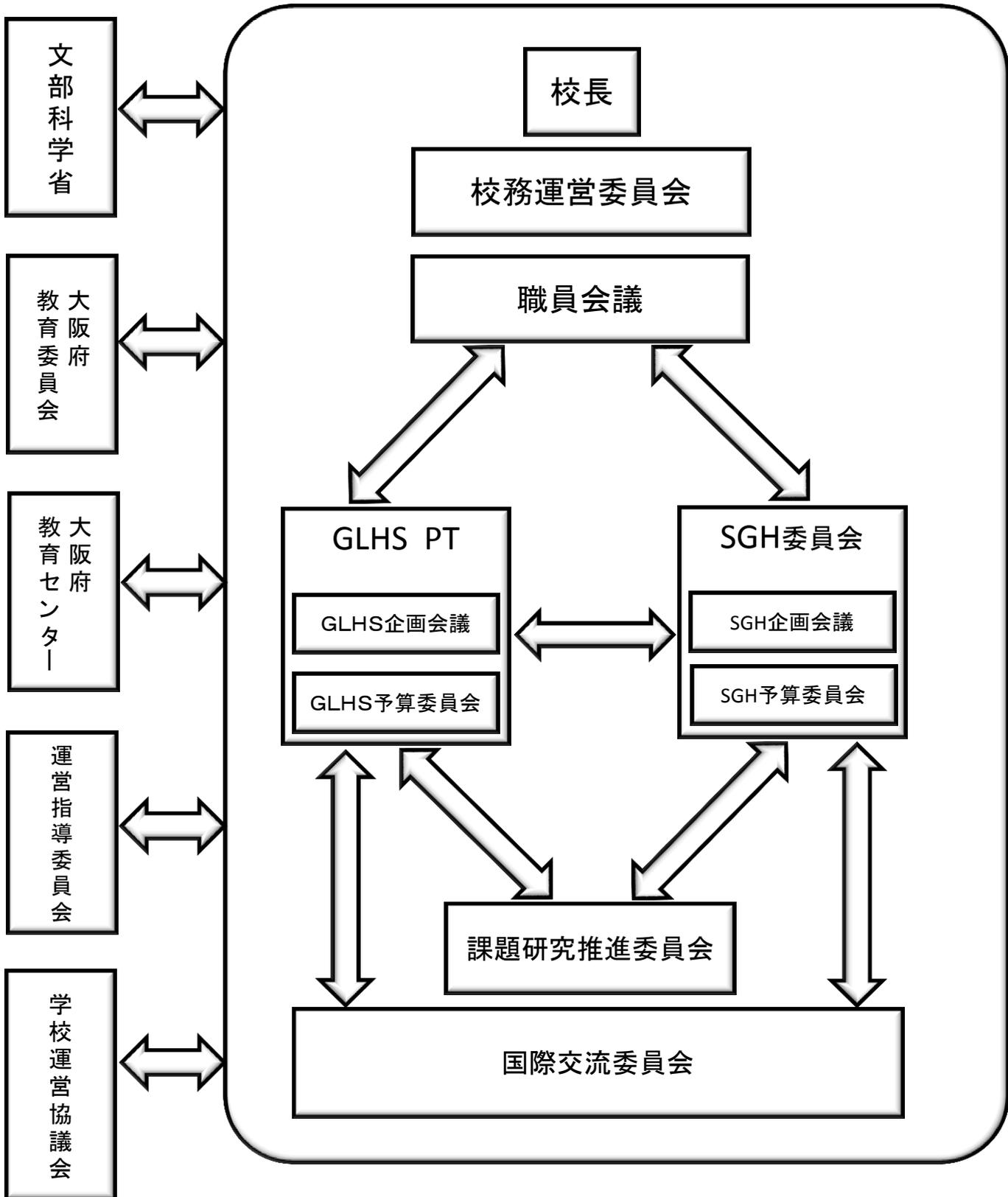
別添のとおり

【担当者】

担当課	教育振興室高等学校課	TEL	06-6946-2387
氏名	香月 孝治	FAX	06-6944-6888
職名	主任指導主事	e-mail	KatsukiKo@mbox.pref.osaka.lg.jp

3. 平成30年度 SGH推進校内組織

大阪府立北野高等学校 SGH組織図

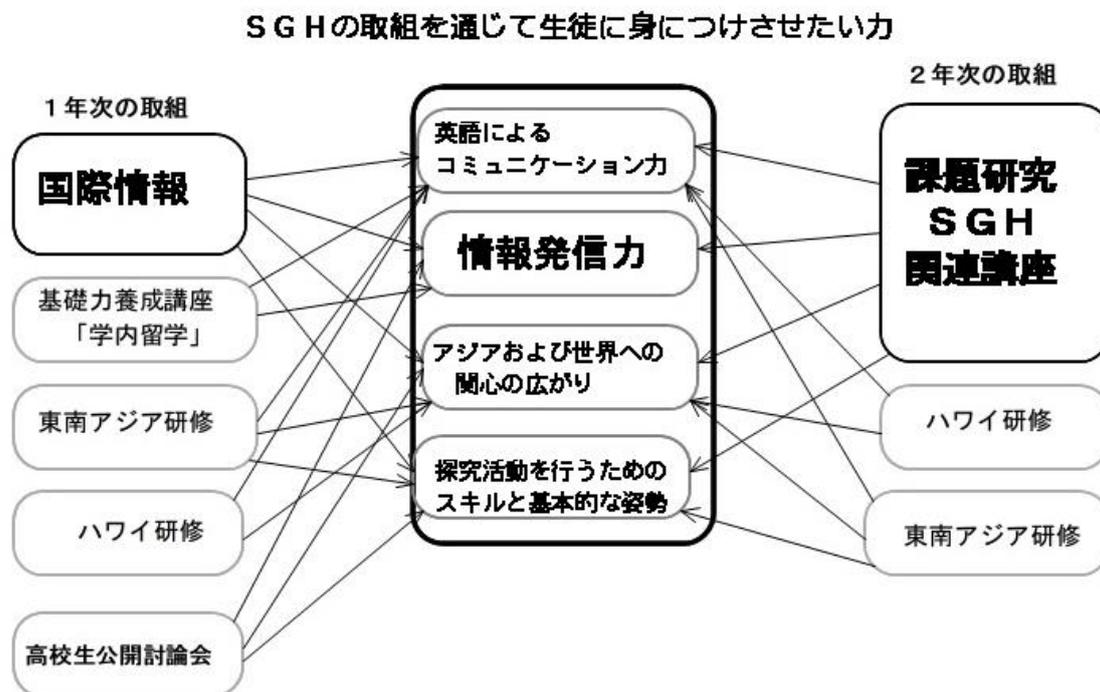


4. 平成30年度 北野高等学校 SGH の取組について

平成28年度の厳しい中間評価の結果を受け、昨年度に引き続き本年度においても以下の課題1～4を設定し学校総力を挙げて取り組んだ。

課題 1	事業全体の枠組を分かりやすく示し、各取組の概要、意義とそれら相互の関連を明らかにすること。
課題 2	評価の枠組を明示し、その上で、アンケート調査や生徒の振り返りを有効に活用して検証すること。
課題 3	各取組においては、「何をしたか」、そして、「その結果どうなったか」を丁寧に記述しておくこと。
課題 4	【まとめ・表現】のプロセスを充実させるため、生徒が発表する機会、第三者に評価される機会を増やすこと。

また、本校 SGH の取組を通じて生徒に身につけさせたい力を下図のように体系化し、個々の取組を関連づけるようにした。



本報告書ではそれぞれの取組についてのページに取組の目的、内容、成果、課題が述べられているので、この項ではそれぞれの取組に関して実施内容の概略を記すこととする。

1年次の取組

(1) 学校設定科目「国際情報」

国際情報の時間では討議する力を付けることや、プレゼンテーション力を高めることに力を入れている。「情報」の部分は情報化社会のモラルやマナーを学び、情報機器の操作や表計算ソフトやマルチメディアを用いた表現やプレゼンテーションについて学習し、情報化社会の光と影、プログラミングの基礎としてのアルゴリズムや統計やデータサイエンスの基礎を学び情報技術を身に付けた。「研究基礎」の部分では教科横断的な取組を行い、文科と理科の両面からのアプローチで課題研究の基礎の部分を学んだ。

具体的な内容は文科では「英語ディベート」と「文科グループ発表」を行った。理科では、実験を実際に行い、実験の目的・方法・結果・考察を考えてスライドを作り、結果のデータを用いて図、グラフ、表、写真、動画等による表現方法を取り上げ、実験に関するグループ発表を行った。

(2) SGH 課題研究基礎力養成講座（学内留学）

課題研究基礎力養成講座（学内留学）は、2年次「課題研究」の基礎力養成講座であり、レクチャー、ディスカッション、リサーチ、プレゼンテーション等を通して、英語の4技能、思考力、情報収集力、分析力、まとめ・表現力を一体的に鍛えることを目的として実施している。

今年度は4回（10/6、12/8、1/12、1/19）にわたって英語イメージジョンプログラムを実施した。大学の教養課程をイメージした講座で、土曜日を利用して、専門知識を終日オールイングリッシュで学び、英語運用能力を鍛える取組である。「教育学」、「ビジネス学」、「心理学」、「天文学」、「環境学」の5講座を開講し、参加者は合計100名となった。最終回では、各講座から1グループが選出され、本校多目的ホールにおいてプレゼンテーションを行った。受講生全員に修了証書を授与した。

また、11/16（金）には、学内留学受講生以外の生徒や保護者も参加可能な特別講義「EUがあなたの学校にやってくる」を開催した。

(3) 高校生公開討論会

この取組は、本校がSGHの指定を受ける際に提携関係を結んだ関西学院大学から、平成27年度に本校生徒の参加について要請があったことに端を発する。毎年、現代の世界で起きている諸問題（移民、エネルギー、国家間の経済連携など）に関するテーマが与えられ、それについて招待校の生徒たちが探究活動を行いながら自分たちの意見をまとめ発表する。さらにこの会に参加したSGH関係他校の生徒たちと討論する時間も設定されている。

今年度は平成31年1月26日（土）、関西学院大学にて開催され、1年生12名、2年生1名の有志メンバーが参加し、発表と活発な討論を行った。

なお、1年生の全生徒を対象にSGH委員会と学年との共催で外部講師による講演を行っており、今年度は平成31年1月11日（金）および2月1日（金）のいずれも3限に本校多目的ホールにおいて実施した。

2年次の取組

課題研究 SGH 関連講座

学校設定科目である課題研究は、本校が平成14年度から文部科学省の指定を受けていたSSHのカリキュラムのひとつとして新規に設けられ、指定終了後も大阪府のコース制度によるSSコースの生徒が履修してきた。SGH指定を受けて、2年次に文理学科の生徒が履修する課題研究の中にSGH関連講座を開設することにした。

SGH取組の構築にあたっては、本校の卒業生（102期生）である京都大学東南アジア研究所准教授（当時）である岡本正明氏に指導助言をお願いした。岡本氏の専門分野は東南アジアの政治・経済である。その経緯もあり、北野高校SGHのテーマが、「アジアと学び合う一夢を実現する国づくり」と設定された。

課題研究SGH関連講座は、この講座を選択した生徒たちが東南アジア諸地域の文化や歴史、現状を学ぶという探究活動を通じて「国づくり」について多角的な視点から考察し、グローバルイシューに対する問題意識を高めるとともに、グローバルスケールで思考力や発信力を身に付けることを目的とした。また、生徒たちの探究活動に資するため、SGHの予算を活用して東南アジアに関連する書籍を購入し、本校図書館閲覧室の一角に設けたSGH関連図書のコーナーに陳列した。このSGH関連図書のコーナーは、その後SGH関連講座の生徒たちが探究活動に取り組むためのいわばベースキャンプとなった。

探究活動の対象が海外であるため、書籍やインターネットからの情報だけでは実感が伴いにくい場合も多々見られる。そこで初年度に関西学院大学の協力を得て、課題研究において海外からの留学生や海外滞在経験のある大学院生・学部生を招致したワークショップを開催した。この取組は以後の年度においても継続して行われている。

課題研究は年度の進行とともに、特に平成28年度入学の131期生からは学年の生徒全てが文理学科になったこともあり、SGH関連講座の受講を希望する生徒数が増加した。それに伴って初年度は社会（地歴公民）科の教員のみが担当していたSGH関連講座は、次年度からは英語科および理科の教員も担当するようになっている。

学年の生徒全てが文理学科になった131期生の2年次からは、課題研究の全講座の最終発表会を1日で行うようになり、ほぼ全員の教職員が運営に関与する体制になった。課題研究の発表会は保護者にも案内しており、毎年100名前後の保護者が参観に来られる。

海外研修の取組

(1) 東南アジア研修

生徒の英語によるコミュニケーション力・情報発信力の向上と、現地での生活を体験することを通じてアジア社会に対する視野を広げること、経済成長著しいアジアの都市でのフィールドワークを通じて、「4つのアプローチ～文化・経済・防災・歴史」を意識した本校のSGH課題研究において生徒が行う探究活動に資することを目的としてSGH指定初年度から導入された。今年度は課題研究に向けた動機づけという目的から、1年生の定員枠を拡大して参加の機会を保障し、7月22日から28日の日程で1年生39名、2年生4名が参加した。

(2) ハワイ研修

生徒の英語によるコミュニケーション力の向上と、ハワイの文化や移民の歴史などを学習することを通じて世界に向けて開かれた視野とグローバル社会に対応できる資質を身につけることを目的に、本校がSGHに指定される1年前の平成25(2013)年度から始まった。今年度は7月22日から29日の日程で1年生10名、2年生35名が参加した。

3年次の取組

学校設定科目「英語表現」

本科目が2年次の課題研究を履修した後に履修する科目であることから、教科「英語」の科目としての狙いに加えて、時事問題や経済論文を読み、社会課題に係る英文を論理的に作成することを通じて国際的な課題に対する興味や関心を拡大させていくことを目的とし、生徒が2年次までに体得したSGH関連カリキュラムの成果を3年次において発揮させる場として位置づけている。

Ⅲ. 本年度の取組

1. 社会科

〈目的〉

東南アジア地域の自然環境や歴史・文化、経済等についての知識を獲得し、それに基づいて日本との比較を意識しながら探究活動を行う。探究活動を通じて、それぞれの国・地域の人々が持続可能な成果を享受することができる関係を築いていくことをめざす。また、生徒の創造性・科学的な思考力・判断力を養うとともに、グループ活動に必要な自主性・協調性を育成する。また、それぞれの探究の成果について発表する機会や論文としてまとめる機会を設け、プレゼンテーション力や報告書作成力の向上も図る。

〈内容〉

本年度のSGHアジア探究（社会系）講座は、月曜日5時限（以下月曜班と呼ぶ）および木曜日5時限（以下木曜班と呼ぶ）を中心とした2講座の開設となった。また、指導担当は月曜班には黒田教諭・伊藤教諭2名および大阪教育大学大学院教育実習生の水野氏、木曜班には濱辺教諭・伊藤教諭・六反田非常勤講師の3名が当たることになった。

また、本講座はその取り扱う内容と定員の都合上、昨年度は文系の生徒に限定して受講希望を募集したが、本年度は定員数を1.5倍に拡大させたことおよび探究方法に変化を持たせるため、文系・理系を問わず募集することとした。その結果、月曜班、木曜班ともに19名の生徒から構成されるに至った。内訳は月曜班は文系13名、理系6名、木曜班は文系9名、理系9名である。両班ともに、期間の多少のずれはあるものの、年間を通じて同内容で並行して講座を進めた。

1. 活動の場所、方法（手段）および記録

本講義はその取り扱う内容の性格上、調査対象の舞台となる東南アジアに関する文献が最も充実している図書館閲覧室を主たる講義・活動の場所とした。また、プレゼンテーションの準備や練習をするために視聴覚室も適宜利用した。

また、主に自由探究する方法も特に制限を設けず、文献以外にもスマートフォン等の持ち込みを認め、必要に応じ使用してもらった。

そして、1時間の活動や得た内容を記録するために、毎時の活動に合わせて項目にアレンジを加えたプリント「研究ノート・メモ」を生徒に配布した。この中に1時間の探究内容を記録をさせ、当授業時または次授業時に回収した。その内容を担当教諭間で確認し、探究の進み具合を共有することとした。

研究ノート・メモ（探究活動・ワークショップ）		
記入者	組 番 氏名	グループ名
活動日時	4月24日（月） 13:55 ~ 15:00	
活動場所	視聴覚室・図書館	
指導・出席者		
調査国		
この国に興味を持った理由を説明してください。		
この国が海外に誇れるアピールポイントを3つ説明してください。		
※提出日時 次授業時		

〈研究ノート・メモ〉

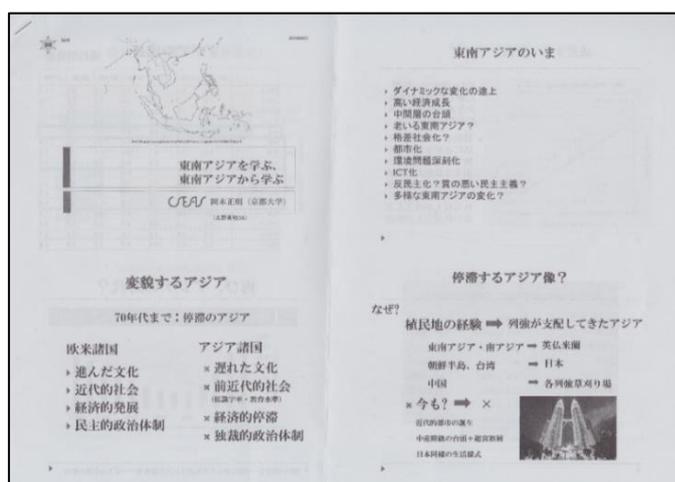
2. 日程

	月曜班(時間数)	木曜班(時間数)	活動内容
①	4月16日(1)	4月12日(1)	・課題研究説明会
②	4月23日(1)	4月19日(1)	・講義「なぜ課題研究をするのか」 ・講義「課題研究の進め方」 ・説明「SGHについて」
③	4月21日(1)	4月21日(1)	・岡本正明氏 (京都大学東南アジア研究所教授) 講演 「東南アジアを学ぶ、東南アジアから学ぶ」
④	5月上旬 ～5月中旬(2)	4月下旬 ～5月上旬(2)	・導入～東南アジアの国に関する調べ学習 ・グループ編成
⑤	5月下旬 ～6月下旬(4)	5月中旬 ～6月中旬(4)	・テーマの設定 ・テーマの絞り込み・設定 ・テーマに関連する自由探究
⑥	7月上旬 ～7月中旬(2)	6月下旬 ～7月中旬(3)	・進捗状況報告会・意見交換会 ・進捗状況報告会・意見交換会を受けて検討 ・夏季休業期間中の探究活動計画
⑦	8月下旬 ～9月上旬(3) (ワークショップは 9月3日)	8月下旬 ～9月上旬(2) (ワークショップは 8月30日)	・第1回ワークショップに向けて質問事項整理 ・第1回ワークショップ ～東南アジアの情報に関するアドバイス～ ・第1回ワークショップを受けて問題点を検討
⑧	9月中旬 ～10月下旬 (3) (ワークショップは 10月3日)	9月中旬 ～10月下旬 (6) (ワークショップは 10月4日)	・中間発表準備 ・第2回ワークショップに向けて質問事項整理 ・第2回ワークショップ ～東南アジアの情報および中間発表に向け て内容・論点等に関するアドバイス～ ・第2回ワークショップを受けて問題点を検討 ・中間発表最終準備
⑨	10月27日 (1)	10月27日 (1)	・中間発表
⑩	11月上旬 ～1月下旬(8)	11月上旬 ～1月下旬(8)	・中間発表を受けての内容再検討 ・テーマに関する自由探究 ・発表内容の最終仕上げ ・発表内容の英訳 ・最終発表直前準備
—	1月12日(1)	—	・SGH課題研究発表会 (主催：大阪教育大学附属平野校舎)へ参加 参加チーム：月曜インドネシアチーム

⑪	2月 2日(1)	2月 2日(1)	・最終発表
⑫	2月上旬 ～2月中旬(2)	2月上旬 ～2月中旬(1)	・論文作成
—	3月23日(1)	—	・SGH 甲子園 (主催：関西学院大学)へ参加 参加チーム：月曜ラオスチーム

3. 活動内容詳細 (以下「2. 日程」の番号に即して記す)

- ① 課題研究の各講座の概要について説明を、月曜班、木曜班それぞれ1時間を費やして行う。その後、生徒に講座の希望を提出させ、講座編成を行った。その結果、社会系(月曜班)、社会系(木曜班)ともに19名ずつの生徒から講座が構成されることとなった。
- ② 課題研究の意義、進め方についての講義およびSGHについての説明を行った。通常の課題研究とは違うSGH課題研究の特殊性も併せて知ってもらうことが狙いである。
- ③ 京都大学において岡本正明氏(本校卒業生:京都大学東南アジア地域研究研究所教授)による講演「東南アジアを学ぶ、東南アジアから学ぶ」をSGH課題研究選択生徒は原則として聴講する。岡本氏は本校のSGHの取り組み発足以来、課題研究などの探究活動に対してご指導をいただいている。講演の内容は、東南アジアを中心としたアジアの経済成長およびそれに伴う経済格差問題、ICT化など多岐にわたるもので、最後に日本と東南アジア双方の視点から見たそれぞれに対する関りについて説明をいただいた。生徒達にとって「東南アジア」のダイナズムを感じとり、「東南アジア」探究に対する興味をさらに深くする非常に有意義な時間となった。



〈講演レジュメより〉

- ④ 実質的には当時期より生徒たちによる探究活動がスタートした。
まず、中間発表、最終発表を経て論文の作成に至る年間のスケジュールを活動予定内容も含めて説明した。その際、極めて限定的な活動時間のため、スケジュール感を持って効率的に進める必要性を強調しておく。また、情報共有などの際に必要となるお互いのコミュニケーションツールを早期に確立させておくことも伝えた。

次に生徒それぞれが1か国ずつ分担して、「東南アジア」地域の全11か国を対象に以下に挙げる共通のテーマを調査、発表してもらおう。国の割り振りは、個々の希望も生徒同士の相談によって、うまくなされていたようである。

共通テーマ

その1「この国に興味を持った理由を説明してください」

その2「この国が海外に誇れるアピールポイントを3つ説明してください」

発表は、黒板に調査結果の要点のみを表現し、約3分間の発表をする。その間、聴き手側も内容について要点や気づいた点を記録させる。これらの個々の活動に対し、「テーマに沿った調査」、「調査内容の取りまとめ」、「発表の仕方」等について指導担当から助言や感想をその場で添えた。

- ⑤ 「探究したい国(3カ国)とそれぞれの課題(2点以上)」の希望を個々に提出させた。可能な限り希望に沿うこととするが総合的に見て希望に近い生徒の6名ないしは7名のチームを月曜班、木曜班それぞれ3チーム編成した。

次に各チームの探究する国(対象国)とテーマを決めさせる。チーム内で個々の意見を尊重しつつ、折り合いをつけて一丸となって取り組める内容が必要となる。探究する内容として面白味のあるものか、無理のないものか、チーム内で議論が交わされている。手分けをして、現代の課題、研究事例を調査したり、時には探究方法、結論を想定しながら国とテーマを絞り込んでいる。結論として、決定した内容は次のとおりである。

月曜班 対象国：ベトナム テーマ：観光 (7名)

対象国：インドネシア テーマ：オリンピック (6名)

対象国：ラオス テーマ：鉄道 (7名)

木曜班 対象国：東南アジア全般 テーマ：教育 (6名)

対象国：マレーシア テーマ：民族間の格差 (6名)

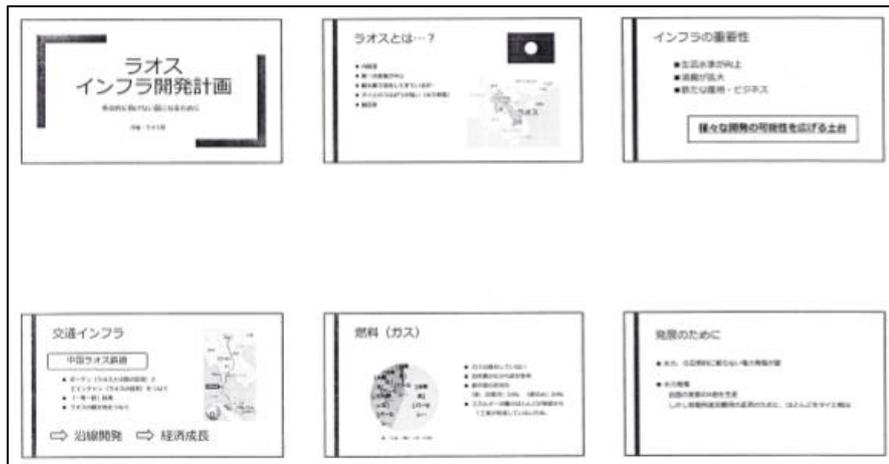
対象国：シンガポール テーマ：IR・統合型リゾート (7名)

(以下 月曜 ベトナムチーム・インドネシアチーム・ラオスチーム

木曜 東南アジアチーム・マレーシアチーム・シンガポール と表現する)

上記を一見しただけではわかりづらいが 実は対象国あるいは地域から政策の成功例・失敗例を学び、日本ないしは他国に応用しようとするものが多くなっていることが本年度のテーマの特徴となっている。

- ⑥ 進捗状況報告会・意見交換会を実施した。日は浅いながらも探究した内容をまとめ、報告をすることにより、今後(特に夏季休業)における探究活動の指針を明確化することができた。意見交換会では、相互の発表から、気づき合う、または学び合う力を持ってもらうこともできたようである。



〈报告会・意見交換会に出されたレジュメの一例〉

⑦ 第1回のワークショップを開いた。なお、過去の実績からワークショップの開催が大変有効であるという認識のもとで本年度も今回を含め、計2回実施した。ワークショップでは東南アジア地域を研究対象として実際に現地滞在経験のある関西学院大学の学生4名に月曜班および木曜班への助言者となってもらい、グループディスカッションの中に入れてもらうことで詳細な情報やアドバイスを得るものである。ワークショップの前の講座では1時間を使い助言者に説明する「探究のこれまでの経験」や「質問・相談事項」などをまとめる時間とした。

ワークショップの中で、現地での生活を経験した方ならではの詳細で具体的な内容の知見や今後の探究についての助言も多く得ることができ、満足度の高い時間となった。



〈これまでの探究活動の説明〉



〈TA よりアドバイスを受ける〉

⑧ 第2回のワークショップを開いた。今回も月曜班、木曜班それぞれ前回のワークショップに参加いただいた方と同じ関西学院大学の学生4名に参加してもらった。ただし、今回は中間発表の準備期間と位置づけた。すなわち、各チームから中間発表のつもりで発表してもらい、学生4名には中間発表の内容を聞く側、第3者の立場としてアドバイスを受ける。発表の内容は勿論のこと、発表の仕方まで詳細なアドバイスを受けた。

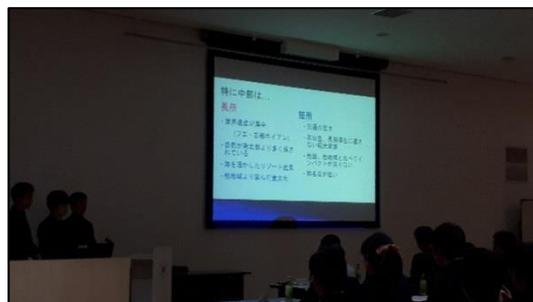
ワークショップ後、得た内容を基に論理構成の再構築を行わせた。そして、プレゼンテーション時のスライドとして用いるパワーポイント資料の作成を経てプレゼンテーションの練習をし、中間発表の準備とした。



〈中間発表の練習〉

⑨ 本校内六稜会館で中間発表が行われた。発表は、パワーポイント資料も含めて日本語を用いた。各チームのタイトルおよび概要は下記のとおりである。

月曜	ベトナムチーム	「ベトナムを観光大国へ」
	インドネシアチーム	「インドネシアで五輪開催を」
	ラオスチーム	「大国の脅威に屈しないラオス発展のために」
木曜	東南アジアチーム	「東南アジアから学ぶ日本の教育」
	マレーシアチーム	「マレーシアの政策から考える南アフリカの格差 是正に向けた政策」
	シンガポールチーム	「日本におけるカジノ成功のために」



〈中間発表の風景〉

発表後に出席いただいている指導助言の先生方から講評をいただいた。その中では、課題そのものの不明瞭さ、実験・実証などのエビデンスの不足を指摘する意見も多かった。また、中間発表後、出席された指導助言の先生方にルーブリックに基づいた評価をしていただいた。その中でも高評価を得た「月曜インドネシアチーム」がSGH 課題研究発表会（主催：大阪教育大学附属平野校舎、1月12日実施予定）へ、同じく「月曜ラオスチーム」がSGH 甲子園（主催：関西学院大学、3月23日実施予定）へ代表として参加することが決定した。

⑩ 最終発表に向けて仕上げの段階に入った。まず、中間発表時のビデオを見ることによ

り、発表内容および頂いた講評を振り返ることとした。これにより、発せられた生徒達の反省は、先述の中間発表時の指導助言の先生方のご指摘内容を大変真摯に受け止めたものが多かった。

最終発表まで残り僅かな期間となっていたため時間外にも協力して効率よく自由探究を進めることとして、再スタートを切った。また、この期間の探究活動の中で、例年になかった試みが行われたので3点紹介する。

- ・街頭でのアンケート調査

月曜ラオスチームが、「ラオスの魅力」についての認知度・イメージをはかるため、平成30年12月のある日ある時間帯においてJR大阪駅駅前にて街頭アンケート調査を行った。アンケート調査は本年度に限らず例年本校内の生徒を対象サンプルとして行われてきたが、対象サンプルを校外に求めたのは私の知る限りでは初めてのことである。調査を手分けしておこなった結果、目標とする100人からの回収は想像したより早く終えたようである。

- ・来日されている東南アジアに暮らす方へのインタビュー

本校の指導助言を行っていただいている企業経営者の方の紹介で、インターンシップで来日されているマレーシア人、インドネシア人、マレーシア在住のスーダン人の方々3名を本校へ招聘し、月曜日および木曜日に課題研究の時間を利用して、現地人の視点から見た各チームの探究内容について率直な意見、感想をいただいた。実際に東南アジアに赴いて探究ができなかったことからすれば、大変貴重な経験である。



〈東南アジアで暮らす方へのインタビュー〉

- ・専門家への Skype を利用したインタビュー

木曜東南アジアチームは、「シンガポールの教育」について深い見識をお持ちの方（都内の大学で「教育学」について研究されている）とメールを通じてアドバイスを受けていたが、これが発展して Skype を用いたチャットによるインタビューを行うことになった。限られた時間ではあったが、あらかじめ質問事項を整理しておいて臨んだため、生徒達にとって得るものも多く大変充実した内容となった。



- ⑪ 本校内六稜会館で最終発表が行われた。6チームとも、発表はプレゼンテーション発表のみとした。また、パワーポイント資料も含めて全て英語を用いた。各チームの最終発表時におけるタイトルおよび概要は下記の通りである。

月曜 ベトナムチーム

「ベトナムを観光大国へ」

ベトナムにおけるダナンを中心とする中部域はハノイのある北部域、ホーチミンシティのある南部域と比較して経済的に低い地位である。しかしながら中部域の持つ観光地的魅力を活かした南北縦断型の「クルージングトレイン」を運行することにより、中部域、牽いてはベトナム経済全体の底上げに結び付けたい。

インドネシアチーム

「インドネシアで五輪開催を」

世界一のイスラム人口、東南アジアの GDP をほこるインドネシアは昨年アジア大会を開催、国際的信頼を高めた。インドネシア国内の更なる発展やスポーツの普及のために、次はオリンピック開催を行うため必要な選考14項目に焦点を当て研究を進めた。

ラオスチーム

「大国の脅威に屈しないラオス発展のために」

ASEAN 諸国の中で唯一の内陸国であり、経済的規模も極めて小さいラオス。ラオスが拡大しつつある隣国の経済圏に飲み込まれることなく、自立して経済規模を拡大させる方法について提案したい。

木曜 東南アジアチーム

「東南アジアから学ぶ日本の教育」

シンガポールは近年 PISA によると世界トップレベルの教育水準であることが明らかになった。シンガポールで導入されている PSLE 制度について研究し、日本において導入できないか検討した。

マレーシアチーム

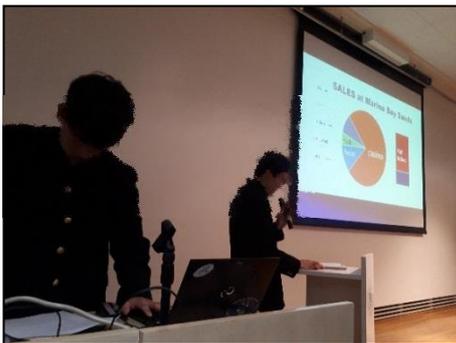
「マレーシアの政策から考える南アフリカのさらなる発展に向けた政策」

南アフリカ共和国とマレーシアは多民族国家という点で共通している。マレーシアにおいて失業率・貧困率を低下させることを目的にとられた政策を参考に、南アフリカにおける同様の問題に対応すべき策で経済的發展を促そうと模索した。

シンガポールチーム

「日本におけるカジノ成功のために」

「カジノ法案」の衆議院での通過、大阪万博の開催決定により盛り上がる IR（統合型リゾート）の大阪誘致。前期に考えたギャンブル依存症対策に引き続き、IR が大阪市にきた場合を想定して最大限の利益と経済的効果を生み出すための方策を検討した。



〈最終発表でのプレゼンテーション〉



〈発表後の最後の講評をいただく〉

出席いただいている指導助言の先生方から社会系・理科系・英語系にそれぞれ分かれて講評をいただいた。

社会系チームには以下のような講評があたえられた。

- ・プレゼンテーション力が中間発表時よりも向上している。
- ・提案する政策・アイデアについての検証まではしっかりできているが、それが社会・地域全体の発展にどう結びつくのかロジックが脆弱である。
- ・提案内容以外にすでに採用されている方針・政策についても十分理解を深める必要がある。そのうえで、提案内容の必要性を主張してほしい。
- ・探究するに当たり、3つの視点を持ってほしい。
 - 1つめ 上から俯瞰して全体にバランスのとれた内容になっているか。
 - 2つめ 1つ1つ詳細に課題を調べきった内容となっているか。
 - 3つめ 水の流れを読むかのように先の時代を読んで考えた内容になっているか。

生徒達は真剣に耳を傾け、あるものは一つ一つに頷きながらメモを取っていた。今後同様の探究活動をする際にはこの言葉の意味は活かされるであろう。

⑫ SGH 課題研究の総まとめとして論文の作成に取り掛かった。

各チームの発表を、ビデオを見て振り返ることとした。そのうえで、最終発表時の内容を大筋で踏襲することを基調としながらも、各チームの反省点を論文作成に反映させた。

論文の構成は 基幹となる「序論」「研究手法」「結果・考察」「結論」を明確に表現してもらうために、しっかりとその内容を書き出した上でまとめ上げることを指導した。

以上

〈成果〉

1. 132期2年生 課題研究後に実施したアンケートについて

今年度の課題研究 SGH 関連講座の取組に付いて、その成果を検証するために社会系の講座を受講している生徒38名を対象に2度のアンケートを実施した。第1回のアンケートは年度当初の課題研究の時間に実施し、第2回のアンケートは課題研究の最終発表会（平成31年2月2日実施）終了後最初の課題研究の時間を利用して実施した。以後、第1回のアンケートを事前アンケート、第2回のアンケートを事後アンケートと表記する。

アンケートの質問事項は関西学院大学社会学部の吉田寿夫教授からの委託による「SGH 生徒の成長の検証及びグローバル人材としての資質の検証」調査研究の質問項目に準じて設定した。その内容は以下（1）～（20）の通りであり、各質問項目について

4 そう思う 3 ややそう思う 2 あまり思わない 1 まったく思わない
の4つの選択肢で回答する形式とした。なお、事後アンケートでは、下記の質問項目を「以前より、……なった」の形式に直して実施した。

- (1) 英語でのコミュニケーションには抵抗がない
- (2) 海外でいろいろなことにチャレンジしたいと思う
- (3) 日本のことをもっと知る必要があると思っている
- (4) 開発途上国の文化や風土や政治経済の状況などについて知りたいと思う
- (5) 大学の先生や企業経営者と話をすることには抵抗がない
- (6) 東南アジアへの興味や関心を持っている
- (7) 東南アジア諸国への旅行や現地でのフィールドワークをやってみたい
- (8) 東南アジア出身の留学生と意見交換する機会を持ちたい
- (9) 将来は、仕事で国際的に活躍したいと思う
- (10) 地球規模で社会に貢献したいと思う
- (11) 卒業後は、海外の大学・大学院等で学んでみたいと思う
- (12) 世界的な問題について関心を持っている
- (13) 自分の考えを他の人に聞いてもらおうという思いが強い
- (14) 開発途上国の人たちと個人的に交流したいと思う
- (15) 英語によるコミュニケーション力を高めたいと思う
- (16) 人前で発表することには抵抗が少ない
- (17) 将来は、国連や国際NGOなどの国際的な機関で働きたいと思う
- (18) 開発途上国の経済発展に貢献したいと思う
- (19) 日本がより望ましい国になることに貢献したいと思う
- (20) 現在の段階で、課題を発見し、分析する力がついていると思う

① 132期生対象アンケートの年間推移の分析

以下の表は社会系講座選択の受講生からのアンケートに対する回答である。各質問項目の番号の数値化によって、項目ごとの平均値を算出した。表1は事前アンケート、表2は事後アンケートの平均値、表3は2つのアンケート結果の数値の差である。

表1 132期生 SGH 社会系 課題研究事前アンケート 質問項目平均値

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)
2.84	3.61	3.58	3.61	3.03	3.32	3.50	3.41	3.55	3.19
(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)	(19)	(20)
2.95	3.47	3.34	3.26	3.92	2.87	2.29	3.21	3.53	2.29

表2 132期生 SGH 社会系 課題研究事後アンケート 質問項目平均値

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)
2.78	3.70	3.73	3.35	3.19	3.32	3.51	3.22	3.57	3.30
(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)	(19)	(20)
2.97	3.54	3.14	3.08	3.95	2.95	2.51	3.30	3.54	3.05

表3 132期生 SGH 社会系 課題研究アンケート 項目別増減値

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)
-0.06	0.09	0.15	-0.26	0.16	0.00	0.01	-0.19	0.02	0.11
(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)	(19)	(20)
0.02	0.07	-0.20	-0.18	0.03	0.08	0.22	0.09	0.01	0.76

また、各項目ごとに回答番号の割合をグラフ化したものが図1および図2である。

図1 132期生 SGH 社会系 課題研究事前アンケート 質問項目別回答分布

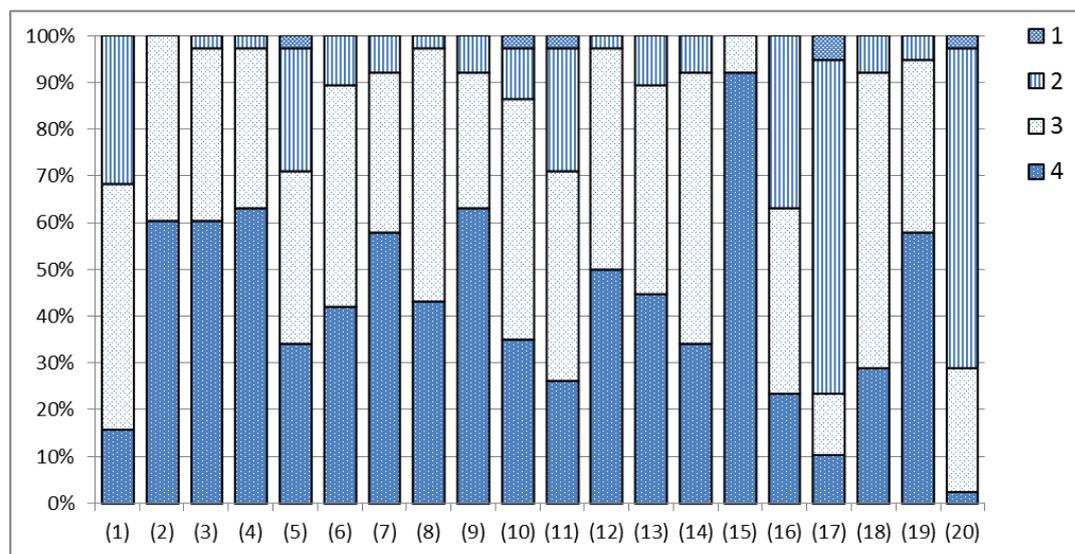
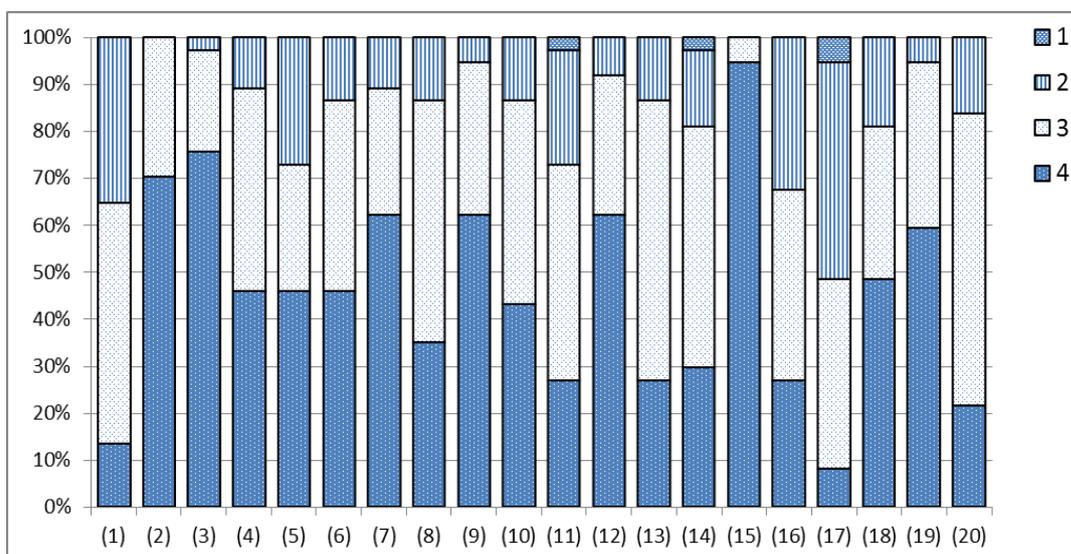


図2 132期 SGH 社会系 課題研究事後アンケート 質問項目別回答分布



以上の数値をもとに、特徴的な項目を抜き出し、その背景について以下のように考察した。

i 表1と表2より、アンケート全体では、年間を通した大きな変化は見られなかった一方で、「(20) 現在の段階で、課題を発見し、分析する力がついていると思う。」の項目は0.8ポイント増加した。図1および図2からわかるように、事前アンケートでは70%近い生徒がこの項目に対して「あまり思わない」と考えていたが、研究を通して「ややそう思う」へと意識が変化している。他の数値に大きな変化が無い中でこの数値は有意な変化であると考えられる。

ii 2度のアンケートのどちらにおいても肯定的回答の割合が高い質問項目は、「(15) 英語によるコミュニケーション力を高めたいと思う。」であった。最終発表は英語で行われたがそれまでの調査活動においても英語を用いた探究活動が活発に行われていたため、そうした活動を通して英語によるコミュニケーション力向上へのモチベーションが強化されたと考えられる。

iii 2度のアンケートのどちらにおいても否定的回答の割合が高い質問項目は、「(1) 英語でのコミュニケーションには抵抗がない。」であった。最終発表に出席された指導助言の先生方からは「この数年間で発表における英語力は格段に向上している」というコメントをいただいております、英語の資料も活用した探究活動を行っているにもかかわらずこのようなアンケート結果になったことから、生徒が自信を持ち、抵抗感なく英語でコミュニケーションを取れるような機会を増やすことが必要であると考えられる。

iv 事後アンケートにおいて肯定的回答の割合が大きく増加した質問項目は、
 「(17) 将来は、国連や国際NGOなどの国際的な機関で働きたいと思う。」
 「(20) 現在の段階で、課題を発見し、分析する力がついていると思う。」
 の2点であった。(17)に関しては探究をすすめるなかで、国際的な機関についての具体的なイメージを得ることができたのではないかと考えられる。(20)については、テーマ決定に時間をかけたことや、授業時間外でも積極的にグループでの活動を行っていたことなどが影響していると考えられる。

② 131期生(平成30年度新3年生)対象事後アンケートとの比較

平成29年度にSGH関連講座社会系を選択した生徒26名を対象とした事後アンケートの結果との比較である。質問項目は平成30年度と同様である。表4は131期生事後アンケート、表5は131期事後アンケートと132期事後アンケートの差(経年変化)である。

表4 131期生 SGH 社会系 課題研究事後アンケート 質問項目平均値

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)
2.71	2.75	3.13	3.17	2.71	3.29	3.08	2.83	2.79	2.79
(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)	(19)	(20)
2.42	3.25	2.96	2.58	3.63	3.08	2.42	2.79	3.04	3.13

表5 131期生および132期生 比較増減値

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)
0.07	0.95	0.60	0.18	0.48	0.03	0.43	0.39	0.78	0.51
(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)	(19)	(20)
0.55	0.29	0.18	0.50	0.32	-0.13	0.09	0.51	0.50	-0.08

以上の数値をもとに、特徴的な項目を抜き出し、その背景について以下のように考察した。

表4と表5より、アンケート全体では132期生の数値が大幅に上昇している。一方で132期生は事前アンケートと事後アンケートの数値に大きな違いが見られないことから、132期生は年度当初の時点で関心・意欲が131期生よりも高かったといえる。この背景には諸外国に対する生徒の関心の高まりや、1年次の国際情報の授業の充実などがあると考えられる。

2. 研究ノート、振り返りシートおよびアンケートの自由記述欄に見られる生徒の変容

前節〈内容〉で述べたように、社会系の講座では毎時の活動に合わせて項目にアレンジを加えたプリント「研究ノート・メモ」への記入を求めた。また、中間発表会や最終発表会および外部で発表を行ったチームには「振り返りシート」の記入を求め、次回以後の探究活動に向けての方向性を見出せるような指導を行った。

この項では、それぞれの研究ノートや発表機会ごとの振り返りシート、前述の事前・事後アンケートの中から特徴的な事例を取り上げる。

① 事前アンケート

- ・経済成長などとその国の人々の暮らしの関係性を調べてみたい。(経済、政治と身近なことの関係)
- ・現地には事実上フィールドワーク等に行けず専門家や文献、時にはインターネットに頼るしかない以上どこまで調査対象国を深くまで追求できるのか。
- ・東南アジアの方々に直接お話しを聞く機会は貴重なので、どうしても本、インターネットで調べることが多くなり、実態に沿わなくなってしまうこともあると思うので気をつけたい。

② 進捗状況報告会・意見交換会 他のグループへの感想

(前節〈内容〉3 活動詳細の⑥の活動)

- ・今後日本がより多民族になることを想定して、日本の進むべき道を考えるというアイデアが良かった。
- ・図は年数などの長さを見た目でわかるようにしたほうがわかりやすいと思う。
- ・民族・教育の関係という観点で調べていくのは面白くてよいと思う。ただ、広すぎるのではないか。最終目的を見失うことになりそう。
- ・マレーシアとシンガポールという民族面における政策の路線が180度異なる2カ国を対象国に選んだのは評価できる。

◇この意見交換会では、他のグループの発表についての意見の中で、個々の事実関係についての意見や質問よりも、研究の方向性や意義など俯瞰的に捉えた意見や質問が活発に出ており、探究活動を客観的に検討できていることが伺える。

③ ワークショップ感想

(前節〈内容〉3 活動詳細の⑦および⑧の活動)

- ・実際に東南アジアの学校に行った学生さんに話を聞くことができ、どのような調査が必要か考えることができた。
- ・現地の具体的な制度についてたずねるために、現地の人を紹介してもらえた。

④ 中間発表後の振り返りシートに記載されたコメント

- ・中間発表を意識して発表に必要な調査を絞り込んでおく必要があった。
- ・話すスピードが速すぎたので最終発表までに改善する。スライドも見やすく工夫する。

⑤ 外部での発表について振り返りシートに記載されたコメント

1月大阪教育大学附属高等学校平野校舎 月曜インドネシアチーム

〈自分たちの発表を終えて気付いた点〉

- ・自分が思っているよりもゆっくり話さないと、早口になってしまうこともあると気付いたので、次からは相手が聞き取りやすいように話そうと思う。
- ・オリンピックの真の目的である「スポーツを広める」ということを考えてなかった。

〈他校のポスター発表や口頭発表で参考になりそうな点〉

- ・大教大のプレゼンテーションは根拠や結論がとても信頼できるものだった。私たちのプレゼンテーションは表面的で深いところまで追求できていない部分が多かったなど反省した。
- ・調べるまでの過程→実験→考察の流れがしっかりしている。

⑥ 事後アンケート

- ・国外の調べものをするにおいても英語が必要で、英語力を身につけることが必要だと思った。また、思ったことを魅力的に伝えるには、プロセスを伝えることも必要だと感じた。
- ・どのようにパワーポイントを作ったら相手に伝わりやすいかなどをいつも以上に考えるようにした。オリンピック開催を提案するうえで、オリンピックのことだけを考えればよいのではなく、その後の発展にも目を向けるなど、先を見通す必要を学んだ。
- ・自分たちでテーマを設定して、研究を行うのでなかなか前に進まなかったが、暗中模索しながらなんとか結論にたどりつけた。答えが色々ある中で、自分たちなりの答えを見つけるのは難しかったが、その難しさの中に楽しさを感じられたと思う。
- ・パワーポイントの作成力、英語で発表する際はよくできたと思う。作成する力は格段に上達した。物事をよく考察して結論を導き出す力もついた。
- ・課題を自ら見つけ出し、その対象について思考を重ね、様々な情報を集め選びだし、それらを順序立てて論理的に組み立てることを経て、将来の卒論や仕事の基礎を体得できたと思う。
- ・調査力と英語力。課題についての論文検索などはやったことがなかったが、以前よりもうまく調べられるようになった。人前で英語を話すことに抵抗がなくなった。
- ・課題を見つけ調べる、そしてそれを整理し、解決策や案を考える。それを人に伝える、また発表して反省点を分析し、新しい方法を考えるというようなサイクルが身についたと思う。

2. 英語科

〈目的〉

東南アジア地域の文化を具体的に学び、知り、知識を増やすことが大前提である。ただ、知識を増やすだけではなく、それを様々な角度から向き合い、現代社会の諸問題と関係づけて解決策を示すことが最終目的である。そのためには、東南アジアの文化だけを学ぶだけではなく、日本文化との比較が必須となる。

発表活動（中間発表・最終発表）を通じて、プレゼンテーション力、情報をまとめる力、質問に即座に答える力を育成する。また、論文執筆を通じて、発表した内容をまとめる力を育成する。それらを通じて、生徒の創造性・思考力を養う。加えて、受身ではない自発的な研究を通して、生きる力を養うことも図る。

〈内容〉

本年度の SGH アジア探究（英語系）講座は、月曜日 5 時限（以下月曜班と呼ぶ）および木曜日 5 時限（以下木曜班と呼ぶ）を中心とした 2 講座の開設となった。指導担当は月曜班には佐川教諭、木曜班には佐々木英晃教諭が当たることになった。

また、本講座はその取り扱う内容と定員の都合上、例年、文系・理系を問わず募集しているが本年も、月曜班 9 名、木曜班 10 名の生徒から構成されるに至った。内訳は 月曜班は文系 7 名、理系 2 名、木曜班は文系 3 名、理系 7 名である。両班ともに、期間の多少のずれはあるものの、年間を通じて同内容で講座を進めた。

1. 活動の場所、方法（手段）および記録

本講座はプレゼンテーションの準備や練習をするために適しており、英語の授業でも使用している LL 教室を主な活動場所として開講したが、調査対象の舞台となる東南アジアに関する文献が最も充実している図書館やインターネットでの情報収集を行うために LAN 教室も適宜利用した。

また、自由探究する方法も特に制限を設けず、文献以外にもスマートフォン等を、必要に応じ使用することを許可した。

そして、1 時間の活動や得た内容を記録するために、月曜班は毎時の活動に合わせて項目にアレンジを加えたプリントを、木曜班は研究ノートを生徒に配布した。この中に 1 時間の探究内容を記録させ、当授業時または次授業時に回収した。

2. 日程

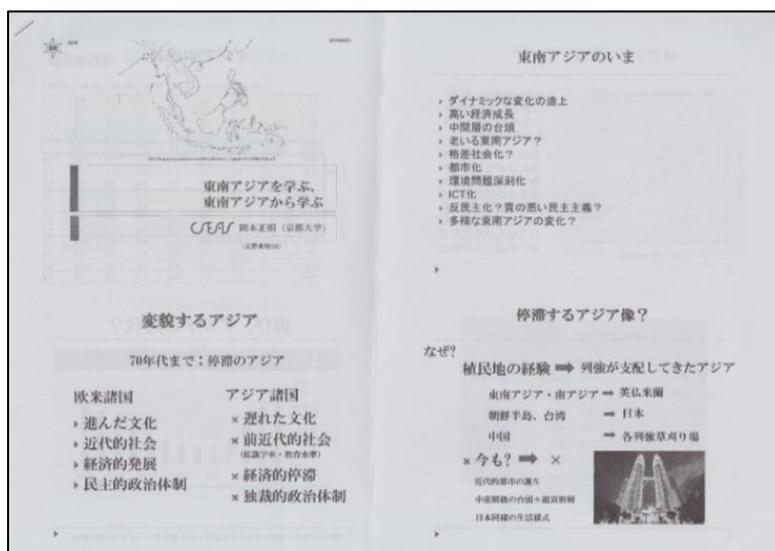
	月曜班	木曜班	活動内容
①	4月16日	4月12日	・課題研究説明会
②	4月23日	4月19日	・講義「なぜ課題研究をするのか」 ・講義「課題研究の進め方」 ・説明「SGH について」

	月曜班	木曜班	活動内容
③	4月21日	4月21日	・岡本正明氏 (京都大学東南アジア研究所教授) 講演 「東南アジアを学ぶ、東南アジアから学ぶ」
④	5月上旬 ～5月中旬	4月下旬 ～5月上旬	・導入～東南アジアの国に関する調べ学習 ・グループ編成
⑤	5月下旬 ～6月下旬	5月中旬 ～6月中旬	・テーマの設定 ・テーマの絞り込み・設定 ・テーマに関連する自由探究
⑥	7月上旬 ～7月中旬	6月下旬 ～7月中	・進捗状況報告会・意見交換会 ・進捗状況報告会・意見交換会を受けて検討 ・夏季休暇期間中の探究活動計画
⑦	8月下旬 ～9月上旬	8月下旬 ～9月上旬	・中間発表準備
⑧	9月中旬 ～10月下旬	9月中旬 ～10月下旬	・中間発表最終準備
⑨	10月27日	10月27日	・中間発表
⑩	11月上旬 ～1月下旬	11月上旬 ～1月下旬	・中間発表を受けての内容再検討 ・テーマに関する自由探究 ・大阪大学留学生による指導助言 ・発表内容の最終仕上げ ・発表内容の英訳 ・最終発表直前準備
—	12月15日	—	・2018年度スーパーグローバルハイスクール (SGH) 全国フォーラム (東京国際フォーラム)
⑪	2月2日	2月2日	・最終発表
⑫	2月上旬 ～2月中旬	2月上旬 ～2月中旬	・論文作成

3. 活動内容詳細 (以下「2. 日程」の番号に即して記す)

- ① 課題研究の各講座の概要について説明を、月曜班、木曜班それぞれ1時間を費やして行う。その後、生徒に講座の希望を提出させ、講座編成を行った。その結果、英語系(月曜班)が9名、英語系(木曜班)が10名の生徒から講座が構成されることとなった。
- ② 課題研究の意義、進め方についての講義およびSGHについての説明を行った。通常の課題研究とは違うSGH課題研究の特殊性も併せて知ってもらうことが狙いである。

- ③ 京都大学において岡本正明氏（本校卒業生：京都大学東南アジア地域研究研究所教授）による講演「東南アジアを学ぶ、東南アジアから学ぶ」をSGH 課題研究選択生徒は原則として聴講する。岡本氏は本校のSGH の取組発足以来、課題研究などの探究活動に対してご指導をいただいている。講演の内容は、東南アジアを中心としたアジアの経済成長およびそれに伴う経済格差問題、ICT化など多岐にわたるもので、最後に日本と東南アジア双方の視点から見たそれぞれに対する関りについて説明をいただいた。生徒達にとって「東南アジア」のダイナズムを感じとり、「東南アジア」探究に対する興味をさらに深くする非常に有意義な時間となった。



〈講演レジュメより〉

- ④ 実質的には当時期より生徒たちによる探究活動がスタートした。グループ分け・テーマ設定をするため、1人ずつどのようなものを研究したいのかをプレゼンテーションするよう指導した。1人3分ずつ発表してもらった。発表内容は多岐にわたり、食文化、暑さ対策、環境問題、貿易、政治などがあった。そこから、どの内容であれば1年間の研究テーマに値するかを話し合った。話し合いの結果、以下のグループ・タイトルが決定した。

月曜班 ミャンマーの教育（5人）
 企業経営（4人）
 木曜班 宗教教育（5人）
 暑さ対策（5人）

- ⑤ 比較文化的アプローチの研究開発を進めるべく、関西学院大学の陳立行教授(社会学)には、月曜班6月4日・18日、木曜班7日・21日の2回連続で英語系のテーマである「比較文化論」をテーマに「異なる社会を考察する際、なぜ比較の視点が必要になるか」に関して講義をしていただいた。その後、発表の際に考察すべきことを実践するために、以下の課題を生徒に課した。

1. 東南アジアに進出している企業の展開を調べる
2. 東南アジアに進出している企業が出会った難題を調べる
3. 東南アジアに進出している企業に必要な人材像を調べる

月曜班・木曜班ともに2～3人のグループに分かれ、以下のように自分の興味のある地域に関して、パワーポイントを作成し、発表準備を行った。

月曜班

「カンボジアに進出した日本企業の現状と展望」

「タイに進出する日本企業について」

「ミャンマーの抱える難題」

「ブルネイの現状と課題」

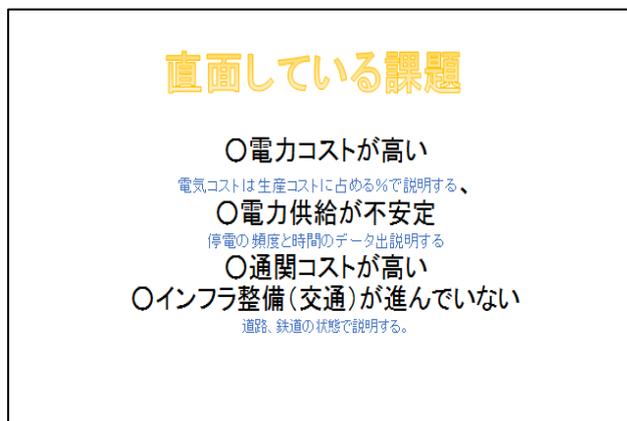
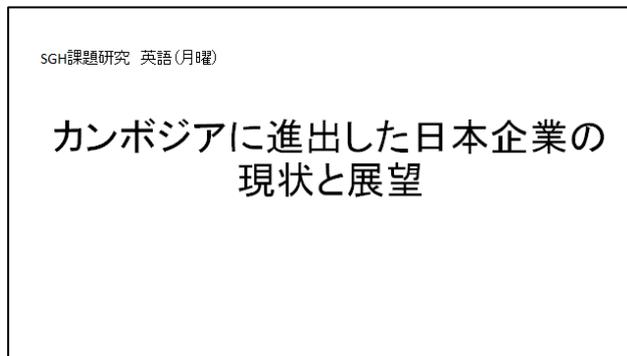
木曜班

「フィリピンにおける労働力」

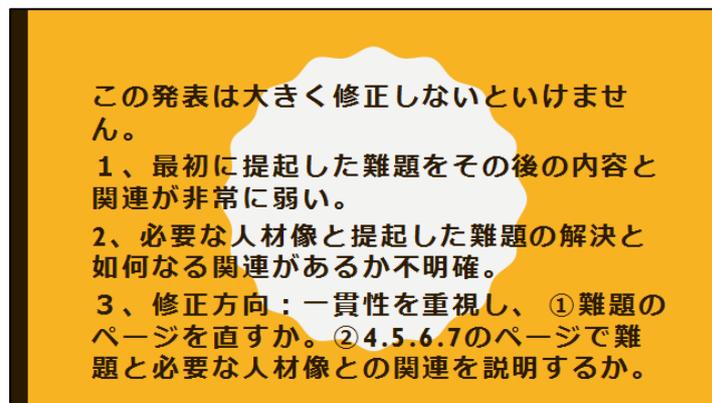
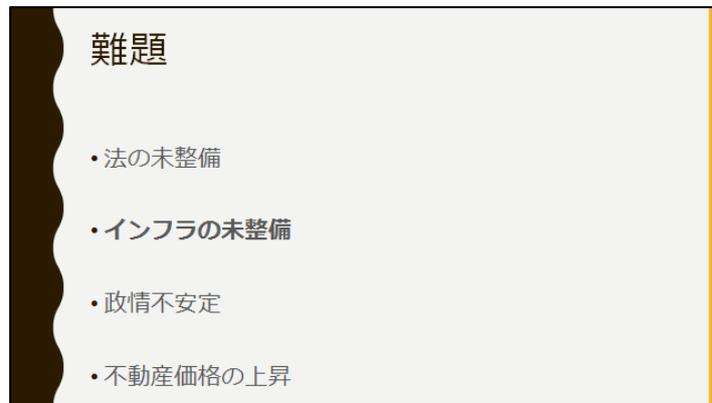
「シンガポールの民族問題」

「マレーシアと日本の関係」

月曜班は発表の授業が、大阪北部地震と重なり、変更した日が西日本豪雨の影響のため、中止となった。そのため、パワーポイントスライドをメールに添付し、添削指導をしていただくことになった。以下にスライドの例を示す。



「ミャンマーの抱える難題」



この課題に取り組むことにより、情報収集とその分析方法・論理展開の仕方を身につけることができた。

⑥～⑧

各グループで知識を深め合う時期である。たとえば、暑さ対策のグループでは、様々な暑さ対策製品を調べた。各製品の長所・短所・価格などを調べ上げ、それぞれが現地でどのように使われているか、どのような効果があるのか、を調べることで考察を深めた。そして、夏休み前の段階でもあったため、夏休みにおいて何を調べておくかの分担も行い、夏休みに各自調べることとなった。

夏休み明けは、夏休みに調べた内容をもとに情報交換をグループ内で行った。たとえば、宗教教育のグループにおいては、宗教のどの具体的なトピックに焦点を当てるのか、それは行事か、礼儀か、食事かという点である。そして、最終目的をどのように設定して、研究をすすめていくかも考察した。

また、中間発表に向けて、スライド作成、原稿作成、プレゼンテーション練習などを重ねた。

- ⑨ 本校内六稜会館で中間発表が行われた。発表は、1つのグループ（暑さ対策）を除いて英語で行われた。各チームのタイトルおよび概要は次のとおりである。

月曜日 Giving Myanmar New Education

Tourist Trade of East Timor

木曜日 Comparing Islamic Culture with Japanese Culture

東南アジアの暑さ対策について



〈中間発表の風景〉

発表後に出席いただいている指導助言の先生方から講評をいただいた。その中では、今後の展開、最終発表に向けてどのような方向づけをするのか、どのような根拠を示していくかが先生方から示された。また、英語グループの中で高評価を得た「東南アジアの暑さ対策について」が2018年度スーパーグローバルハイスクール(SGH)全国フォーラム(平成30年12月15日(土)、東京国際フォーラム)にてポスター発表することが決定した。

- ⑩ 暑さ対策のグループは、前述のとおり全国高校生フォーラムに参加することが決定したため、ポスターの作成と練習を英語で行った。まず、ポスターはイラストなどを用いることでわかりやすくすることを第一に考え作成するよう指導した。また、原稿チェックも行い本番を迎えた。

当日は、午前中においては、交流会に参加した。教育・文化・歴史・言語・芸術のグループに参加し、多岐にわたったテーマについて交流した。参加生徒によると、英語で行ったため、とても良い刺激を受けたとのことである。

午後になると、ポスター発表本番である。2回行ったが、時間通りに終わることができ、質疑応答にも自分の言葉で答えることができた。



交流会



ポスター発表の様子

後日いただいた評価シートを用いて、最終発表に向けて改善を重ねた。評価シートの内容は以下のとおりである。

ヤードム（暑さ対策製品）の使用において、体に悪影響がないのか、長期的使用に問題がないのかなどの問題を解明する必要がある。それらを、理論と研究両方の観点から検証することが必要である。また、なぜタイでヤードムの人気があるのか、ほかの国々ではどうであるかも知りたい。プレゼンテーションと質疑応答はよくできていた。さらなる研究を期待する。

また、他の3グループにおいても、最終発表にむけてさらに考察を深めた。本校生徒を対象にアンケートを実施してデータを集めたり、大阪大学大学院の東南アジア出身の留学生に来校していただき、授業中に直接英語で聞いたりした。留学生には、最終発表前に内容を見ていただき、生徒が発表する内容に問題はないか、改善点はないかを具体的にご指導いただいた。

- ⑪ 本校視聴覚教室で最終発表が行われた。各チームの最終発表時におけるタイトルおよび概要は下記の通りである。

月曜班 Giving Myanmar New Education

「ミャンマーの教育」

We learned that the purpose of Myanmar's education is to succeed in college entrance examinations. Therefore, in order to solve this problem, we considered short-term targets and long-term targets. We suggest carrying out an achievable internship for high school students.

Tourism Industry in Timor-Leste "by Timor-Leste for Timor-Leste

「東チモールの東チモール人による東チモール人のための計画」

21世紀最初の独立国である東チモールは外国の支援によって立ち直

りつつあるものの、未だにたくさんの問題を抱えている。今、東チモールの発展に必要なのは、観光業なのだが、そのためには現地の人が自国をアピールしたいという意欲が不可欠だ。そこで私たちは、博物館の建設によって愛国心を育てる長期的な計画と外国の企業を参入させる短期的な計画を考えた。

木曜班 Share Kitchen～to share meal, to share value, to share life～

私たちはこれまで増加する東南アジアからの観光客や労働者のイスラム教徒と共存していくためにはどのようにすれば良いのかを考えてきました。食べることは生きること。ムスリムとの共存のためには、ハラールフードの充実が必須です。私たちの考えた、新しいレストランで人生に、シェアを。

Stop ourselves sleeping

～What we learned from an inhaler in Thailand, YADOM～

あなたは授業中に眠気を感じることはありませんか？私たちの調査によると、90%以上の生徒が眠気を感じているそうです。私たちはこの問題を解決するために、ヤードムというタイで人気のある製品を使うことを提案します。ヤードムとは何かから、日本に導入するビジネスプランまでを発表します。

以下のようなコメントをいただいた。

- ・プレゼンテーション力が SGH 5 年間で最も高い。成長している
- ・Problem Based Learning がしっかりと行われていて、成果が現れていた
- ・冒頭からテレビショッピングのような発表で始まり、発表に工夫がみられた
- ・イスラム教徒と日本人の文化の違いを踏まえたうえで、どちらの価値観も否定しない方法が示されてとても納得した



最終発表の様子

⑫ 論文作成

講評・コメントをしっかりと理解した上で、自分の取り組んできた研究を客観視し、論文の作成にとりかかった。

以上

〈成果〉

1 132期2年生 課題研究後に実施したアンケートについて

今年度の課題研究SGH関連講座の取り組みに付いて、その成果を検証するために英語系の講座を受講している生徒19名を対象に2度のアンケートを実施した。第1回アンケートは年度当初の課題研究の時間に実施し、第2回のアンケートは課題研究の最終発表会（平成31年2月2日実施）終了後最初の課題研究の時間を利用して実施した。以後、第1回のアンケートを事前アンケート、第2回のアンケートを事後アンケートと表記する。

アンケートの質問事項は、関西学院大学社会学部の吉田寿夫教授からの委託による「SGH生徒の成長の検証及びグローバル人材としての資質の検証」調査研究の質問項目に準じて設定した。その内容は以下（1）～（20）の通りであり、各質問項目について

4 そう思う 3 ややそう思う 2 あまり思わない 1 まったく思わない
の4つの選択肢で回答する形式とした。なお、事後アンケートでは、下記の質問項目を「以前より、……なった」の形式に直して実施した。（例：以前より、英語でのコミュニケーションに抵抗がなくなった。）

- (1) 英語でのコミュニケーションには抵抗がない
- (2) 海外でいろいろなことにチャレンジしたいと思う
- (3) 日本のことをもっと知る必要があると思っている
- (4) 開発途上国の文化や風土や政治経済の状況などについて知りたいと思う
- (5) 大学の先生や企業経営者と話をすることには抵抗がない
- (6) 東南アジアへの興味や関心を持っている
- (7) 東南アジア諸国への旅行や現地でのフィールドワークをやってみたい
- (8) 東南アジア出身の留学生と意見交換する機会を持ちたい
- (9) 将来は、仕事で国際的に活躍したいと思う
- (10) 地球規模で社会に貢献したいと思う
- (11) 卒業後は、海外の大学・大学院等で学んでみたいと思う
- (12) 世界的な問題について関心を持っている
- (13) 自分の考えを他の人に聞いてもらおうという思いが強い
- (14) 開発途上国の人たちと個人的に交流したいと思う
- (15) 英語によるコミュニケーション力を高めたいと思う
- (16) 人前で発表することには抵抗が少ない
- (17) 将来は、国連や国際NGOなどの国際的な機関で働きたいと思う
- (18) 開発途上国の経済発展に貢献したいと思う
- (19) 日本がより望ましい国になることに貢献したいと思う
- (20) 現在の段階で、課題を発見し、分析する力がついていると思う

① 132期生対象アンケートの年間推移の分析

以下の表は英語系講座選択の受講生からのアンケートに対する回答である。各質問項目の番号の数値化によって、項目ごとの平均値を算出した。表1は事前アンケート、表2は事後アンケートの平均値である。

表1 132期生 SGH 英語系 課題研究事前アンケート 質問項目平均値

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)
3.11	3.74	3.79	3.63	2.79	3.42	3.63	3.53	3.47	2.95
(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)	(19)	(20)
2.79	3.42	2.84	3.21	4.00	2.89	2.32	3.37	3.32	2.21

表2 132期生 SGH 英語系 課題研究事後アンケート 質問項目平均値

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)
3.16	3.84	3.79	3.58	3.11	3.37	3.58	3.42	3.58	3.26
(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)	(19)	(20)
2.95	3.37	3.26	3.37	3.95	3.05	2.63	3.26	3.32	3.05

以上の2つのアンケート結果の数値の差が表3である。

表3 132期生 SGH 英語系 課題研究アンケート 項目別増減値

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)
0.05	0.10	0	-0.05	0.32	-0.05	-0.05	-0.11	0.11	0.31
(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)	(19)	(20)
0.16	-0.05	0.42	0.16	-0.05	0.16	0.31	-0.11	0	0.84

また、各項目番号ごとに回答番号の割合をグラフ化したものが図1および図2である。

図1 132期生 SGH 英語系 課題研究事前アンケート 質問項目別回答分布

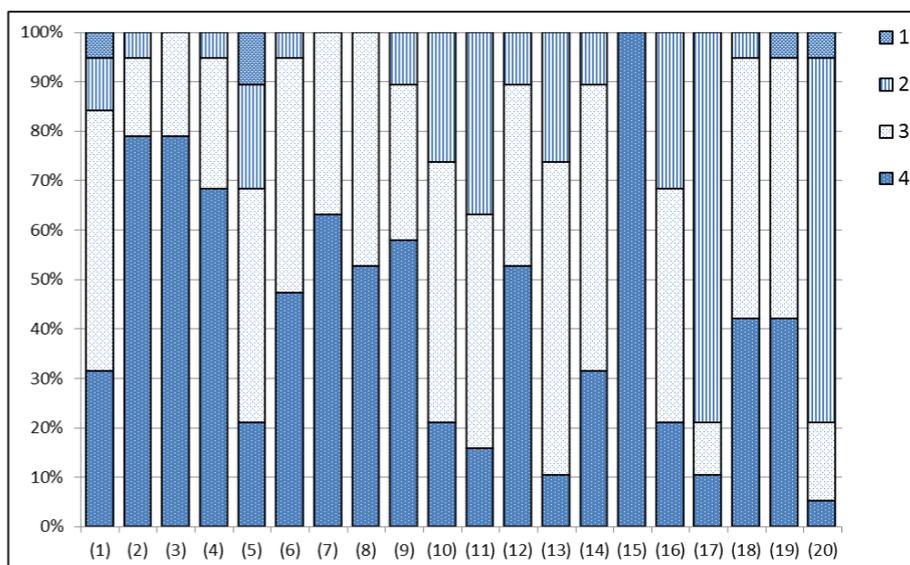
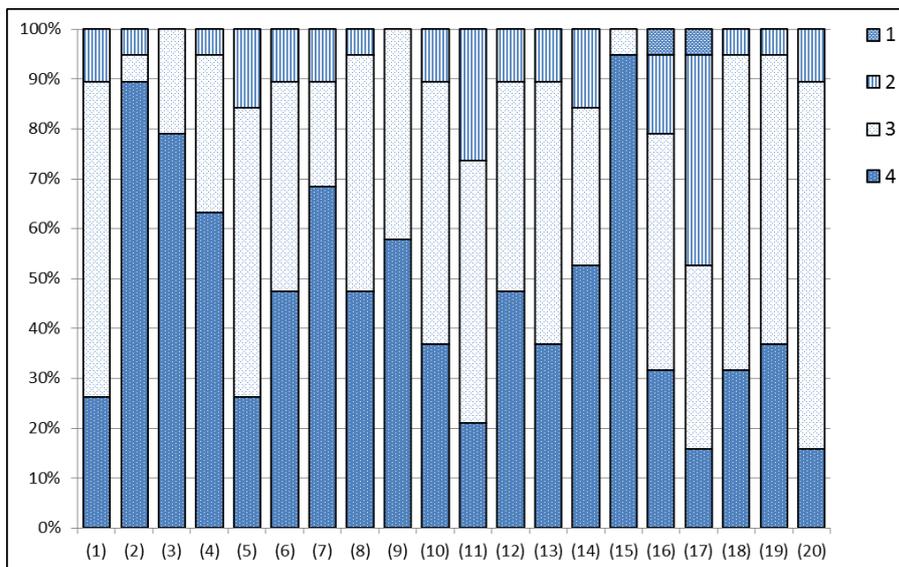


図2 132期生 SGH 英語系 課題研究事後アンケート 質問項目別回答分布



以上より、以下の項目について0.30以上の増加を確認することができた。

- (5) 大学の先生や企業経営者と話をするには抵抗がない。
- (13) 自分の考えを他の人に聞いてもらおうという思いが強い。
- (17) 将来は、国連や国際NGOなどの国際的な機関で働きたいと思う。
- (20) 現在の段階で、課題を発見し、分析する力がついていると思う。

(5)については、中間発表や最終発表、全国高校生フォーラムを通じて大学の先生や留学生などと話す機会が多く設けられているため、伸びたということができる。また、同様に(13)についても、発表を通じて自分の意見を表現することを望む生徒が多く見られたということができる。(17)では、英語系を選択する生徒の中には、国際的に活躍するという動機を持って選択しているといえるが、本課題研究を通してその気持ちがさらに強まったと言える。また、特に増加したことがわかったのは(20)である。自発的にテーマ設定を行い、自分たちで独創的な方法で分析・調査し、研究発表・論文執筆を経ることで、自ら課題を発見し分析する力がついたらと答える生徒が多く見られた。

以上のことより、コミュニケーション力、分析力、国際的な視点から社会問題を考える力が大いに育まれたということができる。

2 アンケートの自由記述欄に見られる生徒の変容

事前・事後アンケートの中から特徴的な事例を取り上げる。

① 事前アンケート

- ・プレゼンテーションし、質疑応答で答えられるレベルの英語力を身につけたい
- ・東南アジアの人々の生活をよくするような研究をすすめたい
- ・実際に東南アジアに行くことができないので、インターネットなどで調べる中心になると思うが、しっかり情報の取捨選択をして取り組んでいきたい
- ・話すときに焦ってしまって思ったように話せないことがあるので、気をつけたい
- ・ありきたりなつまらない発表にだけはしたくない

② 事後アンケート

- ・実際その内容がどうであれ、問題解決に向けての改善案を考えることができた。また留学生と英語でコミュニケーションをとることで、少し英語で話すことへの抵抗がなくなったがまだまだ英語力が足りない実感することだけであった。
- ・問題点を見つけ、ただそれに対しての解決策を考えるだけでなく、そうなった原因・背景を調べ、様々な視点から考えを深める大切さがわかった。また限られたなかで情報を集める難しさや自主的に動く必要性。課題に行きづまっていた後に前に進めたと実感できたことでその楽しみを知った。
- ・他人の意見と自分の意見がぶつかることはもちろんあったけれど、それに折り合いをつけてうまくまとめて進めていく力、プレゼンテーションの力、パワーポイントを作る力、聞く相手のことを思ってプレゼンテーションをする力（これは英語で発表したからこそ身についたと思う）を身につけることができた。
- ・どのようにすれば人にきちんと伝わるのかがよく分かった。また、実際に留学生が来てくださったことで英語でのコミュニケーション力が試されたのも良かった。東南アジアにも触れることでプラス面だけでなくマイナス面も知ることができて、良い経験になったと思う。今後に学んだことを活かすことができたらいいと思った。
- ・これまでは答えのある問題を解くことが多かったが、1年間答えのない問題にじっくり向かい合ってきて、難しさに気付いた。

3. 理科

〈目的〉

科学技術分野における国際協力の現状を学び、東南アジア諸国への貢献の可能性を探る。科学的考察を行い、研究者としての資質を養うことを目標とする。

自然科学の歴史を振り返ると、日本と世界の深いつながりが確認される。かつて西洋から学び吸収した科学技術をさらに発展させ、現在は共同研究や技術支援において世界の国々と協力する立場となった。国際社会には、文系理系を問わずあらゆる知識能力を結集して取り組むべき問題が山積されている。

この講座では、生徒が自主的に研究主題を設定し科学的考察を行うとともに、将来の活用の方法を考察し、協力して研究するために必要な資質を養う。自然科学に関連する事象を探究し、論理的思考力を身につける。

〈内容〉

本校では、2年生360名（文理学科）が課題研究に取り組んでいる。研究課題は、国語、社会、英語、理科（物理、化学、生物、地学）、数学、情報、保健体育、音楽の様々な分野にわたり、約40講座で構成される。講座の中には先輩の実績を引き継ぎ担当教員の指導のもと継続的な探究活動を行っているものもある。大学と連携し、本校卒業生でもある研究者の方々の助言や協力を得る機会も多い。このような素地のもと理系でもSGH関連の講座を展開している。

本年度のSGH理系講座は（1）「構造物に関する研究」月曜日5時限（以下月曜班と呼ぶ）、（2）「自然科学と論理的思考法」木曜日5時限（以下木曜班と呼ぶ）の2講座を開設した。指導担当は（1）月曜班、（2）木曜班ともに物理科教諭 山本としこである。（2）木曜班は、奈良女子大学理学部特別研究員 理学博士の協力を得て指導にあたった。月曜班は13名、木曜班は14名の生徒から構成されている。

（1）「構造物に関する研究」【月曜班】

建築工学、構造力学、防災学などの観点から、橋梁架設と建築設計について多角的に研究し、東南アジア等周辺地域への貢献の可能性を探る。

①「橋の科学」日本やアジア諸国は自然災害が多く、協力して防災への取り組みが進められている。この講座では橋と建築の種類や基本構造を学び、東南アジア等を対象地域として橋梁架設のシミュレーションを行う。また、パスタなどの身近な材料を用いて模型を作成し、強度に関する実験と考察を行う。

②「快適な建築と環境に関する考察」快適な条件を調査探究し、空間構成を考察する。模型を製作し、異なる構造条件で環境測定実験を行った。本校校舎施工当時の条件と現代の要望の調査を行い、新たなデザインと可能性の提案を行った。

(2)「自然科学と論理的思考法」【木曜班】

自然科学と人文科学の両方に関わる2種類の事象を探究し、論理的思考力を身につける。

①「才能の考察～天才時空論」才能を発揮し、過去に功績を残した人物を多数輩出した時代と地域についての検証と考察を行う。過去の事実を検証すると、洋の東西を問わず、革新的なアイデアの誕生は特定の時間と空間に集中する。その理由を探究し、人々が能力を発揮しやすい環境や条件を考察し、身近な地域の未来へ貢献の可能性を探る。

②「天文学的側面から見る絵画の正確性～絵画と天文学」

絵画を天文学の観点で検証する。絵画に登場する天体の描写が正確かどうか、日時・場所・方角などの情報から、天文学(地学)の知識を使って検証する。

課題研究では、生徒が自由に課題設定し、その探究活動を自主的に行う。各分野の専門の教員が周辺で待機し、教員自身も自らの主題を設定して研究している。生徒が高みをめざす中で難度の高い問題に遭遇し、教員の専門的アドバイスを得て解決を試み研究を進める。

本校では通常の講座で研究の基礎となる内容を教員から吸収し、課題研究や部活動で自らの純粋な知的好奇心にもとづく探究活動を自主的に行っている。取り組み方も多様である。また、科学研究の基礎やマナーを学ぶことも重要である。担当教員や生徒の希望によって取り組み方の自由度を確保することは、留意点のひとつである。

課題研究に指導の際、課題設定、情報収集、整理・分析、まとめ・表現の、どの段階もバランスよく力を配分し、生徒自らがプロジェクトの全体像を大きくとらえて取り組むように留意している。課題の設定の段階で自主性を尊重すること、生徒もその責任を認識するよう指導した。

今年度の日程は以下のとおりである。

	月曜班 (回数)	木曜班 (回数)	活動内容
①	4月16日 (1)	4月12日 (1)	・課題研究説明会
②	4月23日 (1)	4月19日 (1)	・講義「課題研究の意義」 ・講義「課題研究の進め方」 ・説明「SGHについて」
③	4月21日 (1)	4月21日 (1)	・岡本正明氏(京都大学東南アジア研究所教授) 講演「東南アジアを学ぶ、東南アジアから学ぶ」
④	5月上旬 ～5月中旬 (2)	4下旬 ～5月上旬 (2)	・導入・テーマ設定・グループ編成・基礎学習 (a)研究課題の検討、研究計画作成

	月曜班 (回数)	木曜班 (回数)	活動内容
			(b)物理学、建築学、地学、防災学、光学、地理学、アジアに関する基礎事項の学習
⑤	5月下旬 ～6月下旬 (4)	5月中旬 ～6月中旬 (4)	・課題設定、調査探究、文献講読 (a)課題に関するディスカッション (b)課題に関する調査(文献、インターネット) (c)具体例と仮説の設定 (d)輪読と発表会
⑥	7月上旬 ～7月中旬 (2)	6月下旬 ～7月中旬 (3)	・論理的思考法の基礎を学ぶ (a)建築学科大学生による講義、模型作成方法指導等 (b)模型作成、環境実験、強度実験 ・夏季休業期間中の探究活動計画
⑦	8月下旬 ～9月上旬 (3)	8月下旬 ～9月上旬 (2)	・論理的思考法に関する探究(1) (a)環境実験、アンケート調査、 (b)各地のコミュニティの現状を調査 (c)模型作成、環境実験、強度実験 (d)企画立案に関する考察、ディスカッション (e)先行研究の調査、計画を立案
⑧	9月中旬 ～10月下旬 (3)	9月中旬 ～10月下旬 (6)	・論理的思考法に関する探究(2) (a)模型作成、環境実験 (b)アンケート調査 (c)企画立案、考察、ディスカッション (d)先行研究の調査 (e)シミュレーション実施 (f)計画立案、計画提案
⑨	10月27日 (1)	10月27日 (1)	・中間発表
⑩	11月上旬 ～1月下旬 (8)	11月上旬 ～1月下旬 (8)	・論理的思考法に関する探究(3) (a)模型製作、強度実験 (b)先行研究の調査、計画立案
⑪	—	12月23日 (1)	・大阪サイエンスデイ高校生課題研究発表会 (主催:大阪府教育委員会、大阪工業大学)へ参加 参加チーム:木曜班「自然科学と論理的思考法」
⑫	1月16日 (1)	—	・京都大学工学部建築学科見学、ディスカッション 参加チーム:月曜班「快適な建築」
⑬	2月2日 (1)	2月2日 (1)	・最終発表
⑭	2月上旬 ～2月中旬 (2)	2月上旬 ～2月中旬 (1)	・論文作成

	月曜班 (回数)	木曜班 (回数)	活動内容
⑮	2月 8日 (1)	—	・京都大学工学部地球工学科見学、ディスカッション、 講義受講 参加チーム：月曜班「橋の科学」
⑯	—	2月 9日 (1)	・GLHS10校合同発表会（主催：大阪府教育委員会、 大阪大学）へ参加 参加チーム：木曜班「自然科学と論理的思考法」
⑰	3月中旬	—	・設計事務所（株式会社昭和設計）見学、講義受講

以下にご指導いただいた先生方の一覧を示す。

岡本 正明 先生	京都大学東南アジア地域研究研究所 教授	地域研究
竹山 聖 先生	京都大学大学院工学研究科教授	建築
金 哲佑 先生	京都大学大学院工学研究科教授	土木工学
梶本 興亜 先生	京都大学名誉教授	化学
信川 正順 先生	奈良教育大学准教授	物理
信川 久美子先生	奈良女子大学 特別研究員	宇宙物理
倉光 成紀 先生	大阪大学名誉教授	生物
林 慶一 先生	甲南大学 理工学部教授	地球科学
松永 和浩 先生	大阪大学適塾記念センター大阪学研究部門 准教授	歴史
金水 敏 先生	大阪大学大学院文学研究科長、教授	文学
柴田 貴美子 氏	神戸大学工学部建築学科 大学生	建築
石川 勇 氏	IK 技研株式会社社長、北野天文台設計製作	望遠鏡
高木 秀晃 氏	株式会社昭和設計 建築士	建築
高木 祐介 先生	奈良教育大学准教授	保健
長峯 健太郎先生	大阪大学大学院理学研究科教授	宇宙物理
北野 正雄 先生	京都大学教授、副学長	工学

〈成果〉

今年度は「橋梁架構と空間デザイン」および「論理的思考」をテーマに課題研究を進めた。ハード面では建築学的、構造学的な観点から建築計画を検討し、ソフト面では社会的な見地からコミュニティの形成や活性化を促進する橋梁架構計画および設計案を立案した。実験計画を作成し実験方法、検証方法を創意工夫して意欲的に取り組んだ。本講座の生徒は、互いに適性に応じて役割分担しよく協力して研究を進めた。リーダーシップやバランス感覚、コミュニケーション力、主体性など、研究に必要な資質を伸ばす機会となった。研究成果の口頭発表、ポスター発表、論文等には英語の要約を付した。発表、質疑応答ともに適切に対応した。発表会では生徒が司会進行を担当し学年課題研究の活性化に貢献した。自主性、研究に取り組む態度が優れており、さらに研究手法等に関し大きな成長が見られた。

また「論理的思考」(木曜班)は、大阪府高校生課題研究発表会大阪サイエンスデイで入賞、GLHS 合同発表会(大阪府教育委員会主催、大阪大学共催)で大阪大学賞を受賞した。また、2019年3月17日に開催の日本天文学会第21回ジュニアセッションプログラム(日本天文学会主催)に口頭発表3本およびポスター発表5本で参加することが決定した。多くの口頭発表や論文発表の機会を班員全員で共有し成長するため、生徒自らが分担し全員で学びを深めていた。関連したテーマを個別の手法で探究し結果を体系的に考察するためディスカッションを繰り返し班員各々に大きな成長が見られた。

平成27年度より SGH 理系として、生徒自らテーマ設定して探究する講座を設けた。理工系分野での海外協力や役割について学び、将来の可能性を探ることも視野に入れた講座である。SGH 理系班からの東南アジア研修参加者は増加傾向にある。参加者の感想では様々な学びの成果があったようである。現地を見学する機会は研究の深化のために貴重であった。

課題研究は生徒の進路希望に関連しており、またその成果は生徒の将来の目標決定にも影響を及ぼす。

昨年度は生徒の希望により、防災学(建築学)、宇宙工学の2つの班に分かれて研究を進めた。共通のテーマは「宇宙と地球」とした。防災班は、各国の自然災害への対応を探究するうち、まだ見ぬ世界の山積する社会問題の存在を知り、研究者や設計士の方々の協力を得て、熱心に情報収集し自ら建築計画を立案した。仮設建築物で災害地域の支援を行う構想を作成し、探究した。宇宙工学班は専門書を輪読しスペースコロニーの計画を立案し、課題や方向性を見出した。SGH 理系「防災と建築」を学んだ生徒のうち複数名が本課題研究の成果をポートフォリオにまとめ、国立大学工学部建築学科等に合格し、建築および地球科学等を専攻とする予定である。また SGH 理系「宇宙工学」を学んだ生徒のうち複数名が国立大学理学部宇宙物理専攻に進学希望である。

以上の取組は、自ら選んだ主題を追究し、研究者としての資質を伸ばす貴重な機会であった。生徒は試行錯誤しながらも積極的に取り組み、研究内容だけでなく協力して研究する手法についても多くを学んだようであった。課題研究の各場面で多くの方々に暖かくご支援いただいた。

※ 講座前後アンケート

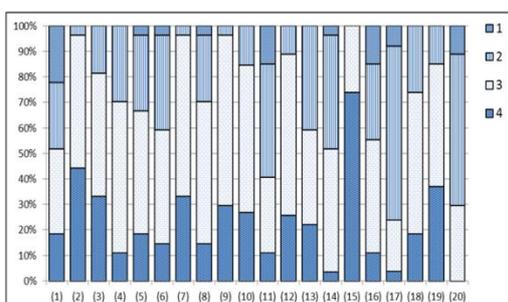
質問事項 問

- (1) 以前より、英語でのコミュニケーションに抵抗がなくなった
- (2) 以前より、海外でいろいろなことにチャレンジしたいと思うようになった
- (3) 以前より、日本のことをもっと知る必要があると思うようになった
- (4) 以前より、開発途上国の文化や風土や政治経済の状況などについて知りたいと思うようになった
- (5) 以前より、大学の先生や企業経営者と話をすることに抵抗がなくなった
- (6) 以前より、東南アジアへの興味や関心が高まった
- (7) 今後も、東南アジア諸国への旅行や現地でのフィールドワークをやりたくなった
- (8) 今後も、東南アジア出身の留学生と意見交換する機会を持ちたくなった
- (9) 以前より、仕事で国際的に活躍したいと思うようになった
- (10) 以前より、地球規模で社会に貢献したいと思うようになった
- (11) 以前より、海外の大学・大学院で学んでみたいと思うようになった
- (12) 以前より、世界的な問題について関心をもつようになった
- (13) 以前より、自分の考えを他の人に聞いてもらおうと思うようになった
- (14) 以前より、開発途上国の人たちと個人的に交流したいと思うようになった
- (15) 以前より、英語によるコミュニケーション力を高めたいと思うようになった
- (16) 以前より、人前で発表することに抵抗が少なくなった
- (17) 以前より、国連や国際NGOなどの国際的な機関で働きたいと思うようになった
- (18) 以前より、開発途上国の経済発展に貢献したいと思うようになった
- (19) 以前より、日本がより望ましい国になることに貢献したいと思うようになった
- (20) 以前より、課題を発見し、分析する力がついた

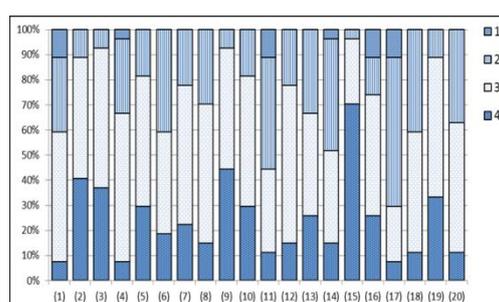
回答

- 4 そう思う
- 3 ややそう思う
- 2 あまり思わない
- 1 まったく思わない

課題研究事前アンケート結果



課題研究事後アンケート結果



課題研究講座事前の所感「これから学びたいこと、改善したいこと」(記述回答)

英語力。自分たちが調べたものをしっかりとした根拠をもとにまとめること。
人との意見交換をもっと積極的にできるようにならないといけない。
自らの発表する力や分析する力。具体的な問題を見つけて解決する力。
天才の定義があいまい。何か指標(一般的なもの)が必要では?
自分たちで取り組むべき課題をみつけられるかどうか。
意見をみんなでまとめあって、一つの答えを出すのが下手。
どちらかといえば「なぜ?」と思うより「そうなんだ」と思って色々と流しがちなこと。
期日までに課題をこなす力が足りない。
メンバーとのコミュニケーション力。テーマの見つけ方。論文の書き方。
レポートなどをまとめる力がない。(使用するかはともかく)英語があまり話せない。
人前で何かを発表する力を身につけること。
文章に関すること(読む、聞く)。しっかりと物事を考えること。
論理的に物事を伝えられるようなプレゼンテーション力をつけたい。英語でアウトプットする力をつけること!
私はプレゼンテーションが苦手なので、それを克服することと、人に意見をちゃんと言うことが課題だと思っている。
自分を含めて各々がもう少し自己主張をした方が良いと思う。
圧倒的に知識が足りないことが課題だと思う。だから建築についての知識をもっと取り入れたいと思う。

課題研究講座事後の所感「課題研究で得たもの」(記述回答)

人前でわかりやすく伝える力。全体の内容を筋道たてて考える力。パワーポイントの使い方。
自分の考えや調べたことをまとめる力。自分より賢い人にもわかってもらえるように説明する力。
パワーポイントやエクセルなどのソフトウェアを使って情報をまとめることができるようになった。人前での発表に抵抗がなくなった。論理を筋道立てて説明できるようになった。
自分たちなりに学力について考えられたと思う。
パワーポイントを作成する技術。人前で発表できる力。
正しい言葉で簡潔に説明すること。真剣に集中して考える力。
論理的に思考する力。
疑問に思うことができる点を見つける力。
大量の情報の中から、必要な情報を取捨選択する力。
他人とうまく折り合いをつけながら物事を進めること。
思い切った行動(作者に連絡を取るなど)ができるようになった。英語を使う抵抗が減った。
研究結果をまとめて考察に導く力。

星座早見表から見つけ出す力。
発表する力。堂々と発表できた。
メンバーとコミュニケーションをとりながら期限内でしあげることの大切さを感じた。また、パワーポイントやパソコンの操作方法も身についた。
考察する力。パワーポイントを作る力。論理的に考える力。
初めは何から手をつけていいのか分からず、自分たちが研究したいこともよく分からないまま時間が経っていた。でも、発表が近づくにつれて、みんなでしっかり話し合えたし、意見もまとまっていった。前期とは違って、仕事も分担していられたので良かった。これらを通してパワーポイントを作るときに初めて見た人に伝わるように簡潔に表現しようと努力できた。またそれと対称的に原稿では具体的に詳しく説明できるように努められた。発表準備のときには読んだときに違和感がないよう修正した。研究中は特に力をつけられたと思う。私たちは物理班だったので計算がメインだったが、その計算はもちろん、計算方法を見つけだすのにも苦労したが、公式にとらわれず、自らの目と手で細かく調べるという新たな方法をみつけ出せたので楽しかった。新たな面で物事を見られたのはすごく良い力になった。まだこのメンバーで研究していきたい！
締切日から逆算して実験などを進めていく力。
ON/OFFの切り替えの上手さ。客観的に自分たちをみる力。協調性。
気合と根性で結論を導くスキル。パワーポイント力。
研究をするときに前回の発表で論理的に弱い部分を見逃されずに指摘されたので、筋の通った発表内容にしようとした。最初は慣れなかったので大変だったが最終発表のときには論理的に考える力を身につけられたのでよかった。

昨年度、今年度とも、研究者や建築士の方々とのかかわりは生徒たちにとって大きな刺激になったようである。高校生の素直な感覚や吸収力、学習意欲に驚くこともあった。向学心と自主性に富み各人それぞれ興味ある分野を深く探究する時間として課題研究を良く活用できた。生徒は探究の途上であるが将来も関心を持って学んでいきたいと決意を新たにしようである。

高校時代から周囲の事象に関心を持ち、自ら発見し探究をスタートすることが課題研究の意義の一つであると感じた。

〈課題〉

今年度の研究成果を生かし、新たな課題で設計計画立案、論理的思考に関する研究等、地域や社会への貢献も視野に入れて来年度以降の講座設定を検討中である。また、一昨年度の本講座の「発電」と昨年度の「防災」の研究は、今年度の課題研究「構造物に関する研究」(月曜班)に活用されている。北野高校生が年度を越えて互いに学びあうことによる研究の深化と、新しい発見の可能性を示唆している。

以上の取組は、自ら選んだ主題を追究し、研究者としての資質を伸ばす貴重な機会であった。生徒は試行錯誤しながらも積極的に取り組み、研究内容だけでなく協力して研究する手法についても多くを学んだようであった。課題研究の各場面で多くの方々に暖かくご支援いただいた。

以下に参考資料を示す。

天文学的側面から見る絵画の正確性 Astronomical accuracy of modern and contemporary art

Abstract

We are interested in how paintings with stars were exact in direction and positional relations. We made a hypothesis of place and direction of their pictures. We suspected what heavenly bodies were painted.

1. 目的

近代以降に描かれた絵画に焦点を当て絵画における天体描写の正確性を検証する。

2. 調査・研究の方法

葛飾北斎の「千繪の海 甲州火振」(1835年ごろ)、ジャン＝フランソワ・ミレーの「星の夜」(1850年ごろ)、ゴッホの「糸杉の見える道」(1890年ごろ)、エドヴァルド・ムンクの「星月夜」(1923年ごろ)、ネイサン・メレオットの「Starry Night over Brooklyn Bridge」(2005年ごろ)の五つの絵画に着目した。検証には「ステラナビゲータ」というソフトを用い、緯度、経度、時刻から星の配置を調べた。「Starry Night over Brooklyn Bridge」は作者に連絡し描画時の様子をもとに検証を行った。

3. 分析と検証

描かれた場所と方位を仮定して、絵画と合う星の配置があるかどうかを調べた。その際、時間も絵との矛盾がないか確認した。それぞれの絵にその構図とおおむね一致する天体の配置が存在することが分かった。

4. 論証

「千繪の海 甲州火振」、「星の夜」、「糸杉の見える道」より19世紀の西洋と東洋の絵はともに、正確性の高い星空の絵が描かれていることが分かった。一方20世紀に描かれた「星月夜」は抽象的に描かれているが、星の位置は正確だと判明した。21世紀の作品である「Starry Night over Brooklyn Bridge」は橋や建物は写実的な描き方だが、月と星の位置関係は実際と異なる。

5. 考察

調査したもののうち、19～20世紀の絵画では天体の配置についてほぼ正確であると確認した。21世紀の絵画では作者の感性に従って構図を決める傾向が推測される。

6. 参考文献

日本美術史事典(平凡社)、大系世界の美術 近代美術(学研)、世界の巨匠(岩波)

天文学的側面から見る絵画の正確性

天体による絵画の描かれた位置の特定

私たちは葛飾北斎が描いた「千繪の海」というシリーズの一作である『甲州火振』(図1)という絵について研究した。この絵は描かれた場所が特定されておらず、私たちはこの絵の描かれた場所について星座をもとに特定することを目的として研究した。

この絵は夏の夜に松明の火で鮎や山女魚を誘って捕らえる火振漁を描いた絵である。



まず、絵から考えられることとして以下の点に着目した。川が急なカーブとなっていること、火振漁がおこなわれるのは8月から9月であること、また火振漁がおこなわれる時間帯は19時から21時であること、参考資料から江戸時代には甲州では桂川と早川で火振漁が行われていたという記述がある。

図1 千繪の海「甲州火振」太田記念美術館

これらの条件をもとにして、星座から夜空の方角を求め、さらなる位置の特定をおこなった。まずは図2の四角に囲まれた星座に着目した。この星座をみずがめ座と仮定する。この仮定について矛盾はないか検証すると、星座の高度、周りの星座ともに大きな矛盾はなく、仮定は正しいと考えられる。

仮定から絵の空の向きが東向きであり、その場合川の上流は北を向いていることがわかる。

仮定によって求められた条件をもとに、桂川、早川についてこの絵が描かれた可能性がある地点を探した。

まず桂川(図3)と考えると、四角で囲まれた地点が絵に描かれている風景ではないか考えた。川のカーブ、左崖の斜面、川の浅さなどが絵と類似している。しかし、川の向きが仮定よりは少し西に傾いている。次に早川(図4)と考えると、川の堆積力が強く、川岸に砂が堆積しているので絵の風景と一致しない。



図2 着目した星座

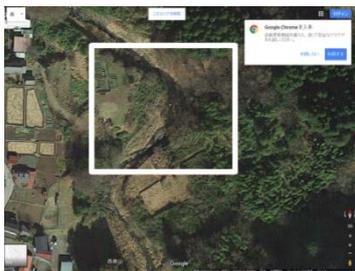


図3 桂川



図4 早川

これらの研究から描かれたのは桂川の可能性が高く、川の向きと仮定と一致しないことについては、描いている時間を考慮していないことなどが考えられる。

参考文献・引用資料

<https://seiza.imagestyle.biz/aki/mizugamemain.shtml>

<https://ja.wikipedia.org/wiki/葛飾北斎と甲斐国>

<http://yumis.net/space/star/aqr.htm>

Star walk (シミュレーター、スマートフォンアプリ)

天文学的側面から見る絵画の正確性 ゴッホ作「糸杉の見える道」

要旨

ゴッホ作である「糸杉の見える道」における天体の正確性について検証した。ステラナビゲーター、Googleマップなどを用いて、絵が描かれた場所と日付、作品中の特徴的な天体の名前を特定し、導き出した結果が史実と合致するものとなったため、作品中の天体描写の正確性が証明されたといえる。

1. 研究の動機と目的

天文学が現代ほど発展していなかった時代に、どこまで正確に天体の方角位置関係を描いていたのかということに興味を持った。ルネサンス以降、写実主義の風潮が広まり天体の描写が認められると、画家は星空の構図を忠実に描くと仮定し、絵画における天体描写の写実性を追求していく。



図1 糸杉の見える道

Wikipedia より

2.1 どこで描かれたのか

これは1890年5月に発表されたゴッホの最期の作品であり、フランス南部、サンレミドブロヴァンスの精神病院で療養中に描かれたものである。どこで描かれたのか調べるため、Googleマップを用いて病院周辺の道を調べたところ、ゴッホがこの絵を描いたことを示す看板を発見したことから、描かれた場所はマリーギヤスケ通りであることが分かった。

2.2 左上の星は何であるか

先ほどの看板が正しいものとみなし、地図上の方角によって天体の位置を調べたところ、糸杉が南西の方角に見えることが分かった。絵の構図から、左上の星も南西の方角に見えると考えた場合、この星は金星であると考えられる。夜に見られる金星は別名「宵の明星」と言われ、夜空で一際輝く星であるため、見つけやすく、絵に描かれやすいことも理由として考えられる。

2.3 いつ描かれたのか

インターネット上に、絵は1890年4月20日に描かれたという説があった。この日は水星と金星が天文合によりシリウス座に匹敵する輝きをもつためである。この情報について、ステラナビゲーター（緯度・経度、日付を入力するとその地、その日の空を見られる機能）を利用して検証した。4月20日の星空を調べたところ、月の位置が西に極端に寄っていることから、この日付は不適切であると判明した。その後、実際にはいつ描かれたのかを調べるために、1890年4月から一か月ごとに遡って三日月の日を検証した。日付を推測する時の条件は、①月が三日月である、②金星が見える、③月が金星の右側に見える、④日没後絵画と月の傾きが似ている、の4つである。計16パターンの検証の結果、1888年12月が絵画と最も近いことが分かった。

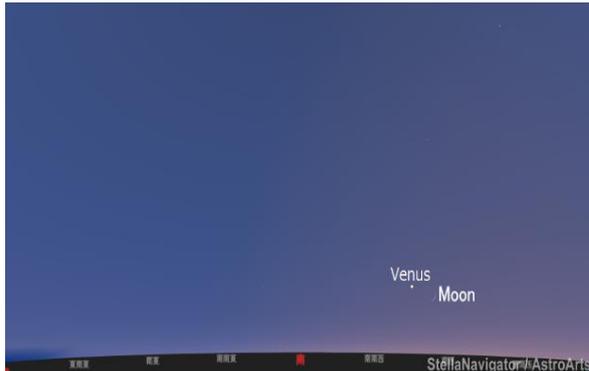


図2 1888年12月5日の空

ステラナビゲーターより

この日が最も絵画の構図と近いということを裏付けるために、近い月である11月と、12月5日前後の日を調べた。検証結果は、

- ・11月は月が金星の左側にあること
- ・12月4日は月が細すぎて絵画と合わないこと
- ・12月6日は月が金星の左側にあること

が分かった。よって、1888年12月5日が星空の描かれた日付であると考えられる。

3. 結論、考察

1888年12月5日は作品発表のおよそ二年前であることから、

- ①彼は天才的な記憶力により天体の位置、輝きを覚えていたのではないかということ
 - ②病院で療養している間、何度も描きなおしていたのではないかということ
- の二点が考えられる。

参考文献・引用資料

<http://yokochu.seesaa.net/article/144164419.html>
<https://ja.wikipedia.org/wiki/糸杉と星の見える道>
ステラナビゲーター、Google map(シミュレーター)

天文学的側面から見る絵画の正確性 「星月夜」

概要

私たちは、絵画における天体の方角位置関係の正確性を検証するため、ムンクが描いた「星月夜」(図1)について研究した。この絵の星は正確に描かれたと仮定し、ステラナビゲータを用いて検証した結果、空の様子は正しいとわかった。

背景

まず、この絵の描かれた背景を調べた。1923年～1924年に、ノルウェーのオースゴールストランで描かれたと言われている。ムンクはこの場所をととても気に入っていたため、一般的には、この絵は写実的というよりも、夜に呼び覚まされた感情を主として描いたと考えられている。

(引用：

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A8%E3%83%89%E3%83%B4%E3%82%A1%E3%83%AB%E3%83%89%E3%83%BB%E3%83%A0%E3%83%B3%E3%82%AF>

[https://en.wikipedia.org/wiki/Starry_Night_\(Munch\)](https://en.wikipedia.org/wiki/Starry_Night_(Munch))

<https://www.musey.net/5770>

<https://4travel.jp/travelogue/10724169>

<https://www.artpedia.jp/edvard-munch/>)

仮説

私たちは、ムンクが感情のままに絵を描いたのではなく、実際に空を見て描いたと仮定した。そこで、星座早見盤を置いて似た形の星座を探したところ、冠座と牛飼い座の一部と似ていた。また、絵に海らしき風景が描かれていたため、地図を用いて海の方角を確認した。その結果、おおよそ北から西を見ながら描いたと予想した。

検証方法

緯度、経度、時刻を設定すると、その当時の空や星の様子がわかる「ステラナビゲータ」というソフトを使い、当時の空には、どの方角にどのような星座が見られるか確認した。

結果

1924年8月下旬の午前3時30分ごろ、北北西に冠座と牛飼い座の一部が確認できた。また、空の地平線辺りが明るいことも、絵画と一致していた。

考察

絵画全体は、曖昧な描写やぼんやりと描かれた部分が多い。しかし、星の位置は正確であるため、実際に見た景色を思い出して描いたと考えられる。また、夜空の地平線あたりが明るい理由は、ノルウェーが高緯度に位置し、時期が夏であることから、白夜であると考えた。

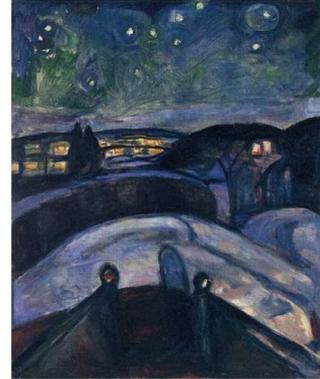


図1 星月夜

絵画と天文学

「Starry Night over Brooklyn Bridge」

要旨 私たちは、Nathan Mellottの『Starry Night over Brooklyn Bridge』について検証を行い、月とその隣の星の正確な場所および日時の特定を目指した。絵と実際の星空は完全には一致しなかったため、この絵は作者が美しいと思う感性に従って描かれたと考えられる。

予想 私たちは、まず絵を見ただけでわかる情報を集めた。分かったことは以下のとおりである。まず描かれた場所は、アメリカ ニューヨークのブルックリン橋である。絵画中の月が満月で、背景が真っ暗かつ月の高度が低いことから、冬の可能性が高い。またどこか高い地点から描いていると考えられる。

次に、Google マップで調べた結果、描かれた方位は南東であると推測した。また、本人の公式サイトより、2014~2015年に描かれたと考えた。



図1 Starry Night over the Brooklyn Bridge



図2 絵画の描かれた正しい方位

<https://search.yahoo.co.jp/image/search?rkf=2&ei=UTF-8&gdr=1&p=Starry+Night+over+the+Brooklyn+Bridge> より引用

検証

- (1) シミュレーションソフト「ステラナビゲーター」を用いて、調査範囲を2014~2015年にして、冬を中心に満月の日の星空を一つずつ調べていった。
- (2) (1)と同時に、作者がまだ存命ということから、公式サイトからメールでの接触を試みた。

結果

作者からの返信により、絵の描かれた時期は2005年の2~3月、場所はウォーターストリートとフルトンストリート付近のアパートの29階と判明した。この情報から月の見える方位を再検証すると、絵画の描かれた正しい方位は南東ではなく東とわかった。また、ニューヨークは明るい星でなければ見えないという作者からのアドバイスを踏まえ、月の隣の星は十分に明るい惑星と考えた。これらから立証を進めると、作者の返答と一番一致したのは、2005年2月20日19:00の星空であった。この星空は方位と明るい星(土星)という条件には合致するものの、月の隣の星の位置(右斜め下→右斜め上)は異なる。



図3 2005年2月20日19:00の星空

考察

私たちの班は、同じグループの他の班と違い、作者が存命であること、場所や日時の特定がしやすいことから、月とその隣の星の正確な場所および日時の特定を目標とした。私たちの考える絵画の描かれたときの実際の風景と、絵画は星の位置関係が異なる。つまり、星は絵画において必ずしも正しい位置に書かれてはいない。よって、この絵は作者の美しいと思う感性に従って描かれているといえる。

絵画と天文学

Jean-Francois Millet 作「星の夜」

要旨

ミレーの『星の夜』における天体描写の正確性を調べた。描写とミレーに関する情報から、描かれた時期、場所、方角を予測した。予測に基づいて、描写とおおまかに一致する星空の配置をステラナビゲーターを用いて確認した。『星の夜』における、天体描写はほぼ正確であることが分かった。

1. 目的

ミレーの『星の夜』に焦点を当て、絵画における天体描写の正確性を検証する。

2. 調査と研究の方法

ミレーの『星の夜』に着目し、描かれた夜空と木の様子やミレーに関する情報から、描かれた時期、時間帯、場所、方角を予測して仮説を立てた後、「ステラナビゲーター」で仮説の条件における星の配置と、絵画の星空を比較して、時間をずらすことでそのずれを修正しながら、最も描写と似ている星の配置と、その観測条件を考察した。

3. 調査結果

絵画と星空の配置がおおむね一致する条件が存在することが確認された。

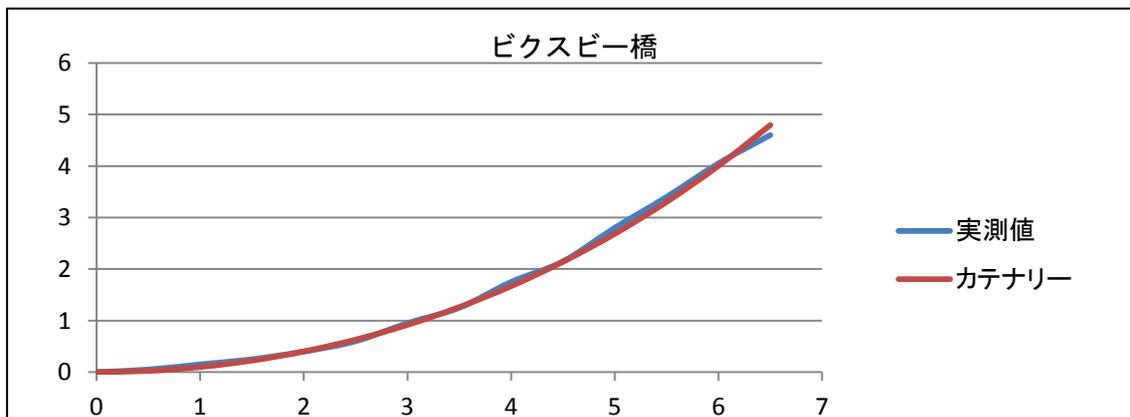
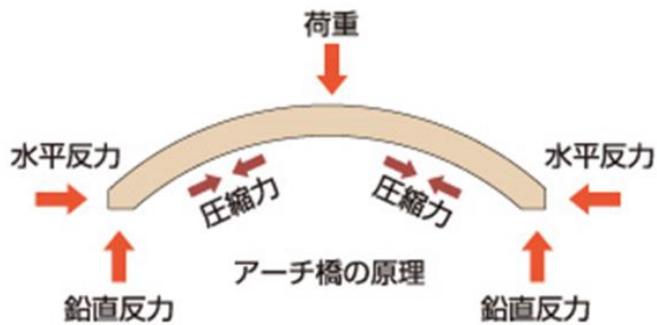
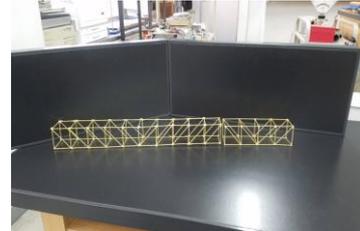
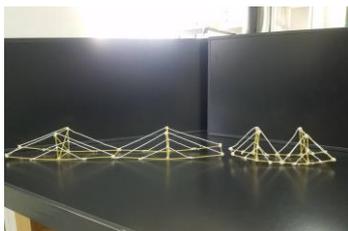
4. 結論

ミレーの『星の夜』は天文学的にほぼ正確に描かれていることがわかった。

橋梁架構に関する考察（抜粋）



	カテナリー曲線との 差異	放物線との差異	カテナリー曲線と 放物線の差異
天草五号橋	0.0037	0.0029	8.41×10^{-5}
赤谷川橋梁	0.0010	0.0019	4.42×10^{-5}
南風原大橋	0.0036	0.0052	1.88×10^{-5}
錦帯橋	0.0046	0.0043	1.61×10^{-5}
第二音戸大橋	0.0017	0.0026	8.89×10^{-5}
ビクスビー大橋	0.0054	0.0033	4.41×10^{-5}
五色桜大橋	0.0020	0.0018	5.13×10^{-5}
フーバーダム	0.0250	0.0360	1.36×10^{-5}



4. 海外フィールドワーク・国際交流事業

1. SGH 委員会主催による海外研修

(1) ハワイ研修

〈目的〉

生徒の英語によるコミュニケーション力の向上と、ハワイの文化や移民の歴史などを学習することを通じて世界に向けて開かれた視野とグローバル社会に対応できる資質を身につける。

〈内容〉

本校が SGH に指定される 1 年前の平成 25 (2013) 年度から始まった取組である。初年度から 7 月下旬に主に 2 年生を対象として実施しており、ハワイ大学マノア校における語学研修・現地のプナホウ高校との交流が毎年継続されてきた。平成 30 年度に行われたハワイ研修の内容についての詳細は、後の記録文を参照されたい。

(2) 東南アジア研修

〈目的〉

生徒の英語によるコミュニケーション力・情報発信力の向上と、現地での生活を体験することを通じてアジア社会に対する視野を広げる。また、経済成長著しいアジアの都市でのフィールドワークを通じて、「4つのアプローチ～文化・経済・防災・歴史」を意識した本校の SGH 課題研究において生徒が行う探究活動に資する。

〈内容〉

当初は SGH に指定された本校の 2 年次における課題研究とリンクした取組として設定された。しかしながら翌年 8 月に発生したバンコクのテロ事件などの影響を受け、その後の企画変更を余儀なくされた。当該の年度からは東南アジアの中でも比較的安全度が高いシンガポールをフィールドとした研修を実施している。平成 30 年度は英語によるコミュニケーション力の向上に重点を置き、研修日程を延長した上で現地の語学学校での講習を採用した。また、課題研究に向けた動機づけというねらいから、1 年生にも参加の機会を保障している。平成 30 年度に行われた東南アジア研修の内容についての詳細は、後の記録文を参照されたい。

〈成果〉

例年 40 人規模で参加希望の生徒を募集するが、応募者が 100 名を上回った年度もある。研修に参加した生徒自身にとっても、記録文に収録されたアンケートの結果や感想文に見られるように、各自が得たものや満足度は大きいといえる。

〈課題〉

一方で研修の実施に伴ういくつかの問題点が本校教員の中から指摘されていることも事実である。本校は今年度末で SGH の指定が終了する。海外研修の実施形態については、

SGH 後継事業のあり方もふまえた上で慎重に検討していくことが求められる。

2. 国際交流委員会主催による海外研修

平成4（1992）年3月にさかのぼるアメリカ・ケントウッド高校との交流をルーツとして、本校と海外の高校との提携・交流は、双方の生徒が相手校を訪問し、実際に授業を受けるなどの形で行われてきた。現地で生徒が滞在する形態は相手校生徒の家庭でのホームステイである。現在、校内組織である国際交流委員会が主催する海外研修（交流）は以下の2種類である。

（1）アメリカ・ケントウッド高校との交流

例年7月の中旬から下旬にケントウッド高校・ケントレイク高校（府立阿武野高校と提携）から生徒が来日し、本校と阿武野高校を訪問する。3月下旬には本校および阿武野高校の生徒が提携相手校を訪問する。

（2）台湾・建国高級中学校

今年度は5月に建国高級中学校の生徒が本校を訪問した。また、3月下旬には本校の生徒が台湾での研修旅行に参加し、建国高級中学校および第一女子中学校を訪問して交流を行う。

さらに国際交流委員会では、次年度末（西暦2020年3月下旬）に本校の生徒が訪問する計画のもとに、オーストラリアのシドニー近郊にあるクロークウェル高校との連携を進めているところである。

【日程表】

平成29年12月21日 作成

大阪府立北野高等学校平成30年度東南アジアフィールドワーク研修旅行

株式会社近畿日本ツーリスト関西 大阪教育旅行支店

日次	月日	曜	発着地・滞在地	現地時間	交通機関	摘 要	食事
1	7月22日	日	関西国際空港 関西国際空港	8:00 10:55	SQ-619	ご集合 空路、シンガポール航空にて シンガポールへ	機
			シンガポール・チャンギ国際空港	着 16:40 19:00	専用車	到着後、専用車にて移動 シンガポール市内にて夕食後、ホテルへ (RELCインターナショナル 泊)	タ
2	7月23日	月	シンガポール	午前 午後		ホテルにて朝食 ～RELCにて語学研修～ 語学学校にて英語研修① 語学学校にて英語研修② (RELCインターナショナル 泊)	朝 × タ
3	7月24日	火	シンガポール	午前 13:00 18:15		ホテルにて朝食 語学学校にて英語研修③ 【アジア・オセアニア公文訪問】 現地で活躍する日系企業を訪問 ディスカッション・プレゼン 市内レストランにて夕食後、ホテルへ (RELCインターナショナル 泊)	朝 × タ
4	7月25日	水	シンガポール	9:00 13:00 18:15	専用車	ホテルにて朝食 専用車にてシンガポール大学へ 【シンガポール国立大学訪問】 現地学生とフリートーキングセッション ※大学内にて各自昼食 【市内班別自主研修】 MRTを乗り継ぎフィールドワーク 市内レストランにて夕食 夕食後、リパークルーズ・スカイパークへ (ロイヤルホテル 泊)	朝 × タ
5	7月26日	木	ジョホールバル シンガポール	着 9:00 13:00 着 18:15	専用車	ホテルにて朝食 専用車にてマレーシア工科大学へ 【マレーシア工科大学訪問】 現地学生とフリートーキングセッション ※大学内にて各自昼食 【イスカンダル計画見学】 エデュシテイ、メディニ地区、ショッピングモールなど シンガポール市内レストランにて夕食 (ロイヤルホテル 泊)	朝 × タ
6	7月27日	金	シンガポール	9:00 13:00 19:00	専用車	ホテルにて朝食 専用車にてマリーナパラジッへ 【マリーナパラジッ等見学】 現地企業ニューウォータービクターセンター訪問 市内レストランにて昼食 【セントーサ島自主研修】 ユニバーサルスタジオ等 フィールドワーク 市内レストランにて夕食後、ホテルへ (ロイヤルホテル 泊)	朝 昼 タ
7	7月28日	土	シンガポール・チャンギ国際空港 シンガポール・チャンギ国際空港 関西国際空港	8:30 着 11:30 発 13:55 着 21:30	専用車 SQ-616	ホテルにて朝食 市内観光（ラッフルズ上陸地点・ガーデンバイザベイなど） その後、専用車にて空港へ 到着後、チェックイン 帰路、関西国際空港へ 到着後、入国手続きを済ませ、解散 お疲れさまでした。	朝 × 機

☆発着日時及び交通機関は変更になることがあります。 ●食事（朝→朝食、昼→昼食、ター夕食、機→機内食）
 ☆無手配日の期間は、当社により航空機、ホテルなどの手配サービスの手配を全く行っておりません。
 当期間にお客様が被った被害については当社約款に基づく補償金等の支払いの対象となりません。

東南アジアシンガポール研修引率報告書（7/22～7/28）

■第1日（7/22（日））

午前8時関空集合、引率教員による注意事項と教頭の激励の後に、SQ619 便にて関空を出発。今後各所で点呼の必要があるため、出国審査後すぐにクラス別の班と班長を作り生徒相互による点呼と報告の方法を決めた。研修中最後まで、迅速で正確な点呼が実施できた。（現地到着後は活動班別の班長による点呼とした）無事シンガポールに到着し、シャトルバスで市内の中華料理店に移動。皆、バスの車窓から市街地の風景を楽しんでいるようであった。夕食は好評だった。夕食時に毎回生徒が交替で挨拶を行い、自発的にショートスピーチを行う習慣ができた。その後ホテルに移動し、英語によるオリエンテーションが行われた。皆、異国での宿泊を楽しんでいるようであった。ホテルへは遅い到着であったが予定通り22時頃には皆眠りについた様子が伺えた。前半の3泊は、語学研修が行われる Regional Language Center（RELC）併設のホテルに宿泊する。

■第2日（7/23（月））

Regional Language Center（RELC）における語学研修が始まった。午前、午後とも3つのクラスに分かれて、語学学校（RELC）の教員による授業を受講した。昼休みは、男子は現地係員と添乗員の引率で初めて市街のフードコートを経験した。女子はホテルのカフェテリアで昼食後、Shangri-la ホテルのパブリックエリアを見学した。米朝会談でトランプ大統領が宿泊したホテルである。

また、夜は全員で市街のフードコートで夕食を取った。その後、全員で世界遺産のボタニカルガーデンを見学した。午前の開校式で語学学校の校長 P 氏とシンガポールの環境政策について情報交換した際に推薦されたボタニカルガーデンである。ルールを守って迅速に行動し充実した時間となったようである。全員の体調は良好であった。

行程中は教員間で、東南アジア研修を課題研究でどう活かすべきか、文系と理系の両方の分野から検証する材料とすることを確認し意見交換した。また、今回の参加生徒にとって5泊のシンガポールがより充実したものになるよう現地で工夫できることを打ち合わせた。シンガポール研修は環境教育という視点からも有意義なものになると感じた。担当の課題研究班の2年生も参加しているため、情報提供や意見交換の機会を取ることができ、有意義だった。

■第3日（7/24（火））

午前中は RELC において語学研修第2日である。生徒は2～3人ずつの班でシンガポールの特色に関する調査学習を行い作成した手書きのポスターを用い、全員が交替で英語によるプレゼンテーションを行った。良い経験になったようである。どの班も昨日の遠征後にホテルの部屋で遅くまでポスターを準備し、タイトなスケジュールでよく頑張っていた。

午後は企業訪問を行った。訪問先は SHINOBI SAUCE（しのびソース）という食品加工業の会社である。社長は伊賀に所縁の F さんという方で、社名には忍者という意味の「しのび」を冠している。この日は工場のラインを止めて、社長自ら工場見学を引率し、献身的に詳しい説明をくださった。皆、見学時にとっても熱心にメモを取りながら聞いていた。

若い現地の従業員3名が班別に加わりディスカッションを行った。皆、従業員の方々の専門分野と進路選択の話を興味深く聞いていた。産学連携等の企業の学生研修受け入れのコーディネートをやる日本人女性の尽力も大きかった。日本語教師とコーディネートの両方をこなす20年現地在住の女性の仕事ぶりは、進路に悩む高校生が進路を考える上で、選択には多様な可能性があるという、1つのヒントを得たのではないか。シンガポールの環境政策について探究する方法を相談したところ、良いアドバイスを得た。スカイプを活用して仕事をされており今後も課題研究の質問にも応じてもらえるとのことである。日本から準備してきたパワーポイントで日本紹介のプレゼンテーション3種類を行った。



■第4日(7/25(水))

午前中はシンガポール国立大学を訪問し、大学生と少人数班別のディスカッションを行った。皆、英語でのディスカッションに1時間熱心に取り組んだ。活発なコミュニケーションの場となり、とても楽しそうであった。その後1時間の班別キャンパスツアーを大学生の引率で行った。このような長時間の英語のディスカッションが成立するのは珍しいと係員の賞賛をいただいた。その後、学生食堂によるケータリングで昼食を取った。非常に美味で皆喜んでいた。はじめの挨拶と、御礼の挨拶についても直前に希望を募ると積極的に名乗り出てしっかりと行った。

午後には班別の市内自主研修(MRT等の交通機関を自由に利用)を行った。生徒全員が自主的に事前に計画を練り戻る時間を計算し、予定どおり集合した。毎回の集合で班長による点呼と報告により数分で全員の安全確認ができる。全員が迅速に安全に行動でき、優秀であった。

専用バスで移動後、市内の中華料理店で夕食を取った。夕食後のマリーナ地区の見学では、ボートに乗り(リバークルーズ)マリーナベイサンズに移動した。光と音のショーを観てからマリーナベイサンズホテルの展望台スカイパークに上がり皆、楽しそうであった。特に夕焼けに映える川からの景色に皆歓声を上げていた。

また第4日より、クオリティーホテルでの宿泊となる。皆互いに仲の良い友人が増え和気あいあいとした様子である。

■第5日(7/26(木))

専用バスで橋を渡り国境を越えて陸路でマレーシア(ジョホールバル)に入国する。バスを降りて出国と入国の審査を行う。同じ橋を使って、午前中には多数の労働者がマレーシアからシンガポールに入国し、また夕刻には逆方向に渋滞する橋を渡って帰っていく。その労働者の人々とすれ違う経験は貴重であった。

マレーシアに到着後はマレーシアの現地ガイドと合流し、マレーシア工科大学を訪問。民族衣装を身にまとった50名程度の大学生と大学教員の方々に大歓迎された。歓迎会で

は2年生2名と引率教員が挨拶を行った。大学生2名のマレーシア紹介プレゼンテーションを聞いた。返礼として本校生も予定通り、3つの班が3種類の日本紹介のプレゼンテーションをパワーポイントと動画などを用いて行った。第3日の日本企業でのプレゼンテーションの経験も踏まえ、さらに改善していた。聴衆の大学生にも好評のようであった。交流の時間は、マレー語やその他の民族の言語と文字を体験する班、民族衣装を体験する班、マレーシアの遊びを体験する班2種の4つの班に分かれ、順番に全員がすべての内容を体験できるように企画されていた。大学生の方々に親切に教えてもらって、生徒たちはとても楽しんだ様子である。マレーシア工科大学の人々の穏やかさ、優しさに感銘を受けたと、生徒たちは名残惜しんでいた。マレーシア工科大学では大学教員多数をあげての歓迎と協力をいただいた。

その後、社会見学としてイスカンドル計画（エデュシティ、メディニ地区）を見学した。昼食はジョホールバルのショッピングモールのフードコートで取った。ショッピングモールではマレーシアの急速な近代化に触れ、シンガポール再入国の際には出稼ぎ労働者の通勤ラッシュの厳しい現実を垣間見ることとなった。毎日の専用バスでの移動中、シンガポールの現地ガイドの方のお話は大変勉強になった。どの文献にも書かれていないような現在のシンガポールとマレーシアについての情報である。向学心のある生徒は詳しく聞いて学んでいる様子であった。



■第6日（7／27（金））

マリーナバラッジ、植物園、ニューウォータービジターセンターを見学した。シンガポールの環境政策は国際社会が注目する水準である。特に浄水技術に関しては欧米の研究者の見学も多いそうである。皆、ニューウォータービジターセンターで英語の解説を熱心に聞き、体験コーナーを積極的に体験しながら意欲的に見学していた。帰りに感想を述べ合うと良く学んだ様子が伺えた。

午後には、セントーサ島に専用バスで移動し自主研修を行った。多くの生徒がユニバーサルスタジオシンガポールに入場した。2年生男子生徒は水族館等を見学した。良い思い出となったようである。毎回の夕食時には、交替でショートスピーチを行っており頼もしい雰囲気だった。今回の夕食を含め、食事は毎回好評であった。その後、満月前夜の月（翌日はマイクロムーン、見かけの大きさが最小の満月）を名残惜しみながら空港へと向かった。

■第7日（7／28（土））

深夜のSQ618便にてシンガポールチャンギ国際空港を出発し、同日午前に関西空港に無事到着した。引率教員、添乗員、校長の挨拶の後に解散した。生徒達は各自、関係者に御礼を述べ、帰路についた。

※行程の概略

- (1) 語学研修 **Regional Language Center (RELC)**
- (2) 社会見学 ①シンガポール：New Water Visitor Center (浄水施設)、植物園 等
②マレーシア：イスカンダル計画
- (3) 国際交流 ①大学訪問：シンガポール国立大学、マレーシア工科大学
(大学生との交流は活気ある班別ディスカッションとなり、大変有意義であった。訪問先では日本紹介のプレゼンテーションを行った。この間に陸路で国境を越えてジョホールバルに渡る体験をした。)
②食品加工会社 **SHINOBI SAUCE**(しのびソース)見学
- (4) 自主研修 ①シンガポール市街 ②セントーサ島

各場面で、生徒同士で点呼や短いスピーチを行い適切に進行した。全行程を通じ、皆、熱心に取り組み、各自が安全や健康に留意しながら、国際都市シンガポールやマレーシアの様々な状況を直接見て学ぶことのできる有意義な研修であった。

東南アジアシンガポール研修生徒報告

1年 T. M

私にとって、シンガポールでの一週間はとても充実したものであり、さらに自分にとってためになるものだったと感じる。この語学研修を通して気づいたこと、感じたことを2つ挙げたい。

私は語学研修中のプログラム、シンガポール大学の訪問で、1人の学生に質問をした。「シンガポールではたくさんの人種の人がいるけど、すれ違いが起きたり、ぶつかり合ったりしないのですか」と。その学生はこう答えた。「確かにたくさんの人種の人が集まっています文化の差はある。しかし僕たちは、みんなが違う意見をそれぞれ持っていて、それぞれの文化が異なることを知っているから、その違いを逆にハーモニーにすることができるとだよ」と。その学生の意見に私はとても共感した。皆それぞれ異なった文化を持っているのは当然であり、それらを調和し、より良い社会を築き上げることが可能になれば、どれだけの問題を解決することが出来るのだろうか。今私たちに必要なのは、それぞれが異なった文化を持つことを理解し、受け入れていくことであると、この研修を通して気づくことができたのである。

私は、学校の授業など、英会話の経験ができる場面では積極的に英語で会話しようと意識している。しかし、やはり心の何処かで相手が日本人であり、英語でなくとも日本語でも通じるということに甘えてしまっている部分があったように今思う。全く言いたいことが伝わらない時、なんと訳せば良いかわからない時、最終的には日本語でその場をしのいでしまっていた。しかし、外国では日本語は当然のように通じない。知っている英単語を最大限に活用して、またふさわしい英単語が見つからない時は、ジェスチャーを用いて、なんとでも伝えないといけない。私はこのシンガポール滞在中、「日本語では通じない」という厳しい環境の中で英語を学んだことにより、英語のコミュニケーション力が上昇し、さらにこれから日本で英会話をするときに意識しなければならないことを見つけることができた。

シンガポールでの語学研修でたくさんのことを学んだが、学んでそこで終わりにせず、その学んだことを生かして、これからもさらに学び続けていきたい。

1年 F. K

そもそも、私がこの研修に応募したのは、将来英語が話せるようになるために、一度海外がどんなものか経験したかったからだ。この研修が始めての海外だったので、向こうで体験した全てのことが新鮮に感じた。まず着いて思ったのが、日本車が多いなことだ。海外の中の日本とはどういう感じなのか、漠然としたイメージしかなかったが、実際に行ってみると、日本のものが思っていたより多いという印象を受けた。そして、行く前からシンガポールと中国は近いという印象もあったが、ご飯の中華料理の多さからやはりそうだと認識した。そして、RELCでの研修ではシンガポールの歴史について学ぶことができ、歴史好きな私はとても楽しく受けることができた。日本は第二次世界大戦のとき深くかかわっていたということを知った。また、日系企業とマリーナ・バラッジの見学では、シンガポール政府が小さい土地の中で効率よく生産する仕組みをとっていることを知

り、日本との差を感じた。

このシンガポール研修では、貴重な経験をたくさんしたが、中でも印象に残っているのは、大学生との交流や、市内の店舗でものを買うときにした、外国人との一対一の英語での会話であった。あらゆるところで英語で会話したが、気づいたことが二点あった。一つは、意外と英語というのは、文がしっかりしていなくても伝わるということ。私はできるだけ文章にして伝えようとしたが、やはり、知らない単語や表現がまだまだ多いので、どうしても単語を並べることになってしまうのだ。でも、相手も聞き取ろうとしてくれるので、なんとかか会話にはなった。しかし、流暢に話せるほうがいいので、文法と単語はこれからも勉強をがんばろうと思った。

もう一つは、先ほどいった、割と拙い英語でも会話にはなるということを前提としたとき、結局英語で大事なの一対一のコミュニケーション力であるということ。私は特に店でモノを買うときにそれを痛感した。何回もモノを買う機会があったが、その度に緊張してしまって、小さい声になってしまって、店員さんが困惑するということがあった。これは英語どうのこうのよりも、コミュニケーションの問題だと思う。特に外国の店員さんはグイグイ来るので、特に緊張してしまった。たぶん単語並べただけでも伝わるので、チャレンジして外国人と相手するのが大事だと感じた。

私はシンガポールに行き、日本よりもいいところ、反対に日本の方がいいところをたくさん見つけました。例えば、シンガポールには「National Day」という、国の誕生日を総出で祝うものがある、それはとてもいいなと思った。反対に、日本の方がいいなと思ったのは治安です。シンガポールにいたときは、ガイドさんや先生からも「荷物から目を離すな」と何回も言われましたが、閑空に帰ってご飯屋さんに行くと、客の人がみんな荷物を入り口に置いて、ご飯を食べているのです。これを見た瞬間、驚いてしまって、これが日本かと思ってしまった。今回はシンガポールとマレーシアだけだったが、これから先、もっと海外に出て、その国を知るとともに、日本と何が違うのか肌で体感できる機会があればいいなと思った。

2年 T. M

私は今回の東南アジア研修を通じ、様々な新しい体験をすることができた。

一つめは、シンガポールの言語体系についてだ。シンガポールの公用語は英語だ。しかし、シンガポールに住んでいる国民の多くは中華系やマレー系、インド系など母語が英語でない人たちである。そこで学校では公用語の英語だけでなく、伝統的な言語も一つ選んで学習しているそうだ。これは自分たちの国の本来の文化を忘れないための工夫の一つだと感じた。

二つめは、高層ビルが建ち並ぶ一方で市街地にはたくさんの緑があったことだ。シンガポールは独立して今年で53年の国だが、リゾートやホテルが開発され、世界でも有名な大企業のオフィスが並び、急速に発展している。そのため、私は今までシンガポールは経済発展だけを優先して進めてきたと考えていた。ところが、今回の研修を通じて日本よりも環境への意識が高いことがよくわかった。例えば、チャンギ国際空港には50万以上の植物があり、壁に植物が植えられていたりする。街中も同様に緑が大変多い。日本の市街地は建物ばかりで植物はあまり育てられていない。ヒートアイランド現象や地球温暖化の対策として、日本もシンガポールのように都市と緑を上手く共存させることができればいいなと思った。

いと思った。

三つめは、水の問題についてだ。日本にいる時は好きな時に好きなだけ当たり前のように水を飲んでいるが、世界にはシンガポールのように水不足の国が少なからずあることを知った。実際、シンガポールでは国で必要とする水を賄うだけのダムや湖などが圧倒的に不足している。さらにマレーシアからの水の輸入も2061年までとなっているため、国を挙げて水不足に取り組んでいるようだ。研修で訪れたニューウォーター・ビジターセンターでは下水処理により再生された水を飲んだが、飲料水としておいしく飲むことができた。この工場の技術は世界的に見てもかなり優れているようだ。

今回の研修は私にとって二度目のシンガポール訪問だった。初めての訪問時にはわからなかった数々のことに新しく気付くことができた。シンガポールの経済発展、それに伴う社会のひずみ、文化の多様性等、多くのことを肌で感じることができた有意義な7日間であった。

【日程表】

平成30年7月18日 作成

大阪府立北野高等学校平成30年度SGHハワイFW研修旅行
【日本航空ご利用の場合】

株式会社近畿日本ツーリスト関西 大阪教育旅行支店

日次	月日	曜	発着地・滞在地	現地時間	交通機関	摘 要	食事
1	7月22日	日	関西国際空港 関西国際空港 ホノルル空港	発 16:30 19:05 着 8:10 9:10 15時頃 18:00	JL-8792 専用車	ご集合 日本航空にてホノルルへ出発 〈～日付変更線～〉 ホノルル空港到着、入国審査 ホノルル市内観光へ ・モアナルアガーデン（全体写真） ・ヌアヌパリ展望台見学 ・ドールプランテーション見学 ホテル到着（チェックイン後は各自周辺散策） アラモアナショッピングセンター フードコートにて夕食 （アラモアナホテル 泊）	機 昼 夕
2	7月23日	月	ホノルル	滞 8:00 8:15 9:00 14:30 15:05 16:45	専用車 専用車	ホテルご出発 ハワイ大学到着 SGH研修スタート 授業終了 ダイヤモンドヘッドハイキング ハワイ大学寮到着 （ハワイ大学寮 泊）	朝 × 夕
3	7月24日	火	ホノルル	滞 9:00 14:30 15:00 16:45	徒歩	語学研修開始 授業終了 ハワイ日本文化センター見学 ハワイ大学寮到着 （ハワイ大学寮 泊）	朝 × 夕
4	7月25日	水	ホノルル	滞 9:00 12:45 13:10 15:00 16:00 16:30 20:30	専用車	SGH研修開始 ハワイ大学出発 BISHOP MUSEUM見学 PUNAHOU SCHOOL訪問 PUNAHOU SCHOOL出発 ホテル到着（再チェックイン） 夕食後（ドンキホーデーフードコート）、ホテル到着 （アラモアナホテル 泊）	朝 × 夕
5	7月26日	木	ホノルル	滞 8:30 9:00 14:20 14:45 18:45 19:00 21:00 23:00		ホテル出発 SGH研修開始 研修終了 ワイキキ班別研修（グループ単位/単独行動禁止） （18:45にホテルでチェックを受ける事） ホテル集合 アラモアナショッピングセンター フードコートにて夕食 ホテルロビー再集合 就寝 （アラモアナホテル 泊）	朝 × 夕
6	7月27日	金	ホノルル	滞 8:30 8:35 11:45 12:15 14:30 16:30 20:30	専用車	ホテル出発 ダウントウンフィールドワーク ※移動中の路線バスは実費 アロハタワー再集合 ハイアットリージェンシーにて修了式 修了式終了後、自由時間 ハイアットリージェンシー出発（ディナークルーズへ） ホテル到着（ホテル到着後、帰国の準備） （アラモアナホテル 泊）	朝 × 夕
7	7月28日	土	ホノルル	発 7:30頃 8:30 10:30	専用車 JL-8791	ホテル出発 ホノルル空港到着 空港到着後、搭乗手続き、出国審査 ホノルル空港到着空港より、空路帰国の途へ 〈～日付変更線～〉 （機内 泊）	朝 × 機
8	7月29日	日	関西国際空港	着 14:20		到着後、入国手続きを済ませ、解散 お疲れさまでした。	機

☆発着日時及び交通機関は変更になることがあります。 ●食事（朝→朝食、昼→昼食、夕→夕食、機→機内食）
☆無手配日の期間は、当社より航空機、ホテルなどの手配サービスの手配を全く行っておりません。
当期間にお客様が被った被害については当社約款に基づく補償金等の支払いの対象となりません。

ハワイ研修引率報告書（7/22~7/29）

■第1日（7/22（日））

関西国際空港を出発し、ホノルルにあるダニエル・K・イノウエ国際空港に到着。陽気なバスガイドさんの案内のもと、ホノルル市内を観光した。日立の樹で有名なモアナルアガーデン、オアフ島の東海岸を一望できるヌアヌパリ展望台、太平洋戦争の様子をアメリカの立場から描写するパールハーバービジターセンターを訪問した。ハワイの雰囲気を感じた。初日はアラモアナホテルに宿泊した。文字通り、アラモアナショッピングセンターが目前にあり、とてもきれいなホテルであった。

■第2日（7/23（月））

これからの学び舎になるハワイ大学マノア校に初めて向かった。とても自然豊かなキャンパスで、勉学に励むには最高の環境であった。到着するとまず、歓迎セレモニーが行われた。今回の研修に携わるハワイ大学のスタッフによるスピーチが行われた後、実際に授業を行う3人の先生が紹介された。その後、6~7人の各テーブルにハワイ大学のスタッフが座り交流が始まった。緊張してあまり話すことができない生徒や、身振り手振りを交えながらハワイの第一印象を述べている生徒などさまざまでしたが、皆一様に生き生きとしながら英語でコミュニケーションを取っていた。

歓迎セレモニーの後、3クラスに分かれて授業が始まった。実際の大学の教室を使った英語の授業はとても新鮮だったように思う。授業後は、ダイヤモンドヘッドのハイキング。思った以上にハードなハイキングだったが、山頂に到達すると青い海と空が見え、生徒も我々教員も達成感に満ち溢れていた。この日と第3日は、ハワイ大学にある寮に宿泊した。他の在學生や留學生とともに大学生活を過ごすことができた。

■第3日（7/24（火））

午前中は語学の授業に加えてフラダンスの授業を受けた。陽気な先生が、ハワイの歴史を交えながら教えてくれる。生徒とともに私も初めてフラダンスを踊ったが、想像以上に難しかった。生徒（特にダンス部員）は飲み込みが早く、軽快に踊っていた。午後の授業を終えてからは、ハワイ日本文化センターに行った。ハワイにおける日系移民について様々な学びがあった。

■第4日（7/25（水））

午前中、前日に学んだ日系移民についての講義があった。生徒からの質問も多くあり、段々と英語を話すことに積極的になっていることに感心した。私自身も日系移民について知らないことが多かったので聞いてよかったと感じた。午後はビショップ美術館と、オバマ前アメリカ大統領の出身校であるプナホウ高校を訪問した。プナホウ高校はとてもきれいで広く、大学のようなキャンパスだった。短時間であったが、在學生と交流することができた。

■第5日（7/26（木））

日本人生徒が2～3人に分かれ、その中にハワイ大学の大学生が入る交流会があった。日本での生活を話したり、ハワイについての質問をしたり、各グループ英語で会話を楽しんでいた。午後はワイキキ研修。グループに分かれ思い思いにホノルルを楽しんでいた。ワイキキビーチはザ・ハワイと呼べるような光景で、多くの人でにぎわっていた。

■第6日（7/27（金））

午前は最後の研修であるダウンタウンフィールドワークを行った。授業のクラスに分かれ、授業で勉強した観光地を各担当者が説明していた。英語だけではなくハワイの歴史・文化も学べるので、とても良い活動だったと思う。午後はホテルで修了式が挙行された。生徒たちは研修の成果がわかる素晴らしいスピーチをしてくれた。

夜はディナークルーズを楽しんだ。きれいな海と夕日、豪華な食事、ハワイの踊り、太陽が沈んでから打ち上げられる花火などがあり、とても素晴らしかった。生徒も一緒に踊ったり、花火に見とれたり、食事を楽しんだりして最後のハワイの夜を楽しんでいた。

■第7日（7/28（土））

ホノルル空港出発、翌日14時に無事関西空港に到着し解散した。あっという間だったが、生徒にとってとても貴重な経験だったと感じている。参加生徒には、ハワイで学んだ英語力・コミュニケーション力・日系移民などの知識・積極性をこれからの学校生活に生かすことを大いに期待している。

※行程の概略

- (1) 語学研修 ハワイ大学マノア校
- (2) 社会見学 ハワイ日本文化センター、Bishop Museum
- (3) 国際交流 PUNAHOU School
- (4) 自主研修 ワイキキ研修、ダウンタウンフィールドワーク

ハワイ研修生徒報告

1年 K. R

私は、この8日間に及ぶ研修で学んだことは、大きく分けて2つある。

1つは、ハワイの歴史だ。現在のハワイでは、様々な人種の人が互いに仲良く暮らしている。だが、価値観の違いなどで亀裂が生じ、争いが絶えなかったという時期もあったのだ。原住民の人々は、自分達で築き、継承してきた文化に終止符を打たねばならない所まで追いやられた。日本人も最初は差別など、いろいろなものに苦しんできた。しかし、彼等は頑張って生きてきた。そんな彼等の努力があったから、現在、差別を受ける事も無く、また原住民の文化も継承され、平和に過ごせるのである。私はそんな歴史の深さにとても驚かされた。なぜなら、代表的なリゾート地である現在のハワイからは、そのような重い歴史があったことがあまり感じられないからだ。今回、歴史も含めたハワイを学ぶことができて、本当に良かったと思う。また、このような歴史は、後世の人々に語り継いでゆくべきだと感じた。

あと1つは、積極的に他人と会話をしようとする事の大切さである。私は、今回の研修に参加するにおいて、できるだけコミュニケーションをとるという事を心掛けていた。最初のコミュニケーションは、入国審査の時だった。とても簡単な質問しかされなかったが、自分が思っていたよりも、落ち着いて話すことが出来なかった。また、最初にお店などに入ったときも、日本とは全然異なる雰囲気圧倒されて、その時思っていたことをうまく伝えることが出来なかった。ハワイに行く前の私が思っていた以上に、英語を話すには勇気が必要だったのだ。だが、大学での授業やインターチェンジをするにつれて、より気軽に英語で話す事が出来るようになった。また、会話をするにつれ、いい気分になった。自分の持っている知識としての英語が、活きた英語に変わったことを実感した。普段学校では得ることができないこのような経験は、この夏私を一回り成長させてくれたように思う。

2年 N. M

私は幼い頃海外へ旅行した際に英語を話すことが出来ず、苦い経験をしたことがある。その経験からか、北野高校に入学してこの研修のことを知った時は迷わず参加を希望した。英語の上達を信じて臨んだハワイ研修だが、ハワイ大学での授業は **All English** で自分の伝えたいことを全て表現することが出来ず、悔しく、もどかしい気持ちになるとともに、自分の英語力の低さを実感した。その中でも、ハワイ大学生との **Interchange** では受身形のレクチャーとは違って、常に話さなければならないという状況に置かれることでより一層英語の壁に悩まされた。しかしそんな私に、大学生の方は笑顔で優しく、丁寧に教えてくれた。そのおかげで、知らない単語をどう表現するのか、より伝わりやすくするためにはどうすべきか、考え考え、どうにか自分の伝えたいことを表現することが出来た。そして **Interchange** を終えた後、なんだか英語に一步近づいたような気がした。またこの研修では、英語だけでなく、ハワイの歴史や魅力を知ることが出来た。特に印象に残っているのは食事で、何を頼んでもアメリカンサイズ、健康に悪そうな塩の量。日本の料理は本当

に美味しい、そう感じた。しかし段々その味にも慣れてきて、日本に帰る日には、恋しく
までなった。次に観光だ。ダイヤモンドヘッドは、登るのにやっとなほど傾斜が急だった
が、頂上からの景色は言葉に出来ないほど美しく、気づけば疲れを忘れていた。ディナ
ークルーズは本当に豪華で、友達と一緒に優雅にディナーや夜景を楽しんだ。クルーズの
最後には、花火を見ることができた。花火が打ち上げられる度に、一週間の楽しかった思
い出たち、翌日には日本に帰らなければならないということ、色んなことが頭をよぎり、
胸がいっぱいになった。そして、豪華な花火を最後にハワイ研修最終日は終わりを迎えた。
私は、この研修を通して、あらゆる角度から英語に触れ、英語を肌で感じる事が出来た。
この先、このような素晴らしい経験を出来る機会はもうないかもしれない。だから、今回
の研修を通して知った英語の楽しさを忘れずに、これからの人生に活かしていきたい。

最後に、一緒に研修に参加したみんな、先生方、そしてなによりこの研修への参加に積
極的に協力してくれた両親へ、感謝の気持ちでいっぱいだ。Mahalo!!

2年 Y. F

私はこのハワイ研修に参加して、たくさんのことを学び、得ることができたと思う。私
は今までに海外に行ったことがなく、外国という存在が自分からは遠く離れたものよう
に感じた。正直、行く前は不安と緊張であふれていた。しかし、待ち受けていたのは、心
を揺さぶられるものばかりだった。自分の英語が通じたこと、英語で会話ができること、
英語を聞き取ることができたこと、どれもが私にとっては「感動」であった。また、英語
に限らず、文化や気候の面でも、日本との違いを身をもって感じ、吸収することができ
たと思う。

私がハワイ研修で特に印象に残っていることが2つある。

1つは、ハワイ大学生とのインターチェンジだ。これは私が最も楽しみにしていたもの
である。相手の質問に対し、すぐに文章を組み立てて話しをしたり、会話の内容を広げ
ることができず、英語を話すことの難しさを実感した。

あと1つは、ハワイ日本文化センター、ヴィショップミュージアムの見学だ。ここでは、
ハワイの文化や歴史、日本との関係について学んだ。ハワイにはさまざまな国や地域から
の移民が多く、独自の文化を形成してきたこと、日本から働き口を得るために移り住んだ
人たちが、過酷な状況に陥ったことなど、貴重なお話を聞かせていただいた。また、パー
ルハーバーヴィジターセンターでは、真珠湾攻撃のことについてアメリカからの視点で記
されていて、日本と違う捉え方だったので、とても興味深かった。

ハワイ研修を通して気づいたことは、自分の英語力が未熟であること、そして自分の知
っている世界は狭いということだ。英語を話すことに対して自信はついたが、それと同時
に流暢に話すまでには遠く、努力が足りていないことを痛感した。また、もっと視野を広
げて物事を考えなければならないことも痛感した。私はこのハワイ研修の中で、たくさ
んの刺激をもらった。その刺激は、勉強面ではもちろん、精神面でも自分を高めてくれた。
しかし、私はまだまだ足りない部分ばかりであることにも気づかされた。その足りない部
分を補い、外国という存在がもっと身近に感じられるようにより一層努力していこうと思
う。

5. 課題研究基礎

基礎力養成講座 SGH課題研究基礎力養成講座(学内留学)

〈北野高校 学内留学 immersion lecture の目的〉

課題研究基礎力養成講座（学内留学）は、2年次「課題研究」の基礎力養成講座であり、レクチャー、ディスカッション、リサーチ、プレゼンテーション等を通して、英語の4技能、思考力、情報収集力、分析力、まとめ・表現力を一体的に鍛えることを目的として実施している。

〈内容〉

当初7月7日（土）の予定であったが、西日本豪雨の影響で日程を延期し、10月6日（土）午前9時、今年を受講生1年生95名、2年生5名 計100名を迎え、六稜ホールで7年目を迎える「学内留学」の開講式が行なわれた。北野では immersion lecture と英語名をつけた。「immersion とは浸すこと」という意味だ。「浸すこと」から推測できるように、外国語に浸してしまうことでその外国語を習得させてしまう方法である。例えば理科や社会といったある教科をその外国語で学ぶことで、自然とその外国語を習得するという方法である。

英語イマージョン授業は、英語のネイティブスピーカーである教師が担当する。そして教科の学習の指導には英語だけを使用する。生徒が理解できない時には、必要に応じて簡単な英語表現への言い換え、ボディランゲージ、ジェスチャー、視覚教材など利用できるものは何でも利用する。そして生徒の理解を助ける。授業では教師は生徒とのコミュニケーションに重点を置き、教科内容を理解させることを目的に行われる。そのため文法的な誤りを正すことを控え、生徒が積極的に発言することを奨励する。英語イマージョン教育には生徒への愛情と我慢強さとが不可欠であるが、今年度の学内留学でも、5講座の先生方は、生徒1人1人に、丁寧に、親切に、熱心に、コミュニケーションを重視して指導してくださった。

今年度の「学内留学」(immersion lecture) も年4回、土曜日を使って1日50分×5コマで実施した。先生方は、大学教養レベルの内容をレクチャーし、まず基本的な知識を生徒に与える。そこから生徒達は、英語を使って、互いに、問題点や解決策をリサーチしたり、意見を述べ合い、ディスカッションを重ね、論理的思考力、判断力、表現力を訓練した。最終回では、4回の講義を通して、学んだことを分析し、まとめ、発表を行った。生徒達は、シンプルな英語を通して学ぶことで、大学教養レベルの内容でも、ポイントをしっかり掴んでぐんぐん吸収していた。また、シンプルな英語が教室内に溢れることで、生徒は文法的な間違いを恐れずに、積極的に英語でコミュニケーションをとろうと努力していた。このような学びの姿勢を育むことは、今後の英語教育でますます重要になると思う。

2020年度に始まる大学入学共通テストの英語では、文法・語法の知識偏重ではなく、「読む、聞く、話す、書く」の4技能の運用力と、思考力・判断力・表現力を測ることに重点が置かれる。immersion seminarである「学内留学」はまさに、これらの力を養うことを狙いとしている。平常の英語授業で自らの英語運用能力を高め、自らの言葉として英語を用いる場面に臨み、自己発信力を磨く機会の提供を今後も続けたいと考える。

先進国の中でも、特に英語が話せないと言われる日本人にとって、immersion 教育はやはり魅力的なものだと思う。今年度も、カナダ、ニュージーランド、合衆国出身の先生方と、北野高校英語科15名の教員は手を携えて、英語を使う環境に根気強く生徒たちを「浸して」いく努力を日常の中でも取り入れてきた。

<実施日程および時程>

10月6日(土)、12月8日(土)、1月12日(土)、1月19日(土)

※11月16日(金)15:30~17:00は特別講義「EUがあなたの学校にやってくる」

開催趣旨：EU(欧州連合)加盟国の在日大使館および駐日EU代表部の大使や外交官から直接話を聞くことで、欧州連合(EU)や日・EU関係についての理解を深める。

1時限(9:30~10:20)、2時限(10:30~11:20)、3時限(12:20~13:10)、4時限(13:20~14:10)、5時限(14:20~15:10)

<各講座内容>

ネイティブ講師による大学レベルの一般教養講座の授業をAll Englishで体験。教育学・ビジネス学・心理学・天文学・環境学の5分野に分かれ、ケーススタディを用いた講義・ディスカッションを交えて専門分野の知識を増やす。同時に英語でプレゼンテーションを行うテクニックも習得する。最終日(1月19日)にはケーススタディで学んだ理論に基づきグループプレゼンテーションを実施する。指導内容の詳細は以下の通り。

(1) A 講座 Education Course (教育学講座)

General Themes: In the case studies, students will look at three areas related to education and try to apply them to their classes. Through lectures, group work, and a variety of activities students will learn about the following:

- ①VAK (Visual, Auditory, and Kinesthetic) Learning Styles
- ②Multiple Intelligences
- ③Cooperative Learning

Student Projects: Students will work on preparing and giving two main presentations. One will be a solo-presentation (done alone) and the other will be a group presentation.

1. Analyze and give a short presentation about one of your regular classes
2. Work in a group to make your own lesson, and then present it to the class

(教育学担当講師) Mr. Peter Vande Veire

(2) B 講座 Business Course (ビジネス学講座)

General Themes: Students will learn about some basic business principles and then use them in a variety of activities and case studies. Through lectures, discussion sessions, group work, and analysis activities students will learn about the following:① Monopolistic Competition ②Business Environment Analysis ③Marketing

Student Project: Students will give a number of mini-presentation and at least one major presentation. The major presentation will be done in groups, and each group will present their individual case study.

(経営学担当講師) Mr. Lance Domotor

(3) C 講座 Psychology Course (心理学講座)

General Themes: Students will receive an introduction to the field of psychology. They will gain a better understanding of how broad the subject. They will look at some specific and concrete examples of psychology at work. Through lectures, pair work, and interactive activities students will learn about the following:

①Psychology of Sales ②Behavioral Psychology

Student Project: Students will have mini-presentations and a major presentation based on course themes. They may have to do some research and / or observation based tasks.

(心理学担当講師) Mr. Craig Boobyer

(4) D 講座 Astronomy Course (天文学講座)

General Themes: Students will learn some of the fundamentals of planetary astronomy. By taking notes on lectures, participating in pair and group activities, and giving short presentations, students will learn about the following:①Missions to the planets and their moons ②The composition and characteristics of the planets and moons ③Solar system debris

Student Projects: Students will have mini-presentations and a major presentation based on course themes. They will have to do some research

(天文学担当講師) Mr. Josh Glaser

(5) E 講座 Environment Science Course (環境学講座)

General Themes: Students will become familiar with the fundamental terminology used in Environmental Science and develop the skills to analyze and develop an understanding of current environmental issues and their effect on the world. Through lectures, case-studies and group-based research activities, students will learn how to

address 3 specific environmental issues and be encouraged to find creative and scientifically based solutions to them. The three issues will focus on:

①The Water Cycle ②Extinction ③Alternative Forms of Energy

Student Project: Students will work together in teams on specific problems and present their ideas in a professional and scientific manner to the rest of the class. They will conduct Question & Answer sessions and develop the mind-set of scientists working in the field.

(環境学担当講師) Mr. Noel Slattery

<成果>

受講生徒の感想 (抜粋)

1. 第1回 10月6日(土)

(1) B講座 Business Course(ビジネス講座)

1年2組 H.A

学内留学第1回、ビジネス学講座を all English で5時間にわたり受講した。

1時限は、自己紹介も兼ねて、自分の名前の意味や由来を発表した。2、3時限は、事前に意味を調べてきた英単語の確認をした。ペアでお互いに比べあったり、チームに分かれてクイズで競い合ったりと、いつもとは違った方法だったので、新鮮だった。また、ビジネスをする上で大切なことを、自分たちでも考えながら学んだ。4、5時限は、自分の好きな具体的な商品についてプレゼンテーションを行った。便利な表現やよく使われるフレーズを基に、文章を作成した。スピーチはキーワードのみを書いた紙を見て、即座に自分の言葉で説明をする。聞いてくれる人のほうを見て話すというのは、難しいけれど、とても大切なことだと思った。また、普段より多くのスピーチをすることができたのは、とても貴重な経験だと思っている。

ビジネスの専門的な言葉を英語で扱うので、すべてを完璧に理解するのはできなかったが、周りの人と話し合ったり、自分で状況を読んだりして、だいたいの意味を把握することができた。先生が、この授業内で辞書を引くのをすすめない理由を、こう語っていた。

「本当の留学であれば、辞書を引いている間に周りの皆は動いている。そのときの状況や反応を見て、それを感じ取って行動するべきなのだ。それがあなたたちの力をより良いものにするでしょう。」と。先生の話はおもしろくて、為になるものばかりだった。今日の講座で、英語での表現が私にとって身近になったので、これからの講座を通して、もっと成長したいと思う。

(2) E 講座 Environment Science Course (環境学講座)

1年5組 Y.I

(1 時限) ノエル先生の自己紹介や名前についての説明があった。ノエル先生の名前の由来はクリスマスと天使に関わりがあることを知り驚いた。次にそれぞれ名前の由来と使われている漢字の意味について一人ずつ前で発表した。そして環境学とは何かについて班で話し合った。

(2 時限) 1 時間目の続きで、話し合った内容を全体に発表した。次に、1 日に水がどのようにして使われているかを話し合い、班毎に発表した。後半は水に関わる化学変化についての説明があり、化学式を考えたりした。

(3 時限) 水の循環についての講義があり、ビデオ等を通して水はどのように姿を変えて地球に存在している事がわかった。また、専門用語が沢山出てきて大変だったが、徐々に理解できたので良かった。

(4 時限) さらに専門的な内容の講義になり、とても手応えがあった。また、授業内容の演習問題も解き、より理解を深めることができた。そして、後半の方は次の時間のプレゼンテーションに向けて班毎に準備をした。

(5 時限) 4 時限の続きで、考えたプレゼンテーションをそれぞれのグループで発表した。ノエル先生に細かくアドバイスをもらい、プレゼンテーション力を向上させることができた。

今回は一番初めの授業だったのでどんなものなのか分からず不安だった。しかし実際受けてみると、とても楽しかった。環境学はとても幅広く、奥が深い分野ということも知り、興味が湧いた。また、オールイングリッシュの講義も慣れてしまえば、特に苦を感じる事もなかった。これからも楽しんでいきたいと思った。

2. 第2回 12月8日(土)

(1) A 講座 Education Course (教育学講座)

1年8組 R.T

1 時限は、前回学んだ **learning style** の復習と宿題に出ていた **VAK** スタイルについてのスピーチをペアで行った。原稿を見ずに話せるように何度も練習した。2 時限は、知らないような難しい単語とその説明が書かれたプリントが配られ、グループで簡単な英語で説明する方法を考えた。その後、他の単語に当たった人達とグループを組み、それぞれ説明した後、1 枚の紙に **diagram** を作った。第3 時限は、**intelligence** についての講義を受けた。人間の知性は8 種類あり、人それぞれに合った知性の伸ばし方があることを学んだ。4 時限は、3 時限の授業を踏まえてグループで自分が先生になった時にどんな授業をするのかを具体的に考えた。5 時限は4 時限で考えた授業の内容を他のグループに発表し、どの種類の知性にどのような点で効果的であるのかを理由と共に詳しく説明した。

2時限で出てきた単語が知らない単語ばかりで、最初見たときは正直不安でしかなかったが、授業を受けていくにつれ、先生はわかりやすく丁寧に噛み砕いて教えてくださり、また、友人と質問しあうことで、より理解を深められたと感じている。普段、何気なく受けている授業でも知らず知らずのうちに VAK スタイルが組み込まれていることを知って、これからはそのことを意識して授業を受けたい。このように改めて考えさせられ得るものがあったので、大変有意義な時間を過ごせた。

(2) C 講座 Psychology Course (心理学講座)

1年7組 K.R

1時限は、各自で調べてきたスーパーやコンビニの配置の工夫をペアで話し合い、その後、先生の見つけた工夫を紹介してもらった。考えを友達や先生と共有することで新たな発見が得られてよかった。2時限は、宿題で用意してきたプレゼンテーションをしたあと、**Conditioning** についての講義を受けた。第1回と同様にとっても興味深く、学びがいのある講義内容だった。3時限は、**Conditioning** がたくさんの広告に使用されていることを学んだあと、グループに分かれて例題を解いた。これにより、日常生活の中でたくさんの **Conditioning** に触れあっていることを知りこれからは意識的に見つけていこうと思った。4時限は、グループで実験をして、その結果と講義内容を照らし合わせた。実験は失敗に終わったが、グループの人たちと協力し合うことができ良かった。5時限は、最終日のプレゼンテーションに向けてプレゼンテーションの技術を学んだ。先生が実際にプレゼンテーションをしてくれてわかりやすく教えてくれた。このことは、普段の授業でのプレゼンテーションにも役に立つと思う。

授業を受ける前は心理学という難しそうな内容を英語で学ぶことに不安を感じていたが、日常生活のなかに心理学がたくさん用いられていることを知り、身近に感じられるようになった。先生の英語はとても聞き取りやすくユーモラスに話してくださるため、英語と楽しみながら触れ合うことができ、5時間の授業時間があっという間のように感じられた。校内留学という名のとおり、学校にいながらネイティブの先生から興味深い講義をしていただき、良い経験になった。以後の授業も英語を楽しみながら受けたいと思う。

3. 最終回 1月19日(土)

(1) D 講座 Astronomy Course (天文学講座)

1年5組 N.N

初めて校内留学を知ったとき、私は迷わず参加を決めた。ネイティブの先生が完全に英語で講義を行うという校内留学に、強く惹かれたからだ。しかし最初は期待よりも不安が大きかったように思う。普段のリスニングでも苦労している私が、専門的な天文学の英語の講義を理解できるのか心配だった。

少しひやひやししながら、迎えた学内留学初日。そんな不安は一気になくなった。先生が難しい内容でも分かりやすく教えてくださったからだ。興味深い内容も多くあり、あっという間に時間が過ぎていった。

また、この学内留学は講義を受けるだけでなく、自分たちでプレゼンテーション発表をするという内容もある。プレゼンテーション作成の仕方や発表時の心構えなど多くのことを学ぶことができた。最終日には、グループごとに調べた惑星についてのプレゼンテーション発表があった。私のグループではクラスの発表に加え、ホールでも発表させていただいたのだが、本当に良い経験になった。大勢の前で、発表することは、クラスとは違う緊張感があり、終わると大きな達成感を感じた。

私はこの学内留学で多くのことを得ることができた。天文学についてだけでなく、プレゼンテーションのスキルなど今後も役立つ内容がたくさん盛り込まれていた。また、学内留学の講義を受ける度に、もっと英語を勉強しなければと刺激を受け、勉強のモチベーションも上がっていたように思う。これからもこの経験を日頃の生活に活かしていきたい。

(2) B 講座 Business Course (ビジネス学講座)

1年6組 M.S

最初、5時間ずっと英語で話すというのを聞いて、本当にやっていけるのかとても不安だった。初めて聞く単語ばかりで意味もまったくわからず、聞き取ることすら大変であった。しかし、同じクラスの人たちで教えあい、また、先生が単語の意味を私たちに丁寧に説明していただいたおかげで、だんだんわかるようになった。授業は日本のものとは違い、積極性が大事なものや、ディスカッションなどが多く、戸惑ったり、自分の意見が英語でうまく伝えられずもどかしかったりしたときもあったが、その分英語を話す機会が多く与えられたため、英語を話すことへの抵抗が減った。細かい文法などではなく、先生や友達と実際に英語で話すことにより、コミュニケーション力の向上へもつながったと思う。授業を重ねていくと、英語を英語のまま理解する、という感覚がわかってくるようになった。

ビジネス学についてもたくさんことを学んだ。3回のプレゼンテーションでは、パワーポイントをどのように作れば英語を聞き取りづらくても内容を理解できるか、ビジネスについての難しい内容をどんな英語で表現すればわかりやすいか、発表するときの身振り、目線、強調するところなど、「伝える」という部分に重点を置いて考えた。そして、最終日には私たちの班は多目的ホールで発表させていただくことになった。何度も原稿を見返して、他の講座の人たちにもわかってもらえるか、大勢の前で緊張して失敗しないかとても不安だったが、わかりやすく伝えることを意識して発表し、とても貴重な経験になった。このプレゼンテーション発表の要であった、「伝える」ということをこれからの生活へ活かしていきたいと思う。



開講式



教育学担当 ピーター先生



天文学担当 ジョッシュ先生



ビジネス学担当 ランス先生



環境学担当 ノエル先生



心理学担当 クレイグ先生

平成30年度 学内留学講座アンケート結果

			Education	Business	Psychology	Astronomy	Environmentology	TOTAL
①	以前より、英語でのコミュニケーションに抵抗がなくなった。	はい	10	15	27	17	7	76
		いいえ	0	1	2	1	3	7
②	以前より、人前で発表することに抵抗が少なくなった。	はい	9	14	21	17	9	70
		いいえ	1	2	8	1	1	13
③	以前より、英語によるコミュニケーション能力を高めたいと思うようになった。	はい	10	16	28	18	9	81
		いいえ	0	0	1	0	1	2
④	以前より、世界的な問題について関心を持つようになった。	はい	2	10	19	14	9	54
		いいえ	8	6	10	4	1	29
⑤	以前より、課題を発見し、分析する力がついた。	はい	8	11	26	11	7	63
		いいえ	2	5	3	7	3	20
⑥	以前より、自分の考えを他の人に聞いてもらおうと思うようになった。	はい	6	11	22	16	7	62
		いいえ	4	5	7	2	3	21
⑦	以前より、海外でいろいろなことにチャレンジしたいと思うようになった。	はい	7	13	25	16	6	67
		いいえ	3	3	4	2	4	16
⑧	以前より、海外の大学・大学院で学んでみたいと思うようになった。	はい	6	10	19	10	4	49
		いいえ	4	6	10	8	6	34
⑨	以前より、仕事で国際的に活躍したいと思うようになった。	はい	7	14	22	15	8	66
		いいえ	3	2	7	3	2	17
⑩	以前より、地球規模で社会に貢献したいと思うようになった。	はい	5	10	18	13	8	54
		いいえ	5	6	11	5	2	29

学校設定科目 国際情報

〈目的〉

「国際情報」は学校設定教科の「特別研究」に属し、文理学科の全生徒が1年次に履修する。今年度の実施形態は「情報科と英語科のT. T.」と「情報科と理科のT. T.」でありこれらを半期交代で行った。「情報機器を操作して外国語での情報を受信し、また外国語でのコミュニケーション力を高めて、情報を外国語で表現し、情報機器で情報を効果的に伝える知識や技能を習得させる」ことを目標にしている。

〈内容〉

国際情報の時間は「情報」の部分と「研究基礎」の部分の2本立てで授業が構成されており、2年次に全生徒が課題研究を行う際の研究基礎としての位置付けが1年次の「国際情報」の役割である。そのために国際情報の時間では討議する力を付けることや、プレゼンテーション力を高めることに力を入れている。「情報」の部分は情報化社会のモラルやマナーを学び、情報機器の操作や表計算ソフトやマルチメディアを用いた表現やプレゼンテーションについて学習し、情報化社会の光と影、プログラミングの基礎としてのアルゴリズムや統計やデータサイエンスの基礎を学び情報技術を身に付けた。「研究基礎」の部分では教科横断的な取組を行い、文科と理科の両面からのアプローチで課題研究の基礎の部分を学んだ。

具体的な内容は文科では「英語ディベート」と「文科グループ発表」を行った。英語ディベートは今年度では「即興型ディベート」(写真1)の講演を聞いたうえで以下の展開例のように進めた。



(写真1)

《ディベートの展開例》

Chairperson (司会) 1人、

Government (肯定側) 2人組、

Opposition (否定側) 2人組、

Judge (審判) 3人の計8人ずつで

試合を行った。毎回第1試合と第2試合

で役割を交代して行った。司会者の

役割を学び、ジャッジペーパーや単語リストも用いて行った。

試合の流れは、(準備)→肯定側立論→否定側立論→(質疑応答と準備)→否定側反駁

(まとめ)→肯定側反駁(まとめ)→(得点集計・結果発表)となる。

各回の論題を次に挙げる。

第1回 ミニ即興ディベートのルールの説明。ディベートの流れを学ぶ。

英語の例で説明を聞く〈例〉 Zoos should be abolished.

第2回 Convenience stores should be closed late at night.

第3回 Convenience stores should be closed late at night.

第4回 Japanese high school students should go to the US for studying abroad.

第5回 Japanese high school students should go to the US for studying abroad.

※第1回、第2回、第4回は日本語、第3回、第5回は英語でディベートを行う。

日本語によるディベートで、まずディベートの流れ、反駁のやり方などをしっかり身につけ、それを英語のディベートに活かす。チーム分けは毎回ランダムに行った。自分自身の意見とは異なる主張をしなければいけない時もあるが、そのために却って様々な立場の考え方が理解できるようになる。ALTの先生のアドバイスやコメントもディベートの上達に役立っている。



《ディベートの様子》

次に、文科グループ発表では15のテーマから希望のテーマを選択してチームに分かれ調査研究を行い、プレゼンテーション発表を行った。日本語と英語を含めて6回分の授業が割り当てられており以下のように進めた。

回数	内容
第1回	グループ分け、グループ発表準備1（調査研究）
第2回	グループ発表準備2（調査研究・スライド作成）
第3回	グループ発表第1回（日本語）
第4回	スライドの改善（発表の講評と相互評価） スライドの英語化
第5回	発表第2回（英語含む）
第6回	振り返り、プレゼンテーション、アンケート

第1回の発表と第2回の発表では改善や進歩が見られた。以下にスライドの実例を示す。

発表第1回		発表第2回
<p>18世紀初頭</p> <ul style="list-style-type: none"> ・インドネシア(当時オランダ領) ・ブラジル(当時ポルトガル領) <p>にコーヒー栽培が伝わる</p> <p>→プランテーションでの大量生産の時代へ</p>	⇒	<p>In the early 18C,</p> <p>Coffee had been introduced to</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Indonesia (ruled by Netherland) ・Brazil (ruled by Portugal) <p>→came to be produced in a large scale</p>
<p>関西弁の由来</p> <p>・奈良時代から江戸時代まで文化、経済の中心は関西</p> <p>↓</p> <p>そこで用いられた京言葉が標準語であった。</p> <p>・天下の台所と呼ばれる大阪では、商売をするときに親密なコミュニケーションが必要</p> <p>↓</p> <p>独自の表現が発達</p> 	⇒	<p>origin of Kansai dialect</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Kansai was a center of economy and culture from Nara period to Edo period. <p>↓</p> <p>The language used there was standard language.</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Friendly communication is needed for business in Osaka ,Tenkanodaaidokoro. <p>↓</p> <p>Unique expressions have been developed.</p> 

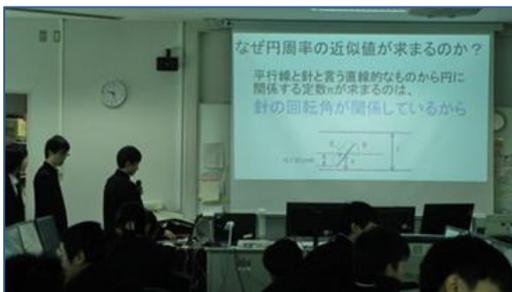
理科では、実験を実際に行い、実験の目的・方法・結果・考察を考えてスライドを作り、結果のデータを用いて図、グラフ、表、写真、動画等による表現方法を取り上げ、実験に関するグループ発表を行った。理科のグループ発表は8回分の授業が割り当てられており以下のように進めた。

回数	内容
第1回	実験1 (落下運動～あなどれない空気抵抗～)
第2回	データ入力、最小2乗法,
第3回	実験2 (ペーパードロップ、ペーパーダイブ)
第4回	発表の準備 (スライド作成)、シミュレーション (電子さいころなど)
第5回	発表第1回
第6回	プレゼンテーション改善(発表の講評・相互評価)
第7回	発表第2回
第8回	振り返り、プレゼンテーションアンケート

空気抵抗や摩擦力をテーマにした物理実験の様子および生徒の発表スライドの例を示す。



プレゼンテーションに関しては、年間で一人当たり5回実施し、発表、再発表を含め延べ422件のプレゼンテーション発表を行った。理科実験発表では80グループ、文科発表では83グループに分割し、統計プレゼンテーション発表は96グループでプレゼンテーションを実施した。理科実験のプレゼンテーション発表・文科グループ発表・統計プレゼンテーション発表の様子を次に示す。



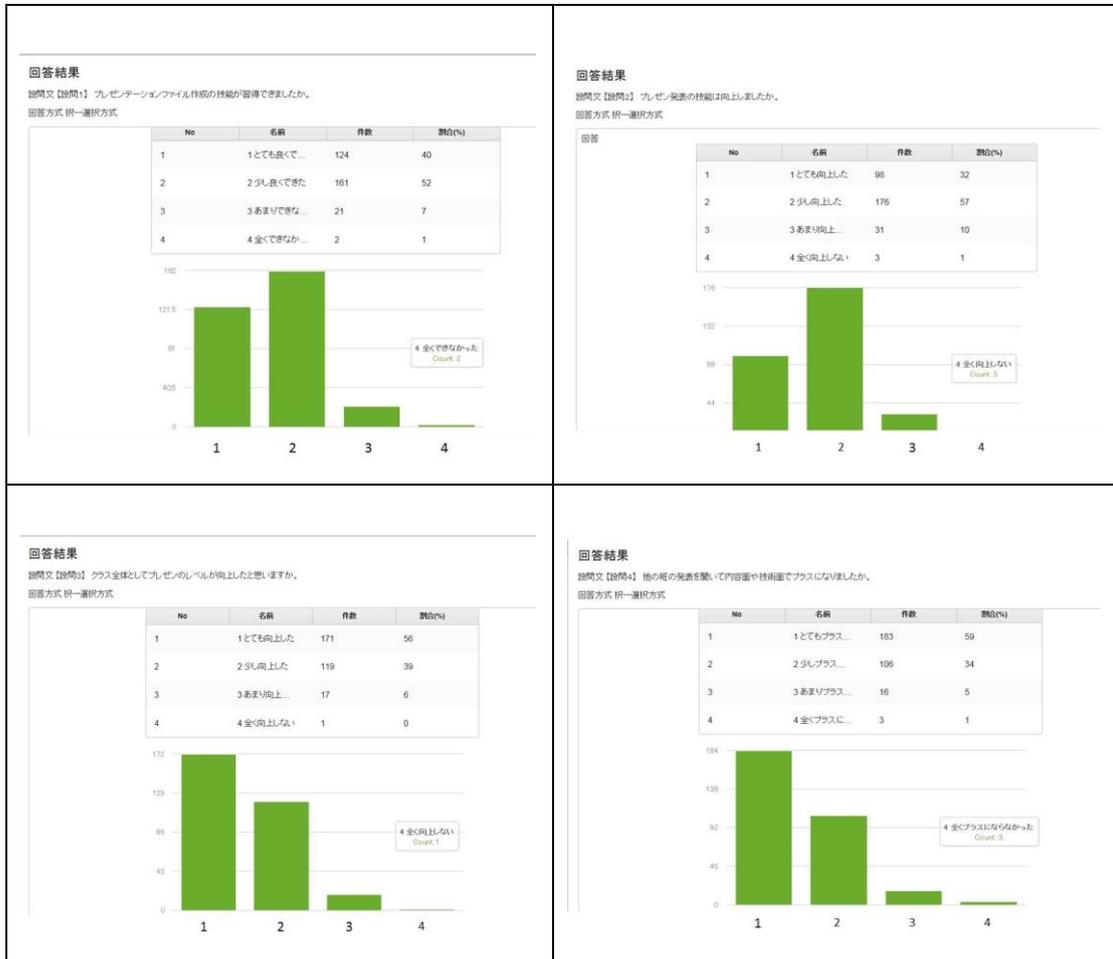
プレゼンテーション発表タイトルの例を<表 1>に示す。

<表 1>

班	タイトル	班	タイトル
1	東南アジアの災害について	60	日本と大国の貿易について
2	本当は怖いグリム童話	61	国連難民高等弁務官事務所
3	意外と知らない方言の世界	62	農林水産業
4	レミゼラブルの登場人物の名前の由来	63	日本の電力消費量と供給量
5	近現代のヨーロッパ芸術	64	日本への外国人観光客について
6	ギリシア美術の年代ごとの変遷	65	給料について
7	大阪弁と関西弁の特色	66	文庫とコミックの売上額
8	東南アジアの文化	67	輸送機械の走行と汚染物質について
9	東南亜歴史紀行	68	地球と私たち
10	ハブ空港	69	スマートフォンの利用率について
11	Strange World Of Grimm Story	70	日本の気候の移り変わり
12	カレーの歴史	71	異常気象と自然災害
13	航空会社	72	Irrational Number and Greece
14	東南アジア ※コメ※	73	ルネサンス期のイタリア絵画
15	大阪弁の特色	74	東南アジアの歴史
16	モンテカルロ法によりπを求める	75	近年の月別台風発生件数
17	エクセルによるサイコロシミュレーション	76	国内の都市別小売物価
18	ペーパーダイブ競争	77	Climate research
19	ペーパードロップ競争	78	日本の山々の標高
20	鉄球と乾電池～あなどれない空気抵抗～	79	5年毎の人口の変化に見る日本の歩み
21	Buffon's needle	80	1世帯あたりの月別消費支出について
22	ピュッフォン針	81	水産業・漁業就業率の変化
23	電子サイコロ	82	Energy for the Future
24	数を乱すな	83	近年の観光事情
25	円周率	84	Trade・日本の輸出入
26	落下運動と空気抵抗	85	国際収支・金融・財政
27	自由落下の実験	86	生活必需品の値段の推移
28	19世紀後半のイギリス美術ラファエル前派について	87	都道府県別に見た幼稚園と保育園
29	東南アジアの産業	88	インターネット普及率
30	グリム童話の世界	89	環境を笑うやつは、環境に泣く！
31	OSAKA DIALECT	90	大阪府の気温と降水量
32	英米人の名前の由来、英米人のニックネームと本名	91	日本の総人口の推移
33	マザーグースに見るイギリス文化	92	死亡と出生
34	コーヒーの歴史	93	海外在留邦人
35	国際空港について	94	難民受入数
36	MOTHERGOOSE	95	農業について
37	東南アジアの自然災害、自然環境	96	訪日外国人観光客
38	電話の歴史	97	アメリカとの貿易
39	古代ギリシャ美術	98	労働災害
40	ウィンタースポーツについて	99	性別学歴別賃金から日本社会を見る
41	Snowboarding	100	賢い秋田とアホな大阪
42	スポーツの歴史	101	環境 気象異常の問題
43	√2をいろいろな角度から見る	102	気温や降水量といった側面から考察する日本の気候
44	マザーグースの残酷な童話	103	気温と雷
45	アジアの台風	104	税収の推移について
46	グリム童話とディズニー作品の違い	105	大阪の地価
47	航空機ハイジャック事件の歴史	106	世界幸福度ランキング
48	πの歴史	107	一年でホームランと台風どっちが多い
49	ロココ美術	108	金属の融点と沸点
50	Disasters in Southeast Asia	109	火事
51	Pre-Raphaelite Brotherhood	110	車の性能
52	International Airport ranking	111	地球温暖化
53	GREEK ART	112	枚方・交野に住む人たち
54	The History of Sports	113	大阪府の人口
55	Variety of √2	114	出生率・出生数から見る人口問題
56	History of Curry	115	都道府県別でみる給料
57	World of Grimm Fairy Tales	116	食卓を支える二つの食品
58	THE "RICE" IN SOUTHEAST ASIA	117	金の価格変動
59	香港とインドネシア	118	洗濯物の正しい乾かし方

国際情報のプレゼンテーションに関する生徒対象のアンケート結果は、下図のように89～95パーセントの生徒がプレゼンテーション技術向上について肯定的回答をした。

<プレゼンテーションに関する生徒のアンケート結果>



アンケートの設問5(グループ発表は楽しく取り組めたかどうかの自由記述)の生徒の回答には、「実験のときはみんなでどの形が一番良いのか試行錯誤してとても楽しかった」や「今までの知識をすべて思い出してやってみたがやはり難しかった。でもそういった答えがよくわからない実験に取り組んで熟考するのは楽しかった」等の実験やプレゼンテーションの取組に苦労したけれども楽しかったというコメントが多数見られたことから、国際情報は研究の基礎の役割を果たしていることが分かる。

「グループで協力したのはとても心強かった。グループで発表することで、自分のできないことは頼れるし、得意なことは共有できるので新たな絆も生まれた」等グループとして活動することの良さも体験できている記述もあった。

「英語という母国語ではない言語でプレゼンテーションして、多くの人にわかりやすく伝えるというのは挑戦的なことではあったが、回数を重ねると慣れてきて、聞いている人の方を見て話せるようになった」等の英語に変換するのに苦労したが、成果が得ら

れたという肯定的なコメントも見られた。また、「私は自然科学には全般的に興味があるが社会・人文科学にはあまり興味がないので、なかなか自分では学ぼうとしない。しかし、プレゼンテーションを通じて人の話を聞くと、彼らの発表力のおかげで、面白く思え、興味がわいた」や「私は最初、少し気乗りしなかったのだが、自ら調べたり、よく知っている友達に話を聞くなどするうちに興味がわき、テーマから外れたことまで調べてみるなどしていた。初見で興味がないからと切り捨てるのは良くないな、と思った」等の自由記述から生徒の興味関心が文科・理科両方の面から広がっている様子が分かる。「この発表では第1回と第2回の改善度合いがとても大きかったと思う」というような生徒のコメントもあり、第1回の発表の後に教員からの講評を聞き生徒同士の相互評価のコメント集計等を糧にプレゼンテーションが改善され効果が引き出されているといえる。

「国際情報」は教科横断的な取組を行うことで、文科・理科・ICTの視点から研究基礎の役割を果たしており、生徒は「課題研究」に対する基礎的な準備ができている状態でスムーズに2年次の本格的な「課題研究」に入っていくことができる。

以下にディベートの資料を示す。

ミニ国際ディベートのルール

- 議題** ある1つの論題が与えられ、肯定側チーム(Government)と否定側チーム(Opposition)に分かれ、一般論であるジャッジを獲得する。肯定側か否定側かは主催者によって決められ、ディベーター自身で選ぶことはできない。より説得力(議論の中心、説明の仕方など)があったチームが勝ちとなる。
- ディベーターの人数** 各チーム2名の計4名。
- 準備時間** 15分
- スピーチの順番・時間** スピーチの順番は下記参照。スピーチ時間は、1分または1.5分である。ただし、後30秒は許容範囲である。司会者はスピーチ終了時間に1回ノック、終了時間30秒後に2回ノックをする。(例: 1.5分のスピーチであれば、1:30で1回ノック、2:00で2回ノック。)スピーチとスピーチの間には、準備時間はない。スピーチは司会者に呼ばれば、速やかにその場で立ち、スピーチを始める。

Government

Constructive Speech(立論)
肯定する理由を述べる

1分 1st speaker

相談(質疑応答等)
3分 Preparation (必要に応じてQ&Aも)

Reply Speech(まとめ)
否定側コメントへ反論し、肯定側の主張をまとめる

1.5分 2nd speaker

Opposition

Constructive Speech(立論)
否定する理由を述べる

1分 1st speaker

相談(質疑応答等)
3分 Preparation (必要に応じてQ&Aも)

Reply Speech(まとめ)
肯定側コメントへ反論し、否定側の主張をまとめる

1.5分 2nd speaker

- スピーチ内容** 最初のスピーチをConstructive Speech(立論)、後のスピーチをReply Speech(まとめ)という。Constructive Speechではどのような論点を述べてもよいが、基本的にReply Speechでは、Constructive Speechで述べていない新しい論点は出せない。
- Preparation** 肯定側・否定側それぞれが1分スピーチした後で、チーム内で最後のReply speechの原稿を考える。疑問点があれば、相手チームに自由に質問してよい。
- ディベーター終了** ディベートラウンドが終了すれば、対戦相手と握手を交わす。
- ジャッジ** ジャッジは3人、次の観点で客観的に判定する。
 - <ポイント> 主張がわかりやすいか。
 - <理由・具体例> 例やデータを用いて、説得力のある説明をしているか。
 - <時間> 与えられた時間中、しゃべり続けられたか。
 - <要約> 相手の主張のポイントをうまくまとめているか。
 - <反論> 相手の主張に対して、具体的に反論できているか。

★**発言者の声の大きさ・スピードが適切でない場合は、評価が低くなる。**

*得点記入後、採点用紙を司会に渡す。各ジャッジは両チームに対して、一言コメントを日本語で行う。(この間に、司会者は得点を集計する。)

審査: 十分3点 不十分2点 極めて不十分1点

肯定側① ()	否定側① ()
ポイント 點・評価 時間 中計9	ポイント 點・評価 時間 中計9
Q&A 質疑 応答 中計6	Q&A 質疑 応答 中計6
肯定側② ()	否定側② ()
要約 反論 點・評価 時間 中計12	要約 反論 點・評価 時間 中計12
合計 /27	合計 /27

主張
理由
具体例

反論
理由
具体例

主張
理由
具体例

反論
理由
具体例

準備時間中: 展開される肯定・否定側の主張・理由・具体例を予想する

肯定側	否定側
主張 理由 具体例	主張 理由 具体例
反論 理由 具体例	反論 理由 具体例

class() no() name ()

司会者(chairperson)の役割

- Time keeper** (自分の携帯電話のタイマー機能を使って計時する)
- 司会進行** (下の手順で行う)

開始

Hello everyone.
Today's topic is _____
Now, I welcome the first speech from the Government within 1 minute.

First speech from the Government, 1 minute

Thank you.
Now, I welcome the first speech from the Opposition within 1 minute.

First speech from the Opposition, 1 minute

Thank you.
Now, preparation time for 3 minutes.
Feel free to ask the other team any questions, if necessary.

Last preparation, 3 minutes

Now, I welcome the Reply speech from the Opposition within 1.5 minutes.

Reply speech from the Opposition, 1.5 minutes

Thank you.
Now, I welcome the Reply speech from the Government within 1.5 minutes.

Reply speech from the Government, 1.5 minutes

Thank you.
Now, I close this round. Thank you for your cooperation. (拍手)
(Please shake your hands. (対戦チーム同士、握手を促す))

終了

得点集計、勝者発表 Today's winner is { the Government / the Opposition }.

平成30年度 高校生公開討論会

〈特色〉

この取組は、本校が SGH の指定を受ける際に提携関係を結んだ関西学院大学から、平成27年度に本校生徒の参加について要請があったことに端を発する。当初は普通科に所属する生徒の中から参加者を募っていたが、現在では1年生を中心に構成された有志のメンバーが参加している。毎年、現代の世界で起きている諸問題（移民、エネルギー、国家間の経済連携など）に関するテーマが与えられ、それについて招待校の生徒たちが探究活動を行いながら自分たちの意見をまとめ発表する。さらにこの会に参加した SGH 関係他校の生徒たちと討論する時間も設定されている。

当該年度の取組を始めた時から、生徒たちは発表当日に向けて準備のスケジュールを立てることが求められる。特に1年生にとっては、発表の準備やそのための討議なども含めた一連の協働的な取組が、次年度において行う課題研究の練習になるという意義がある。高校生公開討論会を本校 SGH の取組の中で「課題研究基礎」のひとつとして位置づけたのは上記の理由による。

また、取組を経験しコミュニケーション力とモチベーションを一層高めた参加者の中には、さらにグローバル・リーダー育成に関する公益性の高い大会等にチャレンジする生徒が出てきている。

なお、この取組に参加する生徒の指導・支援は、本校の初任期(初任者と2年めの教員)教員と経験ある教員がパートナーとなって行っている。この取組は、意欲の高い生徒たちとともに探究活動に関わることを通じて、初任期教員の指導力向上をはかるという本校における OJT の一環としても位置づけられている。

以下は、今年度高校生公開討論会の取組に参加した初任期教員による報告である。

〈対象〉

1年生12名、2年生1名

〈実施日〉

平成31年1月26日(土)

〈内容〉

(1) 本年度の概要

1月26日(土)、関西学院大学にて、高校生公開討論会が行われた。討論会は二部構成で、午前は、医師の葉田甲太氏による基調講演、午後は、参加4校(兵庫県立長田高等学校・関西学院高等部・関西学院千里国際部・本校)による発表と討論である。本年度のテーマは、「グローバル化する世界で生きていく君に問う一私たちは何を学ばなければならないのか」であった。このテーマで実りある討論を行うため、参加校は、以下の事前課題について調査と発表の準備をすすめ、当日に臨んだ。

① 史上の事例2例をもとに過去のグローバル人材の功罪を分析する。

…(本校の扱った事例) インドネシアの植民地問題、イラク戦争

② ①を踏まえて、これからのグローバル人材が身につけるべき事柄を考える。

(2) 当日までの様子

討論会への参加を希望した生徒は、10月から準備を開始した。大きな流れは、「事前講義の聴講→事例選定→事例の調査・分析→発表内容の精査→発表練習」である。

関西学院大学の關谷武司教授による事前講義では、「グローバル人材とは何か」という大きな問いが投げかけられた。この問いへの答えを考える材料として、生徒は、日本と関わりの深い2つの事例(インドネシアの植民地問題・イラク戦争)を選んだ。そして、インドネシア班とイラク班に分かれ、各班で、歴史的事実の調査と過去のグローバル人材の分析を行った。その後、調査・分析の結果を全体で共有して一つの発表内容に仕上げ、発表・質疑応答の練習を行った。

(3) 当日の様子

午前の基調講演では、医師の葉田甲太氏(NPOあおぞら代表)が、「僕の人生と世界の新生児死亡について」と題して、ご自身の進路選択や生き方に関するお話を交えながら、世界の医療の現状と問題についての講話をされた。午後は、各校による15分程度の発表の後、「グローバル化する世界を生きていく私たちは、何をどのように学ぶべきか」というテーマで、80分にわたり討論が行われた。

〈成果〉

参加生徒は、「各個人の調査→調査結果の共有→新たな課題の発見」というサイクルを繰り返し、自分達で知識を積み上げながら、「グローバル化する世界を生きる私たちが学ぶべきことは何か」という「正解」のない問いについて、協働して探究していた。

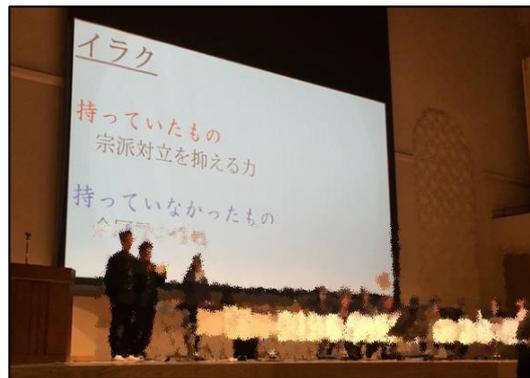
自分達で司会進行を行うミーティングを重ねる中で、「班内でこんな役割分担をしたらもっと効率がよくなるのでは?」「お互い気持ちよく意見を出し合うために、次はこんな言い方をしてみよう」「発表内容に関連するイベントを自分で見つけて、時間をつくって足を運び、得た情報を皆と共有しよう」「逆算して次回までにすることを決めておこう」「発表練習にクラスメイトを招いて、初見の人が抱く率直な意見を言ってもらおう」等、様々に知恵を絞り、探究活動の質を高めるためのアイデアを実践に移していた。

当日の討論では、「枝葉の議論に時間を費やしたことがあった」「歴史的な知識に関する質疑よりも、自分達で答えを考え出すことができるような問いを投げかける方が、議論が盛り上がった」というミーティングの反省や振り返りを活かして、限りある時間の中で本題についての議論を深めることができるように、全体が小さなやりとりに終始しそうになったときには軌道修正をするという、頼もしく成長した姿も見せてくれた。

また、「学ぶべきこと」の一つとして自分達で考えた「相手をよく理解し、ニーズに応えること」の厳しさと真剣に向き合っていたからこそ、基調講演者に対して「私達がよいと考える現代の最先端の医療技術と、現地で大切に守られてきた伝統や風習がぶつかってしまった場合は、どうされるのですか?」という鋭い質問をする生徒の姿が見られたと思う。

さらには、討論会終了後すぐに、「根拠とあわせて他者の意見をしっかりと聞き、また

自分の意見をわかりやすく伝えて充実した議論をするには、全体で討論を行うよりも、グループに分かれた方がよかったのではないか」「せっかくの機会だったので、もっと他校の生徒と深く語り合いたかった」等と、自分達なりに早速振り返りを行って、次の機会に向けての改善点を考えていた。参加生徒がこの経験を今後活かしてくれることを願っている。



以下は、討論会後に行った生徒アンケートからの抜粋である。

- ・自分とは異なる視点を知ることができた一方で、自分とまったく同じ意見を持つ人はいないことを実感し、自分を大切にしようと思えた。とても良い経験になった。
- ・ミーティングや討論で話し合った内容そのものよりも、練習・発表・討論で乗り越えた苦労が良い経験になると思った。グループで時間をかけて一つのを完成させるというこの経験を、来年度の課題研究に活かしたい。
- ・個々人が知っていることや調べたことを合わせて、一つのをつくるという経験ができてよかった。
- ・「自分達で調べる」「自分達で考える」「自分達の言葉にする」という貴重な経験ができた。一人ではわからないことに沢山気づかされ、メンバーに支えてもらって、成長できたと思う。
- ・今まで見過ごしていた事柄に目を向ける機会になった。視野が広がり、さまざまな視点から問題を見ることができるようになった。とてもよい刺激になった。
- ・自分が気にもとめていなかったことまで視野に入れている人や、知識が豊富な人と接する中で、広い視野を持つこと・考える癖を持つこと・正しい知識を得ることの大切さを学んだ。
- ・当日までに、メンバーで何度も放課後のミーティングを行ったが、家に帰って一人で勉強するだけではわからないことを学ぶことができた。貴重な経験だった。
- ・多くの人と話す中で、さまざまな考え方があることを知った。また、一つのことについて深く調べ考える力がついたと思う。
- ・自分と違う意見を持つ人を受け入れることは、自分が思っている以上に難しいことがわかった。自分の思いを押しつけるのではなく、一歩引くことも大切だと知った。
- ・自分達に分かる発表と、相手によく伝わる発表は違うと実感した。これからは、人にものを伝えるときに、わかりやすく伝えることを意識したい。
- ・「考えたことをわかりやすく発表する」ということに苦手意識があったので参加した。メンバーと話し合いを重ねる中で、だんだんとそれを克服することができた。
- ・こんなふうに長い時間をかけて深く議論をするという経験がなかったので、こういう機会があったこと自体がよかった。真剣に考えれば考えるほど、安易な答えは出せなくなるテーマだったが、とても有意義な時間だった。
- ・発表の中で、「これからの世界を生きる私達が学ぶべきこと」として自分達が掲げた「相手のニーズに応えること」を、自分の生活の中で、小さなことでもよいので実践したい。

平成30年度 第1回 第1学年 SGH 講演会

〈目的〉

フィリピンで国際支援活動を行っている方から直接話を聞くことで、フィリピンやNGO 団体支援活動についての理解を深める。

現代の世界で起こっている諸問題に関心を向けることを通じて国際社会に対する視野を広げる。

〈対象〉 平成30年度第1学年（133期生）全生徒

〈実施日〉 平成31年 1月11日（金）第3限

〈実施場所〉 本校多目的ホール

〈講師〉 松隈 信一郎

一般社団法人ストレングス協会 代表理事、慶應義塾大学大学院医学研究科、
フィリピン NGO 団体 Dynamic Teen Company 所属

〈内容〉

松隈氏作成のパワーポイントによって、生徒達は実際のニュースを見たり記事を読んだり、当事者達の実際の声を聴いたりしながら、多くのことを学んだ。博多弁で熱く語る松隈氏の情熱に、多くの生徒は心を動かされたようだ。講演の構成とその要旨は次の通り。

1. フィリピンの NGO 団体に関わることになったわけ

大学生の時にたまたまテレビで、CNN Heroes に選ばれた **Efren Penaflorida Jr.** を観たことが人生の大きな転機となり、そのままフィリピンに飛び込み、Efren の手伝いをする事となった。

2. フィリピンでの活動を通して学んだこと

しんどい状況に置かれながらも明るく力強く生きている子供達の姿を目の当たりにして、**One is never too poor to help others.** (人助けをするのに貧しすぎることはない)、**One is never too young to make a difference.** (違いを生じさせるのに若すぎることはない。若くても重要なことができる。) ということを実感した。

3. 日本での活動

東日本大震災の知らせを受けるとすぐに日本に戻り、日本での活動を精力的に行った。そこで気がついたことは、フィリピンよりも恵まれているはずの日本で、若者の高い自殺率や引きこもりなど、子供たちに関わる問題が多数あるということだった。

4. ポジティブ・サイコロジー

日本が抱えるこのような問題に対して、従来の心理学（「弱み」を直し、克服する方

法)とは異なるアプローチの仕方である、ポジティブ・サイコロジー(「強み」を活かす方法)が有効であると考えた。そしてこの考え方は、世界の貧困問題にも対処できることを知った。

5. 現在の活動

一般社団法人ストレングス協会の代表理事として、日本やフィリピンなどで「強み」の研究と実践を行っている。また、ポジティブ・サイコロジーを応用した不登校支援の拠点を東京に置き、日本中で様々な支援活動を行っている。

6. 生徒へのメッセージ

どんなことでもいいから、行動を起こそう。When you pray, move your feet. (祈る気持ちがあるのなら、自分の足を動かそう)

〈成果〉

講演を聴いた1年生全員を対象に、同日以下のような質問項目のアンケートを実施した。

①この講演会に参加して、何か気づいた(発見した)ことがありましたか?

4 おおいにある 3 まあまあある 2 あまりない 1 全然ない

	4	3	2	1
人数	139	149	10	2
%	46.3	49.7	3.3	0.7

②この講演会に参加して、これからの生活で何か変わりそうなことがありますか?

4 おおいにある 3 まあまあある 2 あまりない 1 全然ない

	4	3	2	1
人数	79	178	34	9
%	26.3	59.3	11.3	3

以下は、自由記述欄から抜粋したものである。

- ・思っているだけでは何も変わらなくて、実際に行動してみることが問題を解決することにつながるとわかった。
- ・私自身、テレビや本などで自分の心を強く動かされるような話を見聞きしたことは何度かあった。しかし、自分で聞いて自分の心の中に閉まっておくだけで、何か行動するという事はなかったように思う。講演を聞き、この先の一步が重要なのだと感じた。自分から行動を起こすことで、何か変化や発見があると思った。
- ・行動する前から「できそう」とか「できなさそう」とか決めつけてかかるのではなく、自分は絶対できると思ってやるべきだと気づかされた。
- ・北野に来てから、自分の他の人と比べて負けているところばかり考えて克服しようと思っていたが、自分の良さを見つめることの方が大事だと思った。

- 10代の死亡理由に自殺が多いのは、日本がトップだと知って、物の豊かさと心の豊かさは比例しないのだと思った。
- 「パグパグ」という料理の動画は衝撃だった。（注：パグパグ＝残飯として捨てられた生ごみを再調理して食べること）
- 知っているのと見る（聞く）のは違うと思った。
- お金が十分でない小さな子供でも、行動することによって、可能性は無限にある、ということに気がついた。何かいいことが思いついても、行動しなきゃ一緒だし、もっと人生を柔軟に笑顔で生きていくべきだと思った。
- 自分も人のためになってやりがいのある仕事に尽きたいという気持ちが大きくなったので、自分が打ち込めるものを見つけるためにいろいろなものに触れて世界を広げたいと思った。
- 何だってできると思えば部活も勉強ももっともっと頑張れるはずだから頑張ろうと思った。
- 今まで何かやる際、失敗したらどうしようと結果ばかりを考え、一步を踏み出せてなかった気がする。これから失敗を恐れず、何事にもチャレンジしようと思った。
- 普段の生活から、自分の悪いところばかりにフォーカスするのではなく、自分の良いところを見つけ、そこを伸ばしていく方が良いと感じた。今まで悪いところばかり見ていたが、変えていこうと思った。
- 講演前よりも自信を持って学校生活できそう。自分が今勉強できるのは幸せだと感じてフィリピンの人に負けずに努力しようと思った。
- 目前のテストの点数も大事だけれど、そんなことよりも世界のことに目を向けることで、自分の見方も変わるのでは、と感じた。自分の恵まれている環境を痛感し、またそれを他の人のために使っていかなければならないと思った。
- 自分の目・耳などに飛び込んでくる全ての情報に意識を向けるようになると思う。会社を立ち上げたいと明確に思うようになった。
- 学生の頃からスラムやゴミ山に出向いている人やプレゼントをするプロジェクトを始めた子がいて、決して裕福ではないけれど（だからこそ？）同じような状況の子供に対して何かしようという意識を感じた。日本人の大半は、どうしても「してあげる」というのが出てしまうので、その意識をなくしていきたい。
- 「貧しい人だから」ではなく「隣の人を助ける」というところに感動した。
- 日本から出てみたいという気持ちができる。

平成30年度 第2回 第1学年 SGH 講演会

〈目的〉

現在研究生活を送っている大学院生による自身の体験を交えた講演を聴くことによって、1年生が研究テーマの決め方、調査・研究方法の探し方、論文の書き方などについての基礎的事項を学習し、次年度に取り組む課題研究に向けての動機づけとする。

〈対象〉 平成30年度第1学年（133期生）全生徒320名

〈実施日〉 平成31年 2月 1日（金）第3限

〈内容〉

本校多目的ホールにおいて、上記目的のもとに講演を行った。

講師は京都大学大学院文学研究科地理学専修博士課程大学院生、谷本涼さん。本校の卒業生（123期生）である。「研究・探究のキーポイント」と題して、研究や探究活動のごく基本的・常識的な部分、特にテーマ選定に関する部分を、ご自身の経験を例に具体的に説明していただいた。以下に講演内容の構成およびその要旨を示す。

1. 研究ってなんだ

研究とは、全人類の知をほんの少しずつ広げる営為であると言える。

研究者は、最終的に論文の執筆をめざすことによってその営為に寄与する。

高校生みんなが課題研究でとりあえずめざすもの～「研究」の一步手前の「探究」

世界は何を知っているか？何をやれば社会に貢献できるか？を探る練習。

成果物の完成度が全てではない。

2. 研究論文を仕上げるまで ～研究の構成要素

（前段階）スケジュールを立てる

期間は1年～大学生の卒業論文と同じ。1か月単位で計画を立てる。

（1）目的と研究史 ～テーマをアピールする

理想的な研究の目的（問い）が備えることが望ましい3つの要素

- ・おもしろい問い ～自分の興味・関心
- ・やくにたつ問い ～社会的貢献
- ・されていない問い～学術的意義 →高校生には難しいかもしれない。

ここで、谷本さん自身の経験、公共交通・都市政策への関心から現在の研究テーマに関するキーワード：アクセシビリティに至るまでの経緯を具体的に話していただいた。

（2）方法

再現可能性が重要であること、アンケートという方法は実は大変であることなどに言及された。

（3）結果 ～論文の華

図表をうまく使うことをアドバイスされた。

(4) 考察・結論

研究の目的と対応した形で記述することを強調するとともに、研究を進めていく中で研究者自身の問題意識が変化し、テーマが変化することもあると指摘された。

(仕上げ) お作法

論文作成に関する「お作法」についても簡単にふれ、約45分間の講演が終了した。

〈成果〉

講演を聴いた1年生全員を対象に、同日以下のような質問項目のアンケートを実施した。

①この講演会に参加して、探究活動を行う上で参考になることがありましたか？

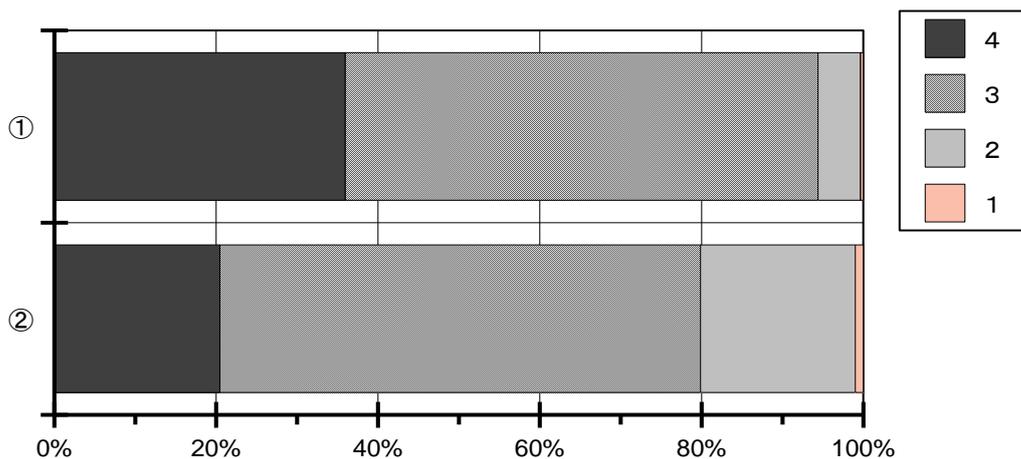
4 おおいにある 3 まあまあある 2 あまりない 1 全然ない

②この講演会に参加して、次年度の課題研究でのテーマ選びに参考になりましたか？

4 参考になった 3 まあまあなった 2 あまりならない 1 全然ならない

設問①については自由に記述してもらった欄を、設問②については「課題研究でこんなことをやってみたい」というテーマを書いてみてください、という項目を設けた。

番号で回答する設問の集計結果は以下の通りであった。



以下は、設問①の自由記述欄から抜粋したものである。

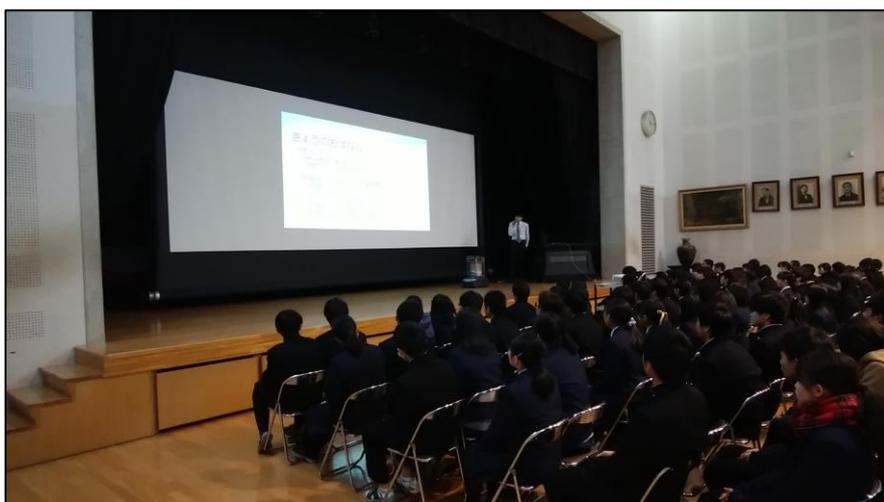
- ・全人類の知識を少しだけでも広げる、というのがとてもわかりやすく、今までやっていた調べ学習とは違うということがよくわかった。
- ・理系、文系に共通することが多いと思った。手順が大事であると思った。
- ・自分にとっておもしろい問いで、社会にとって役に立つ、できれば今までにされていない問いとなるテーマを見つけたいと思った。また、スケジュールをきちんと把握しなければならないなど、たくさんすることがあり、来年の課題研究を行う際の参考になった。
- ・研究といわれるとぼんやりとしかイメージが分らなかったが、どういう気持ちで挑めばいいとか、何をめざせばいいかが少し理解できた気がする。

高校1年生にとっては難しいと思われる内容であったため、番号での回答で”3”が最も多数を占めている状況は理解できる。しかし、これは2年次において実際に課題研究の取組を進めていく段階で必要になる内容でもある。また、”2”と回答した生徒の自由記述に以下のようなコメントがあったことは注目に値する。

- ・パワーポイント上の文章が多すぎてトークに集中できなかった。知っていることが多かった。
- ・自分の興味のあることをいろいろな段階を踏んで探究することがおもしろいし、自分の能力の向上にもつながると思った。

講演を聴いた教員からは「パワーポイントのデータを提供してほしい」という要望が出され、講演者の了解を得てコピーを入手することができた。

最後に、後輩たちのために労を惜しまず協力していただいた講演者の谷本涼さんに心から感謝申し上げます。



6. 課題研究関係の発表会概要

平成30年度 SGH 課題研究中間発表会

〈特色〉

2年次の課題研究で、SGH 関連講座である6講座（月曜3講座、木曜3講座）を選択している生徒たちが日頃の探究活動の到達点を社会系・理系講座は日本語、英語系講座は英語で発表した。

〈実施日時・場所〉

平成30年10月27日（土） 9:00～ 本校六稜会館3階ホール

〈内容〉

講座の中でいくつかのグループに分かれている場合もあり、グループごとに以下のようなテーマで発表した。

- 社会系1 (ベトナムを観光大国へ)
 - 社会系2 (インドネシアで五輪開催を)
 - 社会系3 (“大国の脅威に屈しない” ラオス 発展のために)
 - 理系1 (パスタブリッジ)
 - 理系2 (快適な建築)
 - 英語系1 (Give Myanmar the New Education)
 - 英語系2 (Tourist Trade of East Timor)
- 以上月曜講座
- 英語系3 (Comparing Islamic culture with Japanese culture)
 - 英語系4 (東南アジアに学ぶ授業中の眠気対策)
 - 理系3 (絵画と天文学)
 - 社会系4 (東南アジアから学ぶ日本の教育)
 - 社会系5 (マレーシアの政策から考える南アフリカの格差是正に向けた政策)
 - 社会系6 (日本におけるカジノの成功のために)
- 以上木曜講座

発表の約1週間前には体育大会、発表の2日後からは修学旅行という過密な日程の中で生徒たちは発表準備のために大いに努力した。おかげで指導・助言担当の先生方からは「過去の年度と比較してプレゼンテーション力が向上している。」という言葉がいただいた。また、生徒の発表に対して指導・助言者の先生方だけでなく他の生徒からも質問が寄せられ、それらの質問に誠意を持って答えようとする発表者の態度も「好感が持てる」との評価を得た。

〈成果と課題〉

発表会に出席された来賓や運営指導委員、指導・助言者の先生方からいただいた講評

の要旨は次の通りである。

岡部美香 様（大阪府教育委員会教育委員）

- ・自分の意見を述べるだけでなく、反対されたとき相手をどう説得するかを考えよう。一種のリスクマネジメント。カジノ班だけそれができていた。
- ・先行研究を読もう。
- ・質疑応答は非常によかった。さすが。

松下信之 様（大阪府教育庁高等学校課主任指導主事）

- ・質疑応答がよかった。北野生同士がいい質問をし、それに感情的ならずによく答えていた。こういう雰囲気は初めて。
- ・研究を進める中で、物事を見るとき視点、見方を身に付けてほしい。社会や現実に対正して。すぐに答えを出そうとせず、逃げずに。

山本雅弘 様（株式会社毎日放送相談役最高顧問）

- ・発表力は格段の成長。
- ・ただ、テーマへのアプローチの仕方に多面性が足りない。その点が物足りない。

野村正朗 様（学校法人帝塚山学院理事長）

- ・すべてのクラスで課題研究をしていることが素晴らしい。
- ・大人から見て答えが分かってしまう研究が多い印象。高校生ならもっと身近なことに焦点を当て異なる切り口で探してほしい。
- ・ネットに頼らずリアルな経験で。それが無理ならスカイプで。

堀内貴臣 様（大阪府教育センター指導主事）

- ・スライドの様々な工夫が素晴らしい。
- ・以下の点に留意してほしい。
 - 疑っているか。
 - データや情報は最新か？ 前提は正確か？
 - 聞いている人に自分が伝えたいことを絞る。いかに印象付けられるかがポイントだから。
 - そして、最も大事なこと、楽しんでいるかどうか。

岡本正明 様（京都大学東南アジア地域研究研究所教授）

- ・SGH 最終年度、東南アジアから学ぶという研究が出てきたことは画期的。
- ・その分、データ収集が大変である。2年前のデータはすでに使えない。
- ・そうなる訳されたものではなく英語で資料を読むこと、現場で話を聞き自分で確かめることがより重要になる。

西 芳実 様（京都大学東南アジア地域研究研究所准教授）

- ・発表の仕方、PPT の使い方は大きく成長した。
- ・現状がそうになっているには必ず理由があることを意識して。よいところもダメなところもあって理由があってそうになっている。なぜそうになっているのか、を考えると

からすべてが始まる。悪い点を暴きだし、悪いからダメ、だけでは何も解決しない。
梶本興亜 様（京都大学名誉教授）

- ・SGH を初めて見た。SSH は深く追求することが前提。その点、社会科学は難しいなと実感した。
- ・大きくテーマを立てて、結論がしょぼしょぼになっている印象。
- ・調べたことについて議論が足りない。後半はもっとよく討論して。

吉野英知 様（三菱UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社シニアコンサルタント）

- ・発表力、プレゼンテーション力は上がっている。
- ・大きな論点に結論が小さい。網羅的解決は無理。もっと絞れ！
- ・まだまだ自分たちで調べましたと、いう水準。調べたことを誰に伝えたいのか、実際に誰に動いてほしいのか考えてほしい。
- ・答えのないことにどうチャレンジするか。一つは徹底的にリサーチすること。
- ・調べ方が足りない。
- ・データの比較について、前提の異なるものをそもそも比較しないように。
- ・言葉の使い方が乱暴。使う言葉はきちんと定義して。例えば、教育、システム、積極的に・・・、何を持って、その言葉を使っているのかが分からない。

信川久実子 様（奈良女子大学特別研究員）

- ・先週は体育大会、明後日からは修学旅行、その間の課題研究。生徒の皆さんはとても忙しい中よく頑張った。
- ・より高いレベルに向かうために、時間の使い方も考えてください。

いただいた講評からは、大きなテーマを設定した次の段階としてアプローチすべき具体的なテーマを設定する際の見通しや方法論、比較研究を行う上での条件設定の不十分さや情報収集の方法など、今後の探究活動を進めていく上での課題も明らかになった。この点については、課題研究の講座を担当する教員スタッフの課題でもあるという認識を持ち、来年2月に行われる最終発表会に向けて生徒各グループへの支援を継続する必要性を痛感している。

また今回の発表会では、昨年度と同様に評価シート（ルーブリック）を用いて各グループの発表内容を採点した。その結果をもとに、中間発表会の後に開催された北野高等学校SGH運営指導委員会の場において協議し、以下の4グループをそれぞれ外部で行われる大会や発表会に本校代表として派遣することに決定した。

①SGH 全国高校生フォーラム（30年12月15日・東京）

ポスター発表、英語で説明

→ 英語系4（東南アジアに学ぶ授業中の眠気対策）

②SGH 甲子園（31年3月23日・関西学院大学）

口頭発表またはポスター発表 英語または日本語

→ 社会系3（“大国の脅威に屈しない”ラオス 発展のために）

③大阪教育大学附属高校平野校舎の発表会（31年1月12日）

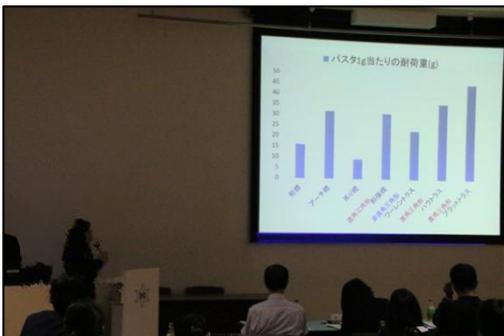
口頭発表 日本語

→ 社会系2（インドネシアで五輪開催を）

④GLHS 10校合同発表会（31年2月9日・大阪大学豊中キャンパス）

口頭発表 日本語

→ 理系3（絵画と天文学）



スーパーグローバルハイスクール(SGH)全国高校生フォーラム

〈特色〉

昨年度から、それまで年末に開催されていた SGH 連絡協議会・協議会に代えて開催されるようになった催しである。昨年度の会場はパシフィコ横浜であったが、今年度は東京国際フォーラムで行われ、全国の SGH 指定校・アソシエイト校および東京都内の高校がポスターを使って各々の研究成果を英語で発表した。

〈実施日時〉

平成30年12月15日（土） 10:00～17:00

〈内容〉 （北野高等学校HP・付添教員によるレポートより）

本校から参加した生徒2名は、ヤードムというタイで使われている暑さ対策製品が眠気覚ましにも効果があるということで、これを日本の高校生に普及できないかというテーマについて英語で発表した。

午前中はテーマごとの交流会に参加した。本校は教育・文化・歴史・言語・芸術のテーマの交流会に参加した。他の参加生徒と交流し、とても良い刺激を受けたようだ。

午後はポスター発表。発表4分、質疑応答4分の計8分のプレゼンテーションを2回行った。多くの方が聴きにきてくださった。学校で練習していたときは4分の発表時間に収まらず苦労を重ねたが、当日はしっかりと時間内にまとめることができた。効果的かつわかりやすくポスターを用い発表できた。また、英語での質疑応答に堂々と答えることができていた。

〈成果〉

残念ながら表彰は受けることができなかったが、参加した2名にとってはとても良い経験になったようだ。この機会を活かして最終発表に向けて研究をすすめていきたいと思う。

大阪教育大学附属高等学校平野校舎 SGH 課題研究発表会への参加

〈特色〉

平成27年度にSGHに指定された大阪教育大学附属高等学校平野校舎は、「多面的に“いのち”を考えるグローバルリーダーの育成」をテーマに研究開発に取り組んでいる。北野高等学校は昨年度より、SGH 課題研究発表会に招待校として参加し、課題研究に取り組んでいる2年生が口頭発表をしている。

〈実施日時〉

平成31年 1月12日(土) 12:30~16:00(第2部)に出場

〈内容〉

本校から参加した生徒6名は、「世界のイスラム人口と東南アジアのGDPを有するインドネシア。今年はアジア大会、アジアパラ大会を開催し国際的な信頼を高めた。そんな中、アジア大会を開催したことで、インドネシアでの五輪開催の機運が一気に高まっている。インドネシアは国是として、多様性の中の統一を掲げている。これは“いかなる差別をも伴うことなく(中略)スポーツを通して(中略)平和でよりよい世界をつくる”とした五輪憲章とも合致する。そこで私たちは五輪開催に向けて障壁とも成りうるインドネシア国内の課題を洗い出し、解決策を模索する」という要旨で体育館の舞台上で約10分間の口頭発表を行った。

質疑応答の場面では、附属高等学校の生徒からインドネシアでの五輪開催を企画した理由や高校生としてどのようなことに貢献できるか、大会運営上の問題点は?などの具体的な質問が寄せられた。また、発表会終了後には附属高等学校の体育科教員から、「五輪開催は開催国にスポーツを普及するという大きな意義がある」というアドバイスを受けていた。報告者は地歴・公民科の教員であるが、このアドバイスを横で聴いていて、社会的なテーマを扱う課題研究であっても担当する教員の教科の枠組を越えて広げることができる可能性に思い至った。

〈成果〉

発表会の直後に生徒に書いてもらった振り返りシートからは、反省すべき点と、最終発表会に向けての改善方向がうかがえる記述が見られる。

《自分たちの発表を終えて気付いた点》

- ・自分が思っているよりもゆっくり話さないと、早口になってしまうこともあると気付いたので、次からは相手が聞き取りやすいように話そうと思う。

《他校のポスター発表や口頭発表で参考になりそうな点》

- ・大教大のプレゼンテーションは根拠や結論がとても信頼できるものだった。私たちのプレゼンテーションは結構表面的で深いところまで追求できていない部分が多かったと反省した。
- ・調べるまでの過程→実験→考察の流れがしっかりしている

平成30年度 SGH 課題研究最終発表会

〈特色〉

2年生が取り組んだ課題研究の1年間の集大成として行われる。SGH 関連講座も含めた全ての講座を受講している生徒が8つの教室に分かれてオーラル発表、2つのホールでポスター発表を行った。また、発表当日は2年生だけでなく、1年生も全員が参加した。来賓、保護者も見学に来られた。

〈実施日時〉 平成31年 2月 2日（土） 8：30～12：30

〈内容〉 北野高校 HP の記事より抜粋

課題研究のテーマは様々です。9月の中間発表後に、指摘されたところを修正したグループや、テーマを見直したグループもあった。12月の後半から最終発表に向けてラストスパートがかかり始めた。連日 LAN 教室でプレゼンテーション資料を作ったり、放課後残って実験や議論を重ねたり、ポスター印刷をしたり、皆が最後まで真剣な面持ちで準備を行った。

その成果が、2月2日に満を持して披露された。オーラル発表は、生徒による司会で進んだ。発表テーマ・発表者の紹介だけではなく、質疑応答や進行時刻の管理までも行う。発表する生徒たちは、周到に用意されたスライドで要領よく発表していく。交代しながら発表し、それが終わると質問に答えていく。発表は練習の甲斐あって、なかなかスムーズだった。思ってもみない質問が飛びだして、しどろもどろになりながらも頑張って答えたり、ウィットにとんだ回答が出たり、盛り上がりのあるオーラル発表だった。

多目的ホールや六稜会館1階では、ポスター発表が行われた。1年間研究した内容を、AO版1枚にまとめて掲示した。また、指定の時間には各グループの生徒が控えており、質問を受け付けていた。ポスターだけではなく、様々な器具も並べられ、実演を行っているところもあった。オーラル発表よりも近くで話しかけやすく、熱心に話し合う生徒の姿が見られた。

生徒たちは自分が見たテーマについて感想を書き、提出する。お互いをたたえあうものもあれば、厳しい指摘もあった。これも日頃の授業で、他人の発表を聞き、正しく批評する態度が身に付いているからだろう。保護者の方からも多数のご意見をいただいた。

普段の授業とは違って、暗中模索を続けた10ヶ月間だった。これは生徒たちの成長のためにも有意義な時間だったと思う。見学した1年生は、来年の自分たちの姿を思い浮かべ、気持ちを奮い立たせていることだろう。

〈成果〉

SGH 関連講座の生徒は全ての発表が終わった後六稜会館3階ホールに集合し、それぞれの系列の発表を見てくださった運営指導委員や指導助言者の先生方から講評をいただいた。先生方によるルーブリック表は当該のグループに手渡し、振り返りの材料とした。また SGH 関連講座を受講している生徒名を対象に、5月上旬に行った年度初めアンケートと同じ質問項目で事後アンケートを実施した。アンケートには選択肢で回答する質問以外に自由記述欄も設けており、その記述からは生徒たちの変容の様子がうかがえる。

GLHS 合同発表会

〈実施日・場所〉

平成31年 2月 9日(土) 午後 大阪大学コンベンションセンター

〈内容〉 (北野高等学校HP・付添教員によるレポートより)

本校からは「天文学的側面から見た絵画の正確性」の研究チームが代表としてプレゼンテーションを行った。舞台上上がる直前まで入念にリハーサルを繰り返し、本番では堂々とした発表を披露した。質疑応答の時間には大阪大学の先生からの質問にも臆することなく堂々と受け答えしていた(後で話を聞くと「想定範囲内の質問でした!」とニコリしていた)。

各校からの発表内容は日本社会が抱える問題を扱うもの、心理学や地理学に関するもの、大衆芸能から戦後社会を考察するものなど多岐にわたるテーマで、着眼点や研究方法、プレゼンテーションの技法などは見学した生徒たちにとっても学びの多い充実した一日となったことと思う。

発表会の後半には本校生徒が司会進行役を務めてくれた。また、発表の最後には10校合同のアメリカ研修(シリコンバレー等)の参加生徒が寸劇を交えながら研修報告を行った。

〈成果〉

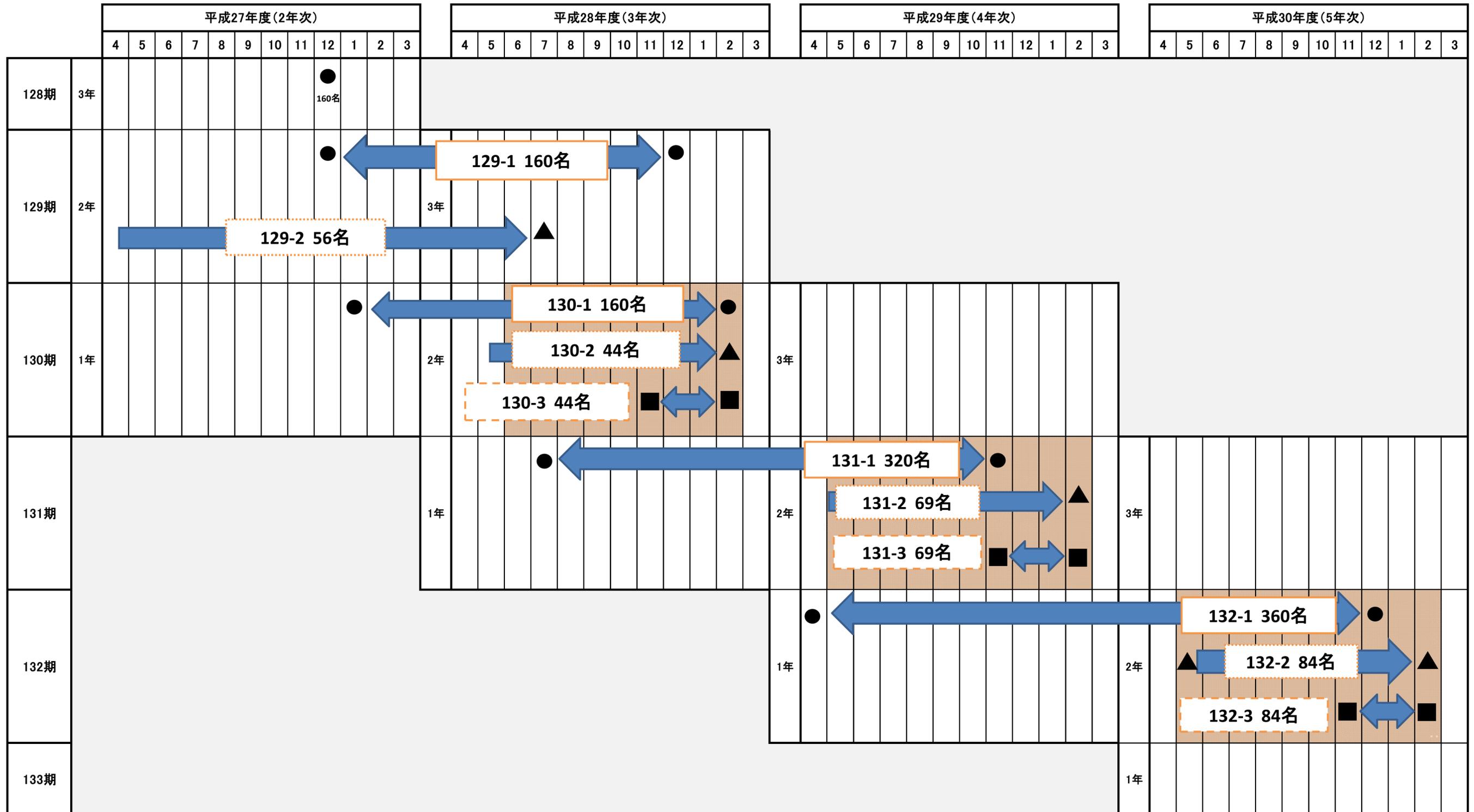
今回の発表で、アカデミックな観点で高い評価を得た発表に送られる「大阪大学賞」を受賞することができ、ここまで頑張ってきた生徒たちには大きなご褒美となった。



IV. 成果について

1. SGH評価計画(評価の枠組み)

- 関学委託アンケート大問7番 ← 1 → 文理学科の生徒を対象としたSGHの様々な取組を行う前と取組を行った後の意識の変容をみるアンケート
 - ▲ SGH課題研究後変容を見るアンケート ← 2 → SGH関連の課題研究を行った生徒を対象とし、課題研究後の意識の変容をみるアンケート
 - 課題研究ルーブリック評価 ← 3 → SGH中間発表時と最終発表時で同じルーブリック評価を行い、どれだけ生徒が成長したかをみる評価指標
- SGH関連の課題研究に取り組む期間で、ワークシート等、生徒の変容がみられる記述を収集する



2. アンケート結果に見られる生徒の変容

はじめに

SGH の取組に関してその成果を検証するため、本校では以下の2種類のアンケートおよび中間発表時と最終発表時におけるループリックを用いた評価シートを活用している。以下にその評価方法の概要とアンケート結果に見られる生徒の変容について述べる。

(1) 関西学院大学によるアンケート調査の活用

関西学院大学では大阪府教育庁からの委託を受けて、同大学の高大接続センターから本校に対してアンケート調査の依頼が来ている。当該のアンケート「高校生の国際関係の考えや価値観などに関する調査」は、文理学科の全生徒に対して1年次から2年次にかけての意識変化を見るもので、SGH 対象の生徒のみならず、本校で実施している様々な取組に参加している生徒の意識変化を調べるという目的をもって行われている。

当該「アンケート」の中には、選択肢によって回答できる項目がある。以下はその質問内容のうち、過去の年度との比較が可能な項目を抽出したものである。

- Q1 (日本以外の) 先進国の文化や風土や政治経済の現状などについて知りたい
- Q2 日本のことをもっと知る必要があると思う
- Q3 地球規模で社会に貢献したい
- Q4 日本のことを他国の人もっと知ってほしい
- Q5 開発途上国の経済発展に貢献したい
- Q6 海外支援活動に参加したい
- Q7 海外で、いろいろなことにチャレンジしたい
- Q8 開発途上国の人たちと個人的に交流したい
- Q9 英語によるコミュニケーション力を高めたい
- Q10 (日本以外の) 先進国の人たちと個人的に交流したい
- Q11 現在起こっている世界の出来事の背景や歴史について学ぼうと思う
- Q12 環境問題の解決に貢献したい
- Q13 開発途上国の文化や風土や政治経済の状況などについて知りたい
- Q14 国際的な展開をしている企業で働きたい
- Q15 国連や国際 NGO などの国際的な機関で働きたい

今回の検証ではこの質問15項目の回答に着目し、「ものすごく思う(6点)」から「まったく思わない(1点)」まで6点満点で数値化した。集計は2年生全体、SGH 群(2年次に課題研究 SGH 関連講座を受講している生徒)の他、海外研修や学内留学に参加した生徒を抽出して行い、延べ21のグループに分けた上で回答の平均値を比較した。サンプル数は SGH 群84であり、2年に在籍する生徒全員を対照群とした。

SGH 群および対照群も含めて全体で345項目のうち、1年次から2年次にかけて

平均値が上昇した項目数は123であった。昨年度131期生に対して行った同様のアンケートでは、SGH群および対照群も含めて平均値が上昇した項目数は28であったので、今年度の132期生は2年次における変容が相対的に大きいとみることができる。

132期生で平均値が上昇したグループ数が最も多かった質問は「Q10（日本以外の）先進国の人たちと個人的に交流したい」（22グループ）であり、次に多かった質問は「Q6 海外支援活動に参加したい」（13グループ）であった。131期生において平均値が上昇したグループが最も多かった（6グループ）質問「Q7 海外で、いろいろなことにチャレンジしたい」は、132期生では8グループ、次に多かった（4グループ）質問「Q9 英語によるコミュニケーション力を高めたい」は、132期生では5グループで、ほぼ同程度の数値を示している。

また、SGH群84名と対照群SGH群346名の平均値を比較したところ、総数30の質問項目のうちQ5の1年次、Q10の1年次以外の28項目においてSGH群の方が上回っていた。最も大きな差がついた項目は「Q7 海外で、いろいろなことにチャレンジしたい」で、1.246ポイントであった。なお、アンケートの実施時期やデータの一覧については関西学院大学委託アンケートを参照されたい。

（2）2年課題研究 SGH 関連講座受講生を対象としたアンケート

①選択肢によって回答する項目についての検証

上記 SGH 群 84 名の生徒を対象に、年度初めアンケートを平成 30 年 5 月上旬に行い、さらに最終発表会後の平成 31 年 2 月上旬に、同じ質問項目による事後アンケートを実施した。質問項目は以下の通りである。

- (1) 英語でのコミュニケーションには抵抗がない
- (2) 海外でいろいろなことにチャレンジしたいと思う
- (3) 日本のことをもっと知る必要があると思っている
- (4) 開発途上国の文化や風土や政治経済の状況などについて知りたいと思う
- (5) 大学の先生や企業経営者と話をすることには抵抗がない
- (6) 東南アジアへの興味や関心を持っている
- (7) 東南アジア諸国への旅行や現地でのフィールドワークをやってみたい
- (8) 東南アジア出身の留学生と意見交換する機会を持ちたい
- (9) 将来は、仕事で国際的に活躍したいと思う
- (10) 地球規模で社会に貢献したいと思う
- (11) 卒業後は、海外の大学・大学院等で学んでみたいと思う
- (12) 世界的な問題について関心を持っている
- (13) 自分の考えを他の人に聞いてもらおうという思いが強い
- (14) 開発途上国の人たちと個人的に交流したいと思う
- (15) 英語によるコミュニケーション力を高めたいと思う
- (16) 人前で発表することには抵抗が少ない
- (17) 将来は、国連や国際 NGO などの国際的な機関で働きたいと思う

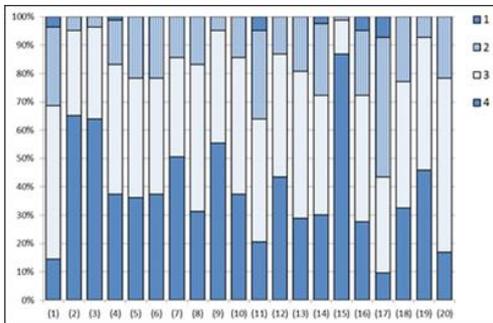
- (18) 開発途上国の経済発展に貢献したいと思う
- (19) 日本がより望ましい国になることに貢献したいと思う
- (20) 現在の段階で、課題を発見し、分析する力がついていると思う

回答は各質問項目に対してアンケート実施時点における生徒自身の状況を4（そう思う）、3（ややそう思う）、2（あまり思わない）、1（まったく思わない）のいずれかで答える4件法とした。

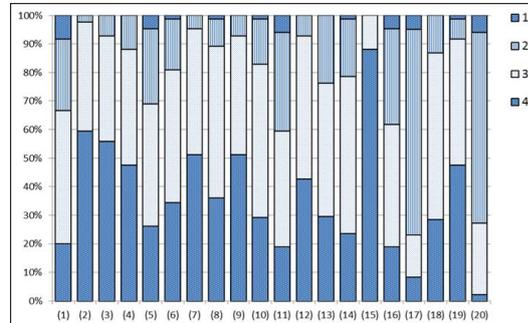
以下にSGH群全体、および社会系・英語系・理科系各グループの回答分布をグラフ化して示す。

SGH 群全体 サンプル数84

年度初め

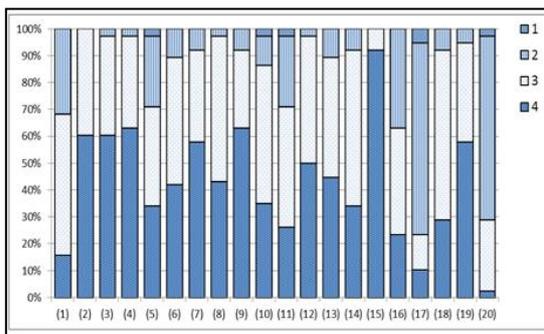


事後

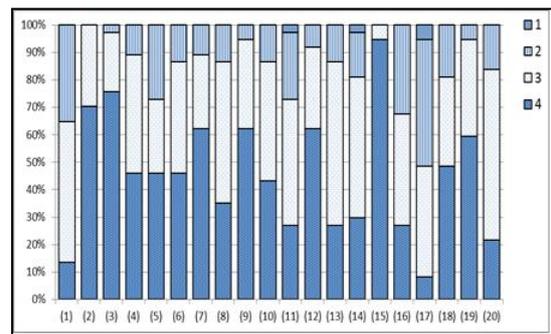


社会系 サンプル38

年度初め

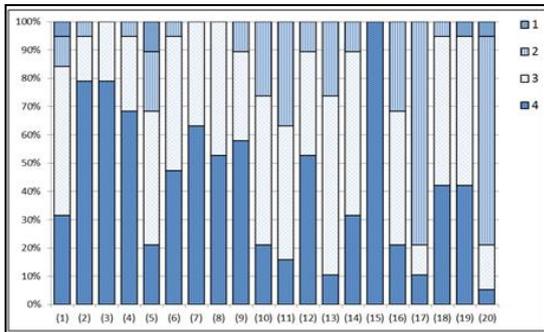


事後

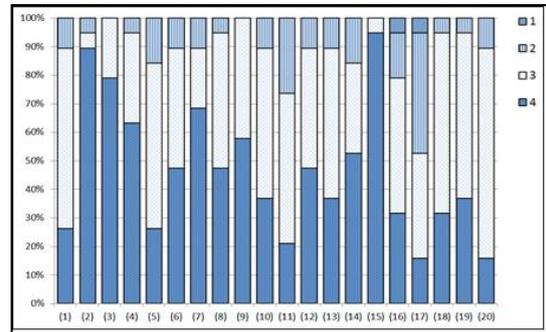


英語系 サンプル数 19

年度初め

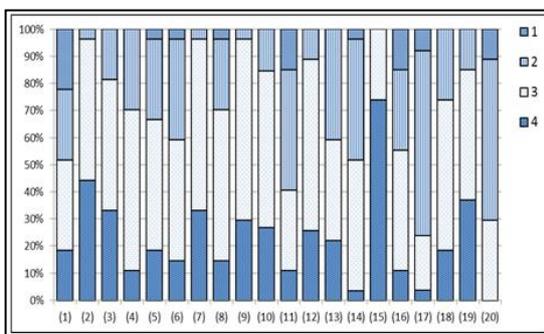


事後

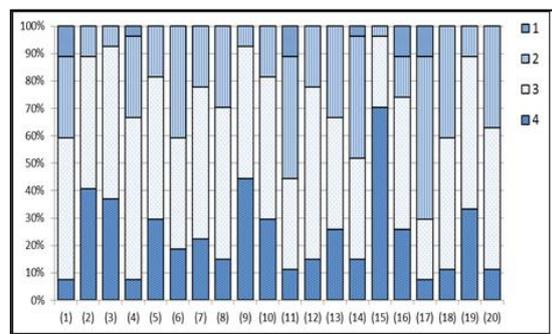


理科系 サンプル数 27

年度初め



事後



SGH 群全体の 4 件法の回答を数値化して平均をとり、年度初めと事後とにおいて比較したものが次の表である。

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)
年度初め	2.79	3.57	3.49	3.36	2.90	3.14	3.46	3.24	3.44	3.11
事後	2.80	3.60	3.60	3.19	3.14	3.16	3.36	3.14	3.51	3.23
差	0.01	0.03	0.11	-0.17	0.24	0.02	-0.10	-0.10	0.07	0.12
	(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)	(19)	(20)
年度初め	2.73	3.36	3.06	3.01	3.88	2.76	2.27	3.15	3.38	2.24
事後	2.80	3.30	3.10	3.00	3.86	2.95	2.46	3.10	3.39	2.95
差	0.07	-0.06	0.04	-0.01	-0.02	0.19	0.19	-0.05	0.01	0.71

肯定的評価の回答について、伸びが最も著しいのは(20)、次は(5)であった。

評価が難しいところであるが、(1)の関西学院大学によるアンケート調査結果と突き合わせてみると、現2年生(132期生)は、2年次当初から意識の高い生徒が多数 SGH 関連講座を選択した傾向があるとみることができる。さらに課題研究を進めていく中で指導・助言者である大学の教員や企業経営者からのアドバイスを受け入れ、課題を発見し、分析する力を伸ばすことができたと考えられる。

なお、課題研究の各系列ごとの評価については、Ⅲ－1. 社会科、Ⅲ－2. 英語科、Ⅲ－3. 理科それぞれの〈成果〉の項目を参照されたい。

自由記述欄の回答に見る生徒の変容

年度初めアンケートでは、自由記述欄に「課題研究に取り組む上であなたが課題だと思っていることについて、自由に記してください。」という問いを設定した。また、事後アンケートの自由記述欄には、「課題研究に取り組んだことを通じてあなた自身が身につけたことは何ですか？以下の欄に自由に記してください。」という問いを設けた。年度初めと事後とで、同じ生徒による記述からその生徒の変容が顕著に見られた例を紹介する（下線は報告執筆者による）。

〈社会系〉年度初め

- 生徒 a 経済成長などとその国の人々の暮らしの関係性を調べてみたい。（経済、政治と身近なことの関係）
- 生徒 b 現地には事実上フィールドワーク等に行けず専門家や文献、時にはインターネットに頼るしかない以上どこまで調査対象国を深くまで追求できるのか（ということ）。

〈社会系〉事後

- 生徒 a 国の課題をどのように解決していくかという考え方が前よりも身についたと思う。プレゼンテーションの構成の仕方を学んだ。
- 生徒 b 大きく2つ身についたと思う。1つは情報集積力である。インターネットや文献から得られる情報は玉石混交、真偽のわからないものも多々あるが、この1年で取捨選択ができるようになったと思う。英語力も上昇したと思う。

〈英語系〉年度初め

- 生徒 c 英語で自分の考えていることをうまく伝えること。あまり東南アジアの状況を深く知っていないこと。
- 生徒 d 高校生にできる限度があるのでそことのバランスが難しい。深い問題についてできたら立派だけど大変そう。

〈英語系〉事後

- 生徒 c 実際その内容がどうであれ、問題解決に向けての改善案を考えることができた。また留学生と英語でコミュニケーションをとることで、少し英語で話すことへの抵抗がなくなったがまだまだ英語力が足りないと実感することだらけであった。そしていつかミャンマーへ旅行に行きたい。
- 生徒 d これまでは答えのある問題を解くことが多かったが、1年間答えのない問題にじっくり向かい合ってきて、難しさに気付いた。その中でグループみんなで作るとなかなか進まなかったが、やらなくてもいいことを進んでするという大切さを学んだ。

〈理科系〉年度初め

生徒 e レポートなどをまとめる力がない。(使用するかはともかく)英語があまり話せない。

生徒 f 圧倒的に知識が足りないことが特に課題だと思う。だから建築についての知識をもっと取り入れたいと思う。

〈理科系〉事後

生徒 e 思い切った行動(作者に連絡を取るなど)ができるようになった。英語を使う抵抗が減った。

生徒 f 研究をするときに前回の発表で論理的に弱い部分を見逃されずに指摘されたので、筋の通った発表内容にしようと努力した。最初は慣れなかったので大変だったが最終発表のときには論理的に考える力を身につけられたのでよかった。

(3) 課題研究 SGH 関連講座中間発表時と最終発表時における

ルーブリックによる評価

課題設定力、研究基礎力、研究展開力、表現力、応答力の5つの観点7つの項目からなる評価シート(別掲)を作成し、あらかじめ生徒に提示した上で発表会当日に指導・助言者による評価を行った。また、運営指導委員からは講評をいただいた。中間発表時の評価・講評を通して、研究手法や発表技法等に対する生徒自身の理解が深まり、最終発表会に向けての改善が見られた。

今年度は最終発表では、SGH 関連講座は複数の会場に分散して口頭発表を行ったため、全ての運営指導委員、指導・助言者から評価を得ることができなかった。従って、SGH 関連講座の生徒は全ての発表が終わった後、六稜会館3階ホールに集合し、それぞれの系列の発表を見てくださった運営指導委員や指導・助言者の先生方から講評をいただいた。先生方によるルーブリック表は当該のグループに手渡し、振り返りの材料とした。

参考に、今年度と同じルーブリックを用いて評価をした昨年度の SGH 関連講座と比較すると、上位3グループの平均点は以下の通りであり、ポイントの上昇が見られる。

平成 29 年度	1 位	19.7	2 位	19.3	3 位	19.2
平成 30 年度	1 位	22.5	2 位	19.5	3 位	19.3

大阪府立北野高等学校 SGH 発表評価シート 平成 年度

発表順	グループ番号	タイトル

観点		4	3	2	1	得点
課題設定力	A 目標設定	研究の目的・目標を極めて明確に説明できている。	研究の目的・目標を概ね説明できている。	研究の目的・目標を説明しているが、不十分である。	研究の目的・目標を、説明できていない。	
	B 独創性	研究内容に高校生らしい独創性が極めて強く感じられる。	研究内容に高校生らしい独創性がやや強く感じられる。	研究内容に高校生らしい独創性が若干感じられる。	研究内容に独創性が感じられず、既視感がある。	
研究基礎力	C 研究方法	研究内容に適合した研究方法を選択できている。資料・データを極めてうまく収集している。	研究方法の選択に妥当性があり、資料・データの収集状況も概ね良好である。	研究方法の選択や資料・データの収集状況に、若干の不備が認められる。	研究内容と研究方法に適合性が認められず、資料・データの収集も不十分である。	
	D ルールの遵守	先行研究・資料・データの典拠・出典や研究過程をしっかりと明示し、研究をすすめるうえでのルールを遵守できている。	先行研究・資料・データの典拠・出典や研究過程が概ね示されており、研究上のルールがある程度遵守できている。	先行研究・資料・データの典拠・出典や研究過程があまり示されておらず、研究上のルールに対する意識を高めていく必要がある。	先行研究・資料・データの典拠・出典や研究過程がまったく示されておらず、研究上のルールも認識できていない。	
研究展開力	E 分析力と論理性	収集した資料やデータを極めてうまく活用し、論理的で説得力のある結論を導くことができた。	収集した資料やデータをうまく活用し、論理的な結論を導くことができた。	資料やデータの活用方法がやや不適切で、論理的な結論を導く力も不足している。	資料やデータが活用できておらず、結論の論理性も乏しい。	
表現力	F プレゼン力	周到な準備に裏付けられた自信に溢れる発表であり、聴衆に十分配慮した発表態度・技法にも好感が持てる。	十分な準備を感じさせる発表であり、その態度・技法から聴衆への配慮も感じられる。	発表に向けた準備がやや不足しており、発表態度・技法にも改善すべき点が残っている。	発表準備が不足しており、発表技法についても改善すべき点が多い。	
応答力	G 質疑応答	質問の主旨を十分に理解して、的確かつ明確に、余裕を持った応答ができた。	質問の主旨を理解して、概ね的確な応答ができた。	質問の主旨を理解しているが、応答内容はやや不的確であった。	質問の主旨を理解できておらず、応答も不的確であった。	
加点項目 (最高4点)		加点理由				

●関西学院大学委託アンケート結果

132期生の 1年次と2年次の 意識変化	質問事項		Q1		Q2		Q3		Q4		Q5		Q6		Q7	
	(日本以外の)先進国の文化や風土や政治経済の状況などについて知りたい。		日本のことをもっと知る必要があると思う。		地球規模で社会に貢献したい。		日本のことを他国の人にもっと知ってほしい。		開発途上国の経済発展に貢献したい。		海外支援活動に参加したい。		海外で、いろいろなことにチャレンジしたい。			
	対象人数		1年次	2年次	1年次	2年次	1年次	2年次	1年次	2年次	1年次	2年次	1年次	2年次	1年次	2年次
全体平均	359	346	4.044	3.600	4.400	3.972	3.630	3.267	3.861	3.392	3.411	2.992	2.942	2.761	4.194	3.658
SGH群	84	84	4.702	4.262	4.750	4.524	4.048	4.202	4.310	3.940	3.190	3.798	3.357	3.655	4.833	4.905
SGH群平均-全体平均			0.658	0.662	0.350	0.552	0.419	0.936	0.448	0.549	-0.221	0.806	0.415	0.894	0.639	1.246
学内留学参加	176	167	4.295	3.676	4.563	3.983	3.834	3.545	4.063	3.409	3.193	3.222	3.250	2.994	4.534	3.903
学内留学不参加	183	176	3.783	3.489	4.244	3.950	3.417	2.978	3.678	3.350	3.617	2.772	2.656	2.533	3.861	3.406
ハワイ参加	35	33	4.200	3.543	3.971	3.857	3.800	3.200	3.457	3.314	3.857	2.686	2.543	2.543	4.514	3.829
シンガポール参加	48	46	4.083	4.000	4.479	4.042	3.813	3.729	4.063	3.354	3.250	3.188	3.396	3.313	4.604	4.333
TOEFLセミナー(1年)	172	165	4.238	3.738	4.430	4.052	3.843	3.436	3.953	3.459	3.285	3.244	3.134	3.047	4.576	3.988
英語上級セミナー(2年)	21	21	4.286	4.381	4.667	4.810	3.762	4.143	3.952	4.143	3.000	3.857	3.286	3.381	4.381	4.667
SGH社会	38	38	4.947	4.632	4.632	4.605	4.270	4.316	4.447	4.184	2.974	4.053	3.526	3.816	4.684	4.816
SGH英語	19	19	4.895	4.474	5.158	5.105	4.158	4.421	4.421	4.158	3.368	4.263	3.158	4.211	5.211	5.316
SGH理科	27	27	4.222	3.593	4.630	4.000	3.667	3.889	4.037	3.444	3.370	3.111	3.259	3.037	4.778	4.741
SGH文系	57	57	4.930	4.579	4.807	4.772	4.232	4.351	4.439	4.175	3.105	4.123	3.404	3.947	4.860	4.982
SGH全+ハワイ	11	11	4.636	3.818	4.727	4.364	4.091	4.091	3.909	3.727	3.727	3.455	3.091	3.091	5.091	5.000
SGH文+ハワイ	8	8	4.875	4.000	4.500	4.250	4.375	4.000	4.000	3.875	4.000	3.750	3.000	3.125	5.125	5.125
SGH全+学内留学	63	63	4.683	4.206	4.667	4.492	4.145	4.238	4.397	3.889	3.206	3.857	3.476	3.635	4.984	4.889
SGH文+学内留学	43	43	4.953	4.512	4.721	4.744	4.357	4.442	4.465	4.093	3.186	4.163	3.488	3.907	5.047	5.070
学内留学+ハワイ	21	20	4.435	3.609	4.000	3.783	3.913	3.304	3.391	3.087	3.870	2.739	2.478	2.652	4.391	3.870
海外いずれかに参加	94	89	4.138	3.851	4.383	4.032	3.819	3.521	3.947	3.447	3.457	3.096	3.064	3.053	4.543	4.149
学内留学または海外	206	196	4.243	3.709	4.524	4.024	3.824	3.515	3.985	3.427	3.238	3.194	3.180	2.971	4.544	3.951
学内・海外+SGH全	38	38	4.553	4.263	4.868	4.447	4.000	4.237	4.421	3.947	3.237	3.737	3.395	3.605	4.868	4.842
学内・海外+SGH文	25	25	4.953	4.512	4.721	4.744	4.357	4.442	4.465	4.093	3.186	4.163	3.488	3.907	5.047	5.070
海外いずれか+SGH全	38	38	4.553	4.263	4.868	4.447	4.000	4.237	4.421	3.947	3.237	3.737	3.395	3.605	4.868	4.842
海外いずれか+SGH文	25	25	4.880	4.520	4.880	4.640	4.000	4.480	4.520	4.080	3.160	4.120	3.200	3.800	4.960	5.040

Q8		Q9		Q10		Q11		Q12		Q13		Q14		Q15		15項目の 単純平均値	
開発途上国の人 たちと個人的に 交流したい。		英語によるコミュ ニケーション力 を高めたい。		(日本以外の)先 進国の人たちと 個人的に交流し たい。		現在起こってい る世界の出来事 の背景や歴史に ついて学ぼうと 思う。		環境問題の解決 に貢献したい。		開発途上国の文 化や風土や政治 経済の現状など について知りたい。		国際的な展開を している企業で 働きたい。		国連や国際 NGOなどの国際 的機関で働きた い。			
1年次	2年次	1年次	2年次	1年次	2年次	1年次	2年次	1年次	2年次	1年次	2年次	1年次	2年次	1年次	2年次	1年次	2年次
3.133	2.839	5.108	4.586	2.997	3.522	4.028	3.544	4.033	3.411	3.572	3.050	3.858	3.464	2.586	2.069	3.720	3.342
3.595	3.583	5.488	5.393	2.440	4.452	4.345	4.143	4.190	3.702	3.952	3.821	4.452	4.488	3.155	2.988	4.054	4.124
0.462	0.744	0.380	0.807	-0.557	0.930	0.317	0.598	0.157	0.291	0.380	0.771	0.594	1.024	0.569	0.919	0.334	0.782
3.460	3.040	5.295	4.767	2.750	3.801	4.256	3.608	4.165	3.449	3.767	3.222	3.943	3.756	2.938	2.364	3.887	3.516
2.811	2.633	4.922	4.383	3.250	3.228	3.794	3.478	3.894	3.367	3.367	2.878	3.789	3.194	2.239	1.794	3.555	3.162
2.886	2.571	5.143	4.571	2.629	3.543	3.743	3.286	3.971	3.229	3.343	2.886	3.943	3.457	2.686	1.800	3.646	3.221
3.479	3.313	5.333	4.938	2.667	3.917	4.063	3.646	4.083	3.354	3.875	3.417	3.958	3.854	3.083	2.458	3.882	3.657
3.314	3.087	5.297	4.872	2.820	3.767	4.076	3.715	4.070	3.483	3.692	3.244	4.023	3.669	2.872	2.302	3.841	3.540
3.571	3.905	5.476	5.381	3.190	4.333	4.333	4.381	4.190	3.905	3.952	4.048	3.762	4.000	2.857	2.810	3.911	4.143
3.789	3.947	5.342	5.447	2.395	4.500	4.579	4.447	4.553	3.816	4.184	4.316	4.447	4.711	3.316	3.211	4.139	4.321
3.474	3.737	5.789	5.737	2.053	4.842	4.421	4.684	3.842	4.053	4.158	4.053	4.421	4.526	3.316	3.579	4.123	4.477
3.407	2.963	5.481	5.074	2.778	4.111	3.963	3.333	3.926	3.296	3.481	2.963	4.481	4.148	2.815	2.259	3.886	3.598
3.684	3.877	5.491	5.544	2.281	4.614	4.526	4.526	4.316	3.895	4.175	4.228	4.439	4.649	3.316	3.333	4.134	4.373
3.545	3.545	5.636	5.545	2.182	4.727	3.909	3.818	3.727	3.455	3.545	3.545	4.091	4.000	2.727	2.727	3.909	3.927
3.750	3.750	5.500	5.750	2.125	4.750	4.000	4.125	4.125	3.875	3.750	3.750	3.875	3.875	2.750	3.125	3.983	4.075
3.619	3.508	5.476	5.381	2.476	4.492	4.317	4.127	4.222	3.714	3.841	3.778	4.365	4.571	3.206	2.968	4.072	4.116
3.744	3.860	5.535	5.605	2.326	4.605	4.512	4.465	4.326	3.930	4.093	4.186	4.465	4.767	3.372	3.279	4.173	4.375
2.913	2.609	5.043	4.783	2.783	3.565	4.087	3.435	3.913	3.435	3.565	3.043	3.870	3.652	2.739	1.957	3.693	3.301
3.287	3.117	5.245	4.787	2.691	3.830	3.968	3.606	4.106	3.319	3.681	3.266	3.947	3.723	2.936	2.255	3.814	3.537
3.408	3.039	5.311	4.777	2.762	3.782	4.194	3.631	4.170	3.432	3.757	3.223	3.922	3.684	2.874	2.277	3.862	3.509
3.658	3.711	5.553	5.342	2.421	4.447	4.053	3.868	4.079	3.474	3.842	3.684	4.026	4.368	3.079	2.895	4.004	4.058
3.744	3.860	5.535	5.605	2.326	4.605	4.512	4.465	4.326	3.930	4.093	4.186	4.465	4.767	3.372	3.279	4.173	4.375
3.658	3.711	5.553	5.342	2.421	4.447	4.053	3.868	4.079	3.474	3.842	3.684	4.026	4.368	3.079	2.895	4.004	4.058
3.720	4.000	5.640	5.560	2.240	4.600	4.320	4.200	4.280	3.600	4.120	4.040	3.920	4.480	3.000	3.080	4.056	4.283

3. 目標設定シート

平成26年度スーパーグローバルハイスクール 目標設定シート

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）									
	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	目標値(28年度)	
自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数									
a	SGH対象生徒:		11人	10人	2人	14人	19人	80人	
	SGH対象生徒以外:		人	78人	98人	72人	156人	161人	126人
目標設定の考え方: 対象生徒に広く推奨し毎年増加させていく。									
自主的に留学又は海外研修に行く生徒数									
b	SGH対象生徒:		21人	14人	18人	54人	15人	40人	
	SGH対象生徒以外:		75人	103人	96人	54人	87人	22人	93人
目標設定の考え方: 生徒の意思を尊重しつつ毎年増加させていく。									
将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合									
c	SGH対象生徒:		53%	57.0%	69%	60.3%	74.8%	100%	
	SGH対象生徒以外:		%	94%	46%	50.0%	46%	54.2%	58.1%
目標設定の考え方: 生徒全員のメンタリティを涵養すべきもの。									
公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数									
d	SGH対象生徒:		6人	1人	1人	5人	5人	20人	
	SGH対象生徒以外:		人	51人	43人	10人	50人	43人	13人
目標設定の考え方: できるだけ多くの機会をとらえて毎年増加させていく。									
卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1~B2レベルの生徒の割合									
e	SGH対象生徒:		%	%	32%	46%	41%	70%	
	SGH対象生徒以外:		17%	36%	13%	26%	26%	32%	38%
目標設定の考え方: 伝統的な教授法にTOEFLを活用しながら実力をアップさせる。									
(その他本構想における取組の達成目標)									
f	SGH対象生徒:								
	SGH対象生徒以外:								
目標設定の考え方:									

1' 指定4年目以降に検証する成果目標									
	24年度	25年度	29年度	30年度	31年度	32年度	33年度	目標値(31年度)	
国際化に重点を置く大学へ進学する生徒の割合									
a	SGH対象生徒:		59.09%	%	%	%	%	60%	
	SGH対象生徒以外:		39.80%	44.40%	43.80%	%	%	%	50%
目標設定の考え方: 現役進学率のアップ及び国際化に重点を置く大学への進学者増をめざす。									
海外大学へ進学する生徒の人数									
b	SGH対象生徒:		0人	0人	人	人	人	20人	
	SGH対象生徒以外:		1人	0人	1人	2人	人	人	10人
目標設定の考え方: 生徒の限りない可能性を導くべくダイレクト入学を推奨する。									
SGHでの課題研究が大学の専攻分野の選択に影響を与えた生徒の割合									
c	SGH対象生徒:		22.14%	15.50%	%	%	%	100%	
	SGH対象生徒以外:		-	-	12.92%	15.18%	%	%	80%
目標設定の考え方: 生徒全員に影響力を及ぼすカリキュラムの充実を目指す。									
大学在学中に留学又は海外研修に行く卒業生の数									
d	SGH対象生徒:		55人	68人	人	人	人	80人	
	SGH対象生徒以外:		-	-	112人	126人	人	人	30人
目標設定の考え方: 高校時代に海外研修等を通じて留学に現実感を持たせる指導を進める。									

2. グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標（アウトプット）								
	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	目標値(28年度)
課題研究に関する国外の研修参加者数								
a	0人	0人	85人	59人	83人	78人	108人	40人
目標設定の考え方: 毎年40人程度を対象とする。								
課題研究に関する国内の研修参加者数								
b	0人	0人	311人	411人	351人	367人	290人	40人
目標設定の考え方: その他の課題研究と関連付けて増加させる。								
課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数								
c	0校	3校	8校	8校	9校	6校	7校	10校
目標設定の考え方: 毎年新たな開拓を進めつつ、既存分を充実させる。								
課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)								
d	0人	20人	96人	40人	64人	81人	78人	150人
目標設定の考え方: 研究内容に応じて幅を広げていく。								
課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)								
e	0人	3人	22人	22人	9人	28人	61人	30人
目標設定の考え方: 研究内容に応じて幅を広げていく。								
グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数								
f	0人	0人	49人	40人	46人	72人	40人	40人
目標設定の考え方: 生徒のモチベーションを高めつつ毎年増加させていく。								
帰国・外国人生徒の受入れ者数(留学生も含む。)								
g	0人	10人						
目標設定の考え方: 受け入れ態勢を整え、進んで受け入れていく。								
先進校としての研究発表回数								
h	0回	0回	4回	2回	5回	4回	17回	10回
目標設定の考え方: 質・回数の充実の両立を図る。								
外国語によるホームページの整備状況								
○整備されている △一部整備されている ×整備されていない								
i	△	△	○	○	○	○	○	○
目標設定の考え方: 更新回数を増やし内容の充実を図っていく。								
j								
目標設定の考え方:								

<調査の概要について>

1. 生徒を対象とした調査について

	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度
全校生徒数(人)	965	963	997	997	996	998	999
SGH対象生徒数			40	56	44	69	84
SGH対象外生徒数			957	941	896	885	915

4. SGH 運営指導委員会からの評価～SGH 事業への取組の成果と課題

(1) 第1回

〈実施日時〉 平成30年10月27日(土) 13:00～14:00

〈実施場所〉 北野高等学校 校長室

〈次第と内容〉

- ① 開会
- ② 校長挨拶
- ③ 教育庁代表挨拶 (松下信之主任指導主事)

中間発表会では質疑応答が活発に行われた。また、発表会が終わった後に生徒たちが指導・助言の先生方にさらなる助言を求めている姿が印象的であった。

- ④ 代表選考および事務局より報告

* 中間発表用のルーズリックによる各グループの得点集計結果をもとに協議した結果、以下の4グループをそれぞれ外部で行われる大会や発表会に派遣することに決定した。

- i SGH 全国高校生フォーラム(12月15日・東京)

ポスター発表、英語で説明→英語系4(東南アジアに学ぶ授業中の眠気対策)

- ii SGH 甲子園(31年3月23日・関西学院大学)

口頭発表またはポスター発表 英語または日本語→社会系3(“大国の脅威に屈しない”ラオス 発展のために)

- iii 大阪教育大学附属高等学校平野校舎の発表会(31年1月12日)

口頭発表 日本語→社会系2(インドネシアで五輪開催を)

- iv GLHS 10校合同発表会(31年2月9日・大阪大学)

口頭発表 日本語→理系3(絵画と天文学)

* 事務局からの報告の中で、課題研究SGH関連講座を担当した教員から課題研究に取り組む生徒の様子についてのコメントがあった。

主なポイントは以下の通りである。

- ・東南アジア探究の中で、中国との関わりに注目するものが出てきた。
- ・イスラーム社会のとらえ方に関しては、まだ不十分な面もある。
- ・生徒の視野が拡大してきていることがうかがえる取組がある。
- ・探究活動の中で、生徒が柔軟に発想できることが注目に値する。
- ・事実の記述と感性とを融合させた取組はすばらしいと思う。

- ⑤ 協議

中間発表会において生徒から活発に質問が出るようになった背景、現在の北野生が置かれている状況(これは「特別な」境遇であること、その境遇は自分たちを支えてくれている周囲の人々のおかげであること)などの話題が出た。

〈成果〉

運営指導委員の一人から、「課題研究を担当している教員が生徒をプラスに評価していることが印象的である。この取組は平成の legacy になるのでは？」というお褒めの言葉をいただいた。

(2) 第2回

〈実施日時〉 平成31年 3月 2日(土) 10:00~11:00

〈実施場所〉 北野高等学校 校長室

〈次第と内容〉

① 開会

② 校長挨拶

③ 教育庁代表挨拶 (松下信之主任指導主事)

SGH 指定第5年次が終わろうとしている。「後継事業」をどう発展させていくかが課題。

④ 事務局より報告 要点は以下の通りである。

- ・平成30年度 of 取組で特徴的なことから～課題研究 SGH 関連講座の人数の増加、高校生公開討論を課題研究基礎講座の中に位置づけたこと など。
- ・中間報告において改善が必要であると指摘された点に対する本校の取組について
- ・課題研究の発表会では、ポスター発表を中心に据えて生徒が質問しやすい雰囲気を作ったことが、口頭発表において生徒からの質問が活発に出るようになった要因。
- ・関西学院大学アンケートなどに注目すると、課題研究の普段の取組や発表会でもらうアドバイスが生きていることがわかる。生徒の指向に合致した質問項目ならば顕著な数値が出る。
- ・課題研究基礎講座の特に学内留学について。イマージョン・プログラムという学びのプロセスが、生徒の向上心や意欲につながっている。
- ・SGH の取組に深く関われる教科と、関わりにくい教科がある。これからの運営を考えていく際には、教員スタッフの持続可能性ということが課題になる。

⑤ 協議 ～運営指導委員からの助言の中で、特徴的なものを挙げる。

- ・生徒はとにかく忙しい。だから生徒の持っている意欲を示すことが大切。生徒の取組には努力してやることと、いわゆる「やっつけ仕事」とがある。一定の結果は出すが、実は「もっとできる」という自負を持っている。生徒を本気にさせるともっとすごい結果につながる。
- ・(学内留学を例に挙げて) 英語では論旨を徹底的に単純化することによって本質を突く、論理で勝負するという考え方がある。本質を突く、論理性という力を鍛える役割を担うのが国語科や数学科では？
- ・(以前行われた北野 OB による講演のことを想起して)「世の中に貢献してこそ真のエリート」という言葉が印象に残っている。
- ・タフな生徒を育ててほしい。その意味で勉強と体力の両方を求める北野の教育は良いと思う。今の若者はストレスに弱い。回復力(レジリエンス)が重要。

〈成果〉

北野高校は教育庁との協議を通じて SGH 「後継事業」 計画作成に関与してきた。本日の運営指導委員会でいただいた数々の助言は、「後継事業」 について北野の取組を構築していく上での的確な指針になるという確信を得た。

資料

1. 平成30年度教育課程

学校整理番号 101

平成30年度 大阪府立 北野 高等学校 全日制の課程 文理学科 教育課程実施計画

入学年度		28											
教科	類型 学年	文科					理科				備 考		
		I	II	III	選	計	I	II	III	計			
科目 \ 学級数		2	2	2			6	6	6				
国語	国語総合	5					5						
	現代文 B		2	2		16		2	2		14		
	古典 A				※2	18							
地理歴史	古典 B		3	4				3	2				
	世界史 A		2					2				2年理科 #2より1科目。 3年文科 *4及び公民 *2 より計8単位。 3年理科 *4及び公民 *2 より4単位。 *4の科目は2年で履修している科目。 3年文科※2は *4 の選択者のみ履修できる。	
	世界史 B			*4					*4				
	日本史 A		2			10		#2					
	日本史 B			*4		12			*4				
	地理 A		2			14		#2					
	地理 B			*4		16			*4				
(学)世界史演習					※2								
(学)日本史演習					※2								
公民	現代社会	2				2	2					2 6	
	倫理			*2		6			*2				
	政治・経済			*2					*2				
数学	数学 I					0						「理数数学 I」により3単位代替	
	(学)数学演習 B				※2	2							
理科	物理基礎											「理数物理」により2単位代替 「理数化学」により2単位代替 「理数生物」により2単位代替 3年文科*2 より1科目を選択。 3年文科△2より1科目を選択。 ※2は化学演習Aを履修していることが望ましい。	
	化学基礎												
	生物基礎												
	地学基礎		2	*2									
	(学)物理演習 A			△2									
	(学)化学演習 A			*2		6							
	(学)生物演習 A			△2		8							
(学)化学演習 B				※2									
保健体育	体育	3	3	3		11	3	3	3			11	
	(学)ライフスポーツ				※2	13							
芸術	音楽 I	2	1			3	2	1				3	
	(学)総合音楽				※2	5							
外国語	コミュニケーション英語 I											「総合英語」により3単位代替	
	(学)英語演習 C				※2	0							
家庭情報	家庭総合	1	2			3	1	2				3	
	社会と情報												
専理数	理数数学 I	6					6					23 40	
	理数数学 II		7					7					
	理数数学特論			4					6				
	理数物理	2				2	2	□2	△4				
	理数化学	2				2	2	2	6				
	理数生物	2				2	2	□2	△4				
専英語	課題研究							1					
	総合英語	5	1			17	5	1				17	
	異文化理解		2					2					
	英語表現		3	2				3	2				
英語理解			4					4					
学特別研究	(学)国際情報	2				3	2					2	
	(学)文科課題研究		1										
	(学)大阪大学基礎セミナー		+1			+1		+1			+1		(他) 大学における学修
教科・科目の計		33	34 35	31	2	100 101	33	34 35	33	100 101			
特別活動	ホームルーム活動	1	1	1		3	1	1	1	3			
総合的な学習の時間		1		1		2	1		1	2		2年は「課題研究」、「文科課題研究」により1単位代替	
総 計		35	35 36	35		105 106	35	35 36	35	105 106			
選択の方法		3年 ※2は1科目選択。											

平成30年度 大阪府立 北野 高等学校
 全日制の課程 文理学科 教育課程実施計画

入学年度		29											
教科	科目 \ 学年 学級数	文科					理科					備考	
		I	II	III	III選	計	I	II	III	計			
													備
国語	国語総合	5	2	2			5	6	6				
	現代文 B		2	2		16		2	2		14		
	古典 A				※2	18							
地理歴史	古典 B		3	4				3	2				
	世界史 A		2					2					
	世界史 B			*4					*4				
	日本史 A		2			10		#2			4		
	日本史 B			*4		12			*4		8		
	地理 A		2			14		#2					
	地理 B			*4		16			*4				
(学)世界史演習				※2									
(学)日本史演習				※2									
公民	現代社会	2				2	2				2		
	倫理政治・経済			*2		6			*2		6		
数学	数学 I					0						「理数数学 I」により3単位代替	
	(学)数学演習 B				※2	2							
理科	物理基礎											「理数物理」により2単位代替	
	化学基礎											「理数化学」により2単位代替	
	生物基礎											「理数生物」により2単位代替	
	地学基礎		2	*2								3年文科*2より1科目を選択。	
	(学)物理演習 A			△2								3年文科△2より1科目を選択。	
	(学)化学演習 A			*2		6							
	(学)生物演習 A			△2		8							
(学)化学演習 B				※2								※2は化学演習 Aを履修していることが望ましい。	
保健	体育	3	3	3		11	3	3	3		11		
	(学)ライフスポーツ				※2	13							
芸術	保 健	1	1				1	1					
	音 I 美 I 書 I	2	1			3	2	1			3		
外国語	コミュニケーション英語 I											「総合英語」により3単位代替	
	(学)英語演習 C				※2	0					2		
家庭情報	家庭総合	1	2			3	1	2			3		
	社会と情報											(学)「国際情報」により2単位代替	
専理数	理数数学 I	6					6					2年理科□2より1科目を選択。	
	理数数学 II		7					7				3年理科△4より1科目を選択。	
	理数数学特論			4					6			ただし、2年で履修している科目。	
	理数物理	2				23	2	□2	△4		40		
	理数化学	2					2	2	6				
	理数生物	2					2	□2	△4				
専英語	課題研究									1			
	総合英語	5	1				5	1			17		
	異文化理解		2					2					
	英語表現		3	2				3	2				
学特別研究	英語理解			4					4				
	(学)国際情報	2				3	2				2		
	(学)文科課題研究		1										
	(学)大阪大学基礎セミナー		+1		+1		+1			+1		(他)大学における学修	
教科・科目の計		33	34 35	31	2	100 101	33	34 35	33		100 101		
特別活動	ホームルーム活動	1	1	1		3	1	1	1		3		
	総合的な学習の時間	1		1		2	1		1		2	2年は「課題研究」、「文科課題研究」により1単位代替	
総計		35	35 36	35		105 106	35	35 36	35		105 106		
選択の方法		3年 ※2は1科目選択。											

平成30年度 大阪府立 北野 高等学校
 全日制の課程 文理学科 教育課程実施計画

入学年度		30													
教科	類型 学年 科目 \ 学級数	文科					理科				備 考				
		①	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ選	計	①	Ⅱ	Ⅲ	計					
		2	2	2			6	6	6						
国語	国語総合	5					5							14	
	現代文 B		2	2				2	2						
	古典 A				※2										
	古典 B		3	4					3	2					
地理歴史	世界史 A		2					2						4	2年理科 #2より1科目。 3年文科 *4及び公民 *2 より計8単位。 3年理科 *4及び公民 *2 より4単位。 *4の科目は2年で履修している科目。 3年文科※2は *4 の選択者のみ履修できる。
	世界史 B				*4					*4					
	日本史 A		2					#2							
	日本史 B				*4					*4					
	地理 A		2					#2							
	地理 B				*4					*4					
	(学)世界史演習				※2										
(学)日本史演習				※2											
公民	現代社会	2				2	2							2	6
	倫理				*2					*2					
	政治・経済				*2					*2					
数学	数学 I					0									「理数数学 I」により3単位代替
	(学)数学演習 B				※2	2									
理科	物理基礎													8	「理数物理」により2単位代替 「理数化学」により2単位代替 「理数生物」により2単位代替 3年文科*2 より1科目を選択。 3年文科△2より1科目を選択。 ※2は化学演習Aを履修していること
	化学基礎														
	生物基礎														
	地学基礎		2	*2											
	(学)物理演習 A				△2										
	(学)化学演習 A				*2										
	(学)生物演習 A				△2										
(学)化学演習 B					※2										
保健体育	体育	3	3	3		11	3	3	3					11	
	(学)ライフスポーツ				※2	13									
芸術	音 I 美 I 書 I	2	1			3	2	1						3	
外国語	コミュニケーション英語 I														「総合英語」により3単位代替
	(学)英語演習 C				※2	0									
家庭情報	家庭総合	1	2			3	1	2						3	
	社会と情報														
専理数	理数数学 I	6					6							23	2年理科□2 より1科目を選択。 3年理科 △4より1科目を選択。 ただし、2年で履修している科目。
	理数数学 II		7					7							
	理数数学特論				4					6					
	理数物理解	2					2	□2	△4						
	理数化学	2					2	2	6						
	理数生物	2					2	□2	△4						
専英語	総合英語	5	1				5	1						17	
	異文化理解		2					2							
	英語表現		3	2				3	2						
	英語理解			4					4						
学特別研究	(学)国際情報	2				3	2							2	(他) 大学における学修
	(学)文科課題研究		1												
	(学)大阪大学基礎セミナー		+1			+1		+1							
教科・科目の計		33	34 35	31	2	100 101	33	34 35	33	100 101					
特別活動	ホームルーム活動	1	1	1		3	1	1	1	3					
総合的な学習の時間		1			1	2	1		1	2					2年は「課題研究」、「文科課題研究」により1単位代替
総計		35	35 36	35		105 106	35	35 36	35	105 106					
選択の方法		3年 ※2は1科目選択。													

資料

2. 構想調書の概要

平成26年度スーパーグローバルハイスクール構想調書の概要

指定期間	ふりがな	おおさかふりつきたのこうとうがっこう				②所在都道府県	大阪府
26～30	① 学校名	大阪府立北野高等学校					
③対象学科名	④対象とする生徒数					⑤学校全体の規模	
	1年	2年	3年	4年	計	文理学科 479名	普通科 484名
文理学科	160	158	161		479	計 963名	
⑥研究開発構想名	「アジアと学び合う一夢を実現する国づくりー」						
⑦研究開発の概要	<p>以下のような研究を実施することで、実践的グローバル人材育成の教育プログラム開発を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 東南アジアの現状を知って、東南アジアの国づくりを知るための研究 ・ フィールドワーク法等、研究手法の習得に関する研究 ・ 論理的説明能力を養成するための統計的手法の習得に関する研究 ・ 外国人をはじめ様々な人々との交流と研究成果の検証評価に関する研究 ・ 「超高校生レベル」の英語によるコミュニケーション能力を養成する研究 ・ グローバルなプレゼンテーション力を養成する研究 ・ 海外研修と研究成果向上との関係に関する研究 						
⑧研究開発の内容等	⑧-1全体	<p>(1) 目的・目標<目的>全地球的視野と歴史的教養に裏付けられた、豊かな人間性と知識をもち、自国の問題と世界の問題を互いに関係づけてグローバルな社会課題を把握し、その解決と理想の実現に向けて自ら行動をおこすことができる人材を育成する。</p> <p><目標>多様な人々と共に感じ、考え、行動する資質を備えた次代のリーダーを育てるため、以下の観点から教育プログラムを開発する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 若い世代に、留学・社会貢献活動・ビジネス等を通じ、地球規模で活躍しようとする意欲を喚起する。 ・ 他国の国づくりを学び、自国の国づくりに生かすなど、他者との学びを問題解決に生かす視点と能力を育成する。 <p>(2) 現状の分析と研究開発の仮説</p> <p><現状分析></p> <ol style="list-style-type: none"> ①高い進学意欲と進学実績に示される、充実した基礎学力 ②諸大学と連携しながら、長年にわたり幅広く展開してきた探究型授業の蓄積 ③校内外・海外で実施してきた、手段としての英語スキル習得プログラムの実績 ④TOEFL iBT complete testの結果、発信力が劣っていることが判明。 <p><課題>①②③に示した実績は、それぞれに生徒の資質向上に効果をもたらしてきたが、その高い能力をより大きな視点から、何のために、どのように発信すべきかという主体的発信力の養成に関する学びの場と機会が不足していたことが大きな課題であると判明。</p> <p>本校のこれまでの取り組みを発展的に生かし、かつ、現実社会に学びつつ、アジア地域を対象とした研究と交流を通して能力の総合的活用力を向上させる教育プログラムの研究開発を企画した。</p> <p><仮説>①現状の生徒の能力や本校の取り組みの実績を基礎として、新たな教育プログラムに取り組みせることで生徒の基礎力を高めることができる。②新たな実践的探究型教育プログラムを開発し、そのプログラムの実践を通して、生徒は世界の多様な人々と問題意識を共有するようになり、グローバルスケールでの思考力・発信力が身に付き、真のグロ</p>					

	<p>ーバル人材となる。</p> <p>(3) 成果の普及</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本校主催国際会議を開催し研究開発成果を発表。議論により学びを深める。 ・大阪府指定 GLHS(進学指導特色校)主催、京大キャパスガイドやGLHS 10校合同発表会で英語による研究発表を行う。 ・学校ホームページで日本語、英語により研究成果を全世界に発信する。 ・近隣の小中学校や地域住民を含めた一般参加型公開発表会を実施。 ・グローバル企業内での部門会議へ参画及び提言と実践。(予定)
<p>⑧ -2 課 題 研 究</p>	<p>(1) 課題研究内容 成長著しい東南アジア諸国を比較文化的、経済的、歴史的アプローチ等で探究し、得られた成果を日本の国づくりに生かす。</p> <p>(2) 実施方法・検証評価</p> <ol style="list-style-type: none"> ① <比較文化的アプローチ>日本国内とアジア諸国の広告表現(デザイン・コピー)などを切り口に探究・考察する。 ② <経済的アプローチ1>実際に進出している企業を事例に取り上げ、日本企業の東南アジア進出状況や経済的問題の背景について探究・考察する。 ③ <経済的アプローチ2>自然災害の多い点で、日本と東南アジアは共通している。進んだ防災技術を持って東南アジアに進出している日本企業を事例に取り上げ、日本企業の東南アジア進出における課題と可能性について考察する。 ④ <歴史的アプローチ>東南アジアの国づくりに重要な役割を果たした「労働力の移動」としての移民問題について探究する。 <p>専門家による検証評価を受ける。</p> <p>(3) 必要となる教育課程の特例等 特になし</p>
<p>⑧ -3 上 記 以 外</p>	<p>(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価 必要に応じて「グレード1・グレード2」を設定。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① <基礎力養成部門>研究手法、統計処理法、地政学等の基礎知識の習得。 ② <交流部門>研究指導者・留学生などと交流会をもち、研究成果の発表と意見交換を実施し、次年度への課題を設定する。 ※①は検定試験を実施。②は研究者の評価を受ける。 ③ <語学養成部門> <ol style="list-style-type: none"> i. 「TOEFL iBT SEMINAR」外国人講師を採用し、英語科教員とともに、英語のみを使用した講座を実施する。到達度の把握のために年に2度、LAN 教室にてTOEFL iBT complete test を実施し検証する。 ii. 「ハワイ大学マノア校での次世代リーダー養成プログラム」ハワイ大学マノア校と連携し、全て英語の語学セミナーを実施し、英語によるディスカッションの研修を実施する。研修後のレポート作成や生徒向けアンケートから研修の成果を検証する。 <p>(2) 課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等 特になし</p> <p>(3) グローバル・リーダー育成に関する環境整備, 教育課程課外の実施内容・実施方法</p> <ol style="list-style-type: none"> ①「学内留学講座」週あたり1コマ、通年で実施。「法学」「経営」「教育」「心理学」「サイエンス英語」の5コースに分かれて、外国人講師により、英語で授業を実施。 ②アメリカセントウッド高校との相互短期交換留学及びインターネット会議。 ③台湾第一女子高級中学校、建国高級中学校との交流と共同研究の実施 <p>(4) 幹事校としての取組(該当する場合のみ記入) なし</p>
<p>⑨その他 特記事項</p>	<p>特になし</p>